

---

# くるくるまわる

虹那駆並

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

くるくるまわる

### 【Nコード】

N8744M

### 【作者名】

虹那駆並

### 【あらすじ】

第一幕：この僕、冬月直弥のなんとか保たれていた曖昧な人間関係は、この夏、学校内で起こったある首絞め殺人事件によって、全て崩壊した。

第二幕：僕は今回、生徒会という組織に接触した。それは常識外れも甚だしい、イレギュラーであった。そして起こった密室殺人事件。犯人はどのように密室を形成したのか？

第三幕：夏休みに訪れた祖父の家で、親戚の車いすの少女が殺された。死体のそばには謎のダイニングメッセージ。犯人は？

第四幕：謎の組織、葡萄会。彼らと僕はこの度接触することとなった。そんな中、妹の流々が誘拐された。生徒会と僕は真夜中、流々を助けるため葡萄会が待つ学校に侵入する。

## もやもやかんけい

0

僕、冬月直弥ふゆつき なおやの人間関係を語るとはそれほど難しいことではないが、しかしそれを理解することはかなり難しいだろうと思う。

人間関係というものがそもそも曖昧なものだ。

不確かで不安定で、なんとか現状を維持しているだけのようない、空疎で霧中なものだ。

僕の場合は、それはさらに酷くなっていて、今にも崩れ落ちてしまいそうな頼りないものだ。

しかしその僕の曖昧ながらも平静を保ち成り立っていた人間関係は、この夏、ある殺人事件によって、全てぶち壊されることになった。

まあ、この物語を見てみるといい。きっと君は、理不尽で倒錯的で常軌を逸したその事象に、狂おしくも戦慄し焦燥し茫然自失することだろう

1

「ねー直弥ー、大人って子供のこと随分とナメてると思わないー？」  
「ん？」

いつも通り、僕の部屋、僕のベッドの上に寝転がっている楓かえでが、突然、やはりいつも通りのどこか間延びしたようなゆったりとした口調で声をかけてきて、僕は宿題であるワークを解く手を止めて、そちらに振り返った。

この場合「ナメる」というのは『舌の先でなじる』という行為のことではなく、おそらく『馬鹿にする』という意味であろうと推測し

て、僕はその同意を求めているらしい質問に、答える。

「そうだな、確かに楓の言うとおりだ」

「そうでしょ？ でもさ、これっておかしいと思うんだ」

「どこがおかしいと思うんだ？」

僕はシャープペンシルをまだ手に持っていたのだが、それを机の上に放り投げた。『宿題をやる片手間に話をしている』と楓に思われたくなかったからだ。

「大人も昔は子供で、きつとその頃、私達みたいに大人は子供をナメてるって思ってたはずでしょ？」

「ああ、そういうことな」

僕は椅子から立ち上がり、ベッドの上に 寝転がっている楓の傍に 腰掛けた。

「つまり《大人は子供をナメていて子供は本当はすごいんだ、というのを幼い時に思っていたはずなのに、自分が大人になるとその子供達をナメ出すのはおかしいことだ》ってことだな？」

「うん、そうだよ」

確かに、それは思考すべき問題かもしれない。

しかし、その理由はいたって簡単だ。

この世界に、考えてわからないことなんて一つもない。

「人は成長するだろ？」

「にゅ？ えーっと、うん、そうだけど、私の話と関係あるのかな？」

「あるよ。まあ聞けって」

「うん」

僕はちゃんと楓の目を見て話をする。

楓と話すときは、いつだって真剣に。それは僕の中の曲げられない決まりの一つだ。

「実際劣化していてもどうだとしても、人は自分が過去と比べ成長していると考える。するとだ、大人からしてみれば、《大人の成長する前》が《子供》なのだから、つまりは子供を下に見るというこ

とだ」

「そつか。そうなんだね、きつと。えへへ、直弥は頭いいなー、にゅ？」

「どうした？」

「直弥髪ずいぶん伸びたよね。夏だというのに暑苦しいですよー、切ってあげようかー？」

「うーん、楓が切るとグロくなるからなー」

「グロくなる！？ 別に私直弥の頭切断しようって言うてるんじゃないよ！？」

「今度自分で髪切り行くから気にすんな」

「あいあいさー。直弥、もうそのコーイー全部飲んじやった？」

「コーイー？」

「コーヒーだよ！ 噛んだの！ 分かるでしょ！」

「いいや、まだ残ってるけど、飲む？」

「うんうん」

僕は一旦ベッドから立ち上がり、机の上に置いてあったコーヒーカップを手に取り、またベッドの上に戻った。

「まだ熱いぞ」

「りょーかい、ってあちゅッ！」

手渡すと、楓はその熱さに驚いたらしく、コーヒーカップを落としそうになったが、なんとか持ちこたえた。楓も体を起こし、コーヒーカップに口をつける。

「あー、そろそろフロ入ってくるかな。僕が上がるまでには部屋に戻ってるよ」

「嫌だもーん」

「もしも僕が戻ってきたときにまだここにいたら追い出すからな」

「今日は泊まっちゃ駄目なの？」

「今日も泊まっちゃ駄目なんだよ」

「だって、ここで寝れば、私の部屋のエアコンを使わなくて済む分、我が家の家計には余裕が出てくるのであります」

「ここに寝てたら窓から突き落とす」

「直弥ひどいよー」

「まあね」

僕は自分の部屋から出る。

階段を下り、一階へ。

妹がちょうど風呂から上がったところだった。

「お兄ちゃん、また楓ちゃん連れ込んでますでしょ？」

タオルを頭に巻いてパジャマ姿の二歳年下の妹は、呆れ顔でそう訊いてきた。

「いいや、連れ込んではない」

「勝手に入ってきた、ですか？ もう、シャワー浴びてても聞こえてきましたよ、楓ちゃんの声」

「どんな声？」

「《あちゅっ！》って聞こえてきました。パパとママにもバレちゃいますよー」

「まあいいじゃないか。はいはいおやすみ妹よ」

「グッドナイトです、我が兄よ」

妹はそう告げて、リビングへと入っていった。

僕は風呂へ。

姫宮楓<sup>ひめみや</sup>の家は、僕の家のおすぐ隣だ。もうくっついてるといふ表現でいいくらいに、二つの家の間には隙間がほとんどない。

そして僕の部屋なのだが、この僕の部屋は我が家の二階一番端に位置しており、その窓の一つは、開けたらすぐに楓の家が目の前にある、という位置についている。そして、その僕の窓に完璧に向かい合うように、楓の家の窓がそこにはついていてる。その窓が、楓の部屋の窓なのだ。

なので、僕と楓は、その窓を利用して互いの部屋に行き来することが可能なのだ。もっとも、二階の高さで、隙間もそりゃあ少しはあるので、ミスれば怪我につながるだろうが、今のところそんなこ

とは起こっていなかった。

僕と楓は同級生であり、友達だ。只今中学三年生の僕と楓が最初に会ったのは、楓が隣に引っ越してきた二年前のことで、すぐに仲良くなったのを覚えている。

僕にとって楓は、ほとんど家族のようなものだ。

考えてみると、妹よりも親しい。

とにかくそんな楓なのだが、僕が風呂から上がり部屋に戻ると、やはり僕のベッドの上で熟睡していた。

僕は寝ている楓の頭を優しく撫でてから「おやすみ」と言って、部屋の電気を消し、床の上で眠った。

2

「ほら楓、起きろよ」

翌日、朝になって、僕は楓の体を揺さぶって、楓を起こした。  
今日は学校だ。

「む……うん、ま、まだ眠いようー」

「てい」

パシ。

「う」

頭を一発叩くと、楓は意識をやっと覚醒させたようだった。

と、直後、顔を真っ赤にして、体を小刻みに振るわせ始める楓。

「み、見たな！？ 寝顔見たな！？」

「はいはい、堪能させていただきました」

「へ、変態！ 帰れ！」

「お前が帰れ」

楓に時計を見せる僕。

楓の表情が、驚愕のそれになる。

「ああ！ 遅刻しちゃうよ！ 直弥もう制服に着替えてるし！ なんでもっと早く起こしてくれないのさ！ いじわるいじわるい」



る！」

喚き散らしながら、楓は窓を開けて、自分の家へと帰っていった。

「先行ってるなー」

「ああ、待っててよ待っててよ、お願い直弥待ってて！」

「はー、遅刻しなきゃいいけどなー」

僕は呟いて、鞆を持つと、家を出た。

「暑いよなー、太陽死ね」

「太陽死んだら地球は滅びますよう」

と、僕に続いて髪型をツインテールにした妹も出てくる。

「お兄ちゃん、今日も楓ちゃんと登校ですか？」

「うん、仕方ないからな」

「優しいですねー。でも遅刻しちゃいますよ？」

「それも仕方ない」

「そうですか、ではでは、流々るるはお二人の邪魔しちゃいけないので」

流々というのは妹の名前で、妹は中学一年生にもなって未だに自分のことを「流々」と言う。

「おいそういう言い方やめろよ」

「にやははー」

妹はほろほろ笑いながら駆け出していった。この暑い中走ったりして、倒れたりしないかな。と少し心配する。

それからしばらく僕は、楓の家の前で、楓が来るまで待っていた。

僕と楓が遅刻寸前ギリギリの時間で南校舎三階にある三年二組の教室に入ると、春風はるかぜ蒼波そうはが僕らに近づいてきた。

「ふふ、二人とも息を切らしてらしくないね。どうしたんだい？」

楓と同じく、髪を肩のところで切りそろえたショートカットの蒼波は、微笑しつつ、その大きな目で僕を見つめながら、楽しそうにそう問いかけてくる。

「家が出るのが遅くてね」

「ふふ、なるほどなるほど、まあ考えてみれば分かりそうなものだ

ったか。僕としたことが愚かだったな、お恥ずかしい話だよ、人生上最悪の失態だ」

蒼波は女子のくせに、一人称は「僕」だ。

「というか、直弥くんが私を起こしてくれなかったのが悪いと思うな」

楓は僕と二人きりでない場合、僕のことを「直弥くん」とくん付けで呼ぶ。僕に対してひどく甘えん坊の楓だが、それも僕と二人だけの時に見せる顔だ。

「……ああ、君らは家が隣なのだもんな。それにしても汗びっしょりだね。着替えたまえよ」

「その前に顔洗うかな」

「それは重畳、ふふふ」

蒼波はやはり楽しそうに笑いながら、自分の席へと戻っていく。

うゝん、何だったんだろう。何故か最近蒼波はよく僕に話しかけてくる。

そんなことを考えながら、僕はベランダに出て、水道水で顔を洗う。横で楓も同じようにしている。

「ねえ直弥」

「ん？」

「えーっと、その……蒼波ちゃんと、あまり、仲良くしないでほしいかも」

歯切れ悪く、僕と目をあわせようとししないで、楓はそう言ってきた。

僕はその楓の頭の上に手を置くと、わしゃわしゃと楓の髪をかき乱してやった。

「ひゃっ、ひゃっ、な、何するかな！？ うわん、髪がぐちゃぐちゃにいい！」

「ははは」

僕はそこで手を離す。

「楓こそ、優奈と仲良くしないでくれよ」

「ゆ、優奈ちゃんは女の子でしょ！」  
楓がそう言ったのと同時に、チャイムが鳴り、その話はそれまでとなった。

「なあ、姫宮つてお前の彼女なんだろう？」

給食の時間になって、机を班の形にして僕が食パンにイチゴジャムをかけている時に突然隣からそう訊いてきたのは朝片翔伍あさかたしょうごという男子生徒だった。

短髪で、野球部の部長を務めている翔伍は、勿論運動神経バツグンで、ガタイもよく、僕とはタイプの全く違った男だ。

「いいや、そんなことは断じて全く全然ないよ。なんなら嘘発見器を持って来いよ。証明してやる」

「またまた嘘つき直弥は嘘ばかりだな」

「僕のあだ名は“嘘つき直弥”じゃない。君のネーミングセンスは名前通り小学五年生レベルだな」

「話逸らすなよ。てか、そうなのか？ てっきり恋愛関係だとばかり」

「違う違うふざけんな。知らないのか？ 僕はシスコンなんだぜ」

「……。あーっと、何だっけお前の妹の名前、オノマトペみたいな名前だったよな」

「なめんな、僕の妹の名前は「チヨロチヨロ」とか「びよーん」とか「シットリ」ちゃんなのか。僕の妹の名前は冬月流々だ」

「一年生だっけか？」

「ああ中一だ、小五の君より上だぜ」

「ちよいちよいからかってくんのやめろ。にしても、へー、意外だな。お前からあんなにいちやいちやしてんのに」

「してないよ」

「してんだろ。好きじゃないのか？」

「好き過ぎてやばい。理性保てない」

「姫宮もお前のこと好きだよな」

「君が蒼波のこと好きなくらいは好きかもね」

「話摩り替えんな。だいたい蒼波は友達だ幼馴染だ」

春風蒼波と朝片翔伍も家が近く、話によると幼稚園の頃からずっと一緒にいる。

「幼馴染のこと好きなんじゃないかなんて言われると、急激に萎えるぜ。ところでよ、お前と姫宮、互いに好きなのは分かりきってるだからさ、告白とかすればいいのによ」

「いいよ、そういう風に関係性をはっきりさせるのって嫌いなんだ。曖昧なのが心地いい。このままでいさせてくれよ」

「……なあ直弥」

「ん？」

今まではお互い給食を食べながらの会話だったのだが、しかしそこで翔伍はこちらに体を向けてきて、とても深刻な顔つきになった。「お前さ、マジな話で、姫宮が好きか？」

「あ？」

なんだよ、さっきそう言っただろ。ふざけて言ってると思われちゃったのかな。やっぱり普段嘘ばっかっていると信用なくなるんだな。

「他に好きな奴っていないのか？」

「……うーん、どうだろ」

考えてみる。……いないかなー。

と、翔伍は次は僕の耳元に口を寄せて、小声で言ってきた。

「蒼波、お前のことすっげえ好きだってよ」

「ああ、知ってるよ」

結構前から、気付いてた。露骨すぎるからな。

「なんだ知ってたか。で、お前は蒼波のことどう思ってるの？」

「クラスメイト」

即答すると、翔伍は眉を顰めた。

「それ、最低だな」

「まあね」

「蒼波、本気だぜ」

「ああ、だろうな。悪戯いたずらで好きになられても困る」

「知つての通り、オレはアイツと付き合い長いけどさ、蒼波があんなに人を好きになるのって始めてなんだよ。なあ、応えてやってくれねえかな？」

「別に蒼波のこと嫌いじゃないけどね」

「やっぱ姫宮が好きなのか？」

「……分かんねえよ」

僕はそこで給食を食べ終わり、お盆を持って席を立った。

蒼波の方を見ると、目が合った。慌てて目を逸らす蒼波。うーん、蒼波も可愛いんだけどな。

「直弥くん、《お前の気持ち分かるよ》って台詞せりふについて、どう思う？」

昼休みになつて、楓が読書をしている僕のところへやつて来て、そう言った。まわりにクラスメイト達がいるので、くん付けなのだろう。口調も、僕の部屋でのときみたいに間延びしてはいない。

僕は本を閉じて机の上に置くと、楓のほうに体を向ける。

「私はね、こう思うんだ」

問いかけておきながら僕の答えを待たずに、楓は話を進める。

「私達の場合は十五年くらい皆生きてるワケでしょ？　でさ、人それぞれ、いろんなことを思つて考えて感じて生きてる。十五年間積み重ねて、その時何かを感じてるわけだよ。その十五年つていうのは人それぞれ違ってて、それなのに他人に《お前の気持ち分かるよ》なんて言われたら、正直嫌だと思わない？　自分の十五年間を軽く扱われてる感じっていうか、ないがしろにされてるっていうか」「ああ、そうだな。楓の言うとおりでと思うよ。なんでそんなこと訊いたんだ？」

「優奈ちゃんから借りてる本に、その台詞が出てきてて」

「優奈のオススメの本つーと、バトル系の過激なやつか？」

「……えーっと、いやー、今回は違うかなー」

ああ、ボーイズラブ小説か。ただそれを口に出すと楓は顔を真っ赤にして慌てて否定するから、今ここでそれをやるわけにはいいかな。

と、その時。

「あ、直弥、シェイクスピアを読んでののか。ふむ『ハムレット』、名作だね。ふふふ。僕もよく読むよ」

そう言っ僕隣の席に勝手に腰掛けたのは蒼波だった。

「ああ、小説というやつに少し飽きてね。今戯曲を片っ端から読みあさってるんだ」

「へえ、そうか。うん、戯曲はいいよ。戯曲はいい」

「何かオススメはあるか？」

「ゲーテには手を出したかい？ まあ、『ファウスト』だね」

「ああ、『ファウスト』は小さい頃に第一部を読んだだけだな。なにぶん幼かったからさ、よく分からなかった。そうか、また読んでみようかな」

「うん、それを推奨しよう。今読むと、全然違って感じると思うよ。感性というものも成長するからね。それに、第二部を読んでいないとは勿体無い」

ちらり、と楓を見ると、なんだか俯いて、泣きそうな顔をしていた。自分との話を取りやめて蒼波と楽しそうに会話している僕を見て、そうなっているのだろう。僕は誰からも見えないように、無言でそっと、楓と手を繋いだ。指を絡ませ、強く握る。

「さて、閑話休題だ。直弥、君、次の日曜は空いているかい？」

「大抵僕のスケジュールは空いてるよ」

「それは好都合だ。ふふ、どうだい直弥、一緒にどこか行かないかい？」

「……」

楓が、僕の手には爪を立ててきた。

断らないと、楓を悲しませてしまうことになる。

こんなに平和な学校の教室で、冬月直弥、最大のピンチに陥っていた。

無言の僕に、蒼波は不安そうな表情をする。

「ん、もしかして、駄目かな？ まあ、僕と君は学校外で会ったことなど皆無だからね、すまない、困らせてしまった、よね……」  
「いや、いいよ」

一瞬、止まった。

時間が、世界が、停止した。

しかしそんなのも所詮は一瞬の話。

時間は止まらない。継続して、進むしかない。

「本当かい？」

目を輝かせて、若干前傾姿勢になって、嬉しそうに蒼波はそう尋ねてくる。

「ああ、本当だ。どこに行こうか？ 誰と行こうか？」

「あ、えーっと、二人だけじゃ、駄目かい？」

「駄目じゃないさ。全然問題ない」

す、と。僕の握っていた楓の手が、離されるのが分かった。しかしそちらは見ずに、僕は蒼波と会話を続ける。

「そうだな、この季節だから、外は暑いだろうね」

「直弥の言うとおりだ。じゃあ屋内ということになるのか……」

右手の指先で唇を撫でつつ首をかしげる蒼波。考え中のポーズらしい。

楓が教室から走って出て行くのを、僕は横目に見た。

3

一人での下校になった。

楓は放課後に委員会の話し合いがあるようで、帰宅部の僕は一人

で帰るしかない。

夏なので、あたりはまだ明るい。

「暑いよなあ……」

今日は火曜日だ。水・木・金とまだ学校が三日も続くと思うと、憂鬱になる。僕の中学はプールがなく、このクソ暑い中、現在やっているのはハードル走だ。体育教師め、いつか復讐してやる。

冗談だけどさ。

住宅地の中を、家に向かって歩き続ける。

結局昼休み以降、僕は楓と一度も口をきいていない。楓のほうから僕を避けているようだ。

悪いことしちゃったよな。

罪悪感を感じながらも歩いている時、

カチャリ。

唐突に。

背中に、背後から何かを、押し付けられた。

「まったくお前という男は、本当、一度死んだほうが良さそうだな」  
もっとも、現実世界は一度死んだらゲームオーバーなんだけどさ、とそう続けるその声。

誰か、なんて明白だ。

僕は振り返る。すると、今まで背中に押し付けられていたものは、今度は額へ。

「動くな、と常套句を添えておこつ。冬月直弥」

憤ったような声でそう言う目の前の少女が僕の額に向けているのは、ライフル銃の銃口であった。

いや、ただの女子中学生がライフル銃など所持しているわけがない。

エアガン。

しかし、こんな至近距離で撃たれて平気ということはあり得ない



だろう。

「エアガンは学校で禁止されてんだろ。だいたい、下校中だ。もしかして、学校に持ち込んでるのか？ 優奈」

津辻優奈。

楓の、親友。

三年三組に所属する、ポニーテールの女子生徒。

優奈は、僕を睨み付けている。

もともと、僕と優奈は仲がいいとは言えない。楓のことで、優奈は僕に対抗意識を持っているようなのだ。まさしく、いい迷惑だ。

名前と違い、全然優しくなんてない。

「今更な質問だな。私がエアガンマニアなのは知っているだろう。それと馴れ馴れしく私を下の名前で呼ぶな。ヘドが体中の穴という穴から出る」

言いながら優奈は、エアガンの銃口を僕の額に、より強く押し付けてくる。僕はそれに誘導されるようなかたちで、住宅の塀に背中をつけ、追い詰められることになった。

「こいつは電動ガンって言うてな、電気を使ってモーターを回転させ、その回転力でバネを押し縮め、バネが伸びる勢いでBB弾を発射するっていう仕組みだ」

解説されても現状を打破することにはまったく役立たない情報だったが、とにかくそのBB弾はちゃんと装填されてるのだろう。

エアガンなんかで死なないことは当然分かってるけど、痛いのは嫌だ。

「この威力は半端じゃないぞ。対象年齢十八歳以上のものだ」

おいおい。

「冗談じゃねえよ。」

「用件だけ簡単に述べよう。冬月直弥、楓を傷つけるな」

「……」

ああ、やっぱりそのことか。

「今日の昼休み、泣いて私のところに来たぞ。本当、私はお前を殺

してやりたい。いいか、春風とは今後一切会話をするな」

僕は無言で頷く。

「今日が初めて、というんじゃない。楓はな、一ヶ月も前からお前と春風との仲に悩んでいた」

まあ、そうなるだろうな。

しかし口に出すと撃たれそうなので、あくまで僕は何も言わない。「泣いたのも今日が初めてじゃない。楓は我慢する子だからな。お前の前でその不満を漏らすことなんてほとんどなかったはずだ。そう考えると、楓がお前と春風とのことで悩んでいたのは、一ヶ月なんてものじゃないのかもしれない。私に相談してくるだなんて、相当に我慢に我慢を重ね、ついに耐え切れなくなったということだろう」

それはそうだ。

楓は、自分のことで他人に迷惑をかけたがらない。意外と塞ぎこむ奴なのだ。だから僕は、楓を傷つけないように気を遣ってきた。なのに、これだ。

「まあ、今日はこれだけにしておこう。じゃあな、冬月」  
そう言つて優奈はエアガンを僕の額から離して、直後

ズガンッ！

「ッてえ！」

一発、この至近距離で、僕の額に撃ちやがった。

僕は堪らず、その場に屈み込んで、額に手をやり、暴れる。

優奈はふつと笑つて、踵を返した。

「くううう……」

しばらく痛みは消えなかった。

家に着き、僕は真っ先に自分の部屋へ向かった。

その途中、妹の部屋の扉を開けた。

「わっ！ お、お兄ちゃん、いきなり扉開けないでください！」  
着替え中だった。

顔を真っ赤にして、服を抱きかかえるようにして自分の体を隠す妹。

どうやら妹も、ついさっき帰ってきたばかりらしい。

僕は扉を閉める。

少しして、扉ごしに妹が声をかけてくる。

「お兄ちゃん、も、もう入って、いいですよ」

別に用事なんてなくて、なんとなく扉を開けたただけだったのだが、まあそんなことを言われたので、僕は再び扉を開けて、妹の部屋に入る。まあ、当然楓は帰ってきてないだろうし、ここで少し時間を潰すか。

妹の部屋は、久しぶり、だな。

妹は制服から、上はピンクのパーカーで下はショートパンツという格好に着替えていた。

髪はいつも通りのツインテール。

「お兄ちゃんが流々の部屋来てくれるの、ひ、久しぶりですね！  
う、嬉しいです！」

先ほどのことを引きずっているのか、喋り方がぎこちない妹だったが、嬉しいのは本当らしく、笑顔だった。

「今日は部活やってこなかったのか？」

妹は写真部に所属している。何をする部活なのか、細かいことは知らないけれど。

「うん、今日はサボっちゃいました」

えへへ。と笑う妹。

「ふうん。ま、写真なんて撮ってないんだろ？」

「えーっと、まあ、そうですね……。流々が写真部選んだの、数学の問題解いてて良いからですし」

「やっぱ今も好きなのか？ 数学」

「はい、好きですよ」

僕は妹のベッドに腰掛け、部屋を見回す。本棚も机の上も、数学の参考書やら問題集やらで溢れている。

妹は、病的なまでの数学マニアなのである。

与えられた情報の中から、さまざまな視点からのアプローチにより、たった一つの答えを導き出す作業と、その答えを導き出した瞬間が、最高の快感 らしい。妹によると。

頭の良い妹だが、特に数学では、当たり前前に学年トップの成績を獲得している。ここら一帯で見ても、数学で妹に勝るものはいないだろう。下手をしたら、教師よりもできるかもしれない。

すでに妹は、数学においては、大学までの知識をすべて修得しているらしかった。

「お、お兄ちゃん、」

「ん？」

妹は、僕の前に立って、何故か顔を俯かせてもじもじしている。

「え、えっと、その……」

妹のこんな様子は珍しいことだ。いつも思ったことをそのまま口にする妹なのだが。

「何？ 言いたいことがあるなら早く言えよ」

「あ、あの！」

妹はさっと、僕の隣に移動し、何故か知らないけれど正座した。

「お兄ちゃん、もう私のこと、嫌いなんですか？」

目を見ずに。妹はそう尋ねてきた。

前髪に隠れて、その表情は窺えない。

……。

僕は疑問に思った。

妹は、何を訊いているのだろう、と。

そんな言いにくい質問だろうか。

「嫌いじゃないよ」

僕は普通に、そう答える。

何故そんな質問を妹がしたのか、全然分からない。  
家族だし、嫌いなわけがないだろう、と思う。

妹が、顔を上げた。

安心した、そんな顔をしていた。

「僕が流々のこと、嫌いになるわけねーだろ」

僕はそう最後にもう一度告げてから、立ち上がる。

ぐっと、伸びをする。当分楓は帰ってこないだろうけど、その前に宿題を終わらせておくのも手だ。物置をあさって『ファウスト』も探さなきゃだし。

部屋を出ようとした僕の背中に、妹は慌てたように、  
「る、流々もお兄ちゃんのこと嫌いじゃないですよ！」  
と言ってくる。

僕は振り向く。

「当然だろ、そんなの」

本当、妹の様子は少しおかしい。

部屋で宿題をしている最中にふと気付いたのだが。  
楓は帰ってきたところで、僕の部屋には来てくれないかもしれないかもしれない。  
い。

蒼波のことで、怒っているらしかったし。

そして案の定、楓は僕の部屋に一向に来なかった。

「謝らなきゃだよな……？」

仕方なく、僕は自分の部屋の窓から手を伸ばし、楓の部屋の窓を叩いた。楓の部屋の窓は、鍵がかかっていた。カーテンも締め切つてある。完全拒絶状態。

「おい、楓ー」

どんだん、と叩く。

反応ナシ。

相当怒ってるな。

まあ、ただ単に部屋にいないということも考えられるが……。時間的に、家には帰ってきてると思うんだけど。

カチャリ。

「お」

楓が鍵を開けてくれた。制服姿。

しかし、喜んでばかりもられない。

明らかに楓は意気消沈していた。

顔を俯けて、目はうつろだ。頬に、涙が伝ったことを示す筋が残っている。

楓は怒ることはない。

楓は落ち込むことしかない。

「……」

鍵を開けてくれたはいんだけど……、

続かねえー。

どうしたらいいか、分からない。

「……」

とりあえず何も言わずに、僕から楓の部屋に入った。

楓の部屋は久しぶりだ。ほんの少しの隙間だが、さすがに二階の

高さ　飛び移るときは少し怖い。

楓の部屋。僕の部屋と同じくらいの体積、つまりはあまり広くはない。

アイドルのポスターとか、そういうものは貼っていないし、女子中学生の部屋のイメージからは少し遠い。まあ、女子の部屋なんて実際はそんなものかもしれない。

「えーつと……」

僕は言葉に詰まる。

楓はまだ俯いたままだ。僕の隣に立っている。僕のほうが頭一つ分くらい背が高いから、この角度だとその表情は窺えない。

とりあえず、後ろ手に窓を閉める。

「……ごめん」

「……………」

楓は何も言わない。

うわぁ。

最悪。

僕が再び何も言えないでいると、今度は楓の方が口を開いた。

口を開いてくれた。

俯いたままだけど。

「直弥、蒼波ちゃんと、どっか、行くの？」

……。

やばい。

どう答えたものかな。

でも、嘘をつくのはよくないだろう。

楓にだけは、嘘をついちゃ駄目だ。

「ああ、行く」

だから僕は、そう答えた。

「……どこに？」

楓の声が、少し震えていた。

「駅前のショッピングモール。買い物に付き合っことになった。次

の日曜」

「……そうなんだ」

そこで、会話がまた止まる。

まずい。とてもまずい状況だ。

優奈の言葉が思い出される。

冬月直弥、楓を傷つけるな。

このままだと僕、明日、殺されちゃうかも。

何とかしなければ。

だから僕は、最悪の手段を用いることにした。

「おい楓、こんくらのことで怒るなよ。別にいいじゃん」

「……ッ！？」

楓が、パツと顔を上げた。

僕と目が合う。

表情が、驚愕のそれだった。

しかしすぐに、楓は視線を僕から逸らす。顔を、横に向かす。

「僕だってな、お前としか遊ばないなんて無理なんだよ。人間関係がある。友達は別にお前だけじゃない。お前も優奈がそうだろ？」

僕もそうなんだよ」

「……」

楓が、唇をかみ締めているのが分かった。

楓の手が、プリーツスカートの裾を握り締めているのも分かった。でも僕は、構わず続ける。

泣くのを必死にこらえている楓に、話を続ける。

「だから僕は、蒼波と日曜、買い物に行く。これはな、別に恋愛感情とかとは無縁なことなんだよ。友達だ。僕は蒼波と仲良くしたいし、別に蒼波だけじゃない。勿論、僕にとって一番大事なのは楓だ。でもさ、楓だけってのは、おかしいんじゃないか？ それは理不尽ってやつだ。もう一度言うけど、僕だってな」

「……帰って」

あるかなしかの声だ。

楓が、言った。

震える唇で。

目の端に、涙をためて。

「……ああ、そのつもりだ」

僕は窓を開けて、楓の部屋から出た。

「明日の朝、一緒に行くか？」

楓は僕の方を、見もしない。

泣いてるのが、簡単に分かった。

「帰りは、また委員会か？」

楓は答えてくれない。

「違かったとしても、もしかしたら一緒に帰れないかもしれないねえ。」



蒼波ってさ、放課後は野球部の翔伍待つのに、南校舎の四階の一番西の階段の上とこで本読んでるんだってさ。だから、明日気が向いたら、僕も行こうと思う」

楓は何も言ってくれない。

僕は自分の部屋の窓を閉めながら、最後に言った。

「蒼波と話すの、楽しいからな」

一種のあてつけ、だった。

僕も憤っていたんだと思う。

鍵を閉めて、カーテンも閉める。

僕と姫宮楓はこの時初めて、互いを拒絶した。

・ ちやちやかんけい 霽霽関係、終わり・

・ しめしめころし、へ・

## もやもやかんけい（後書き）

「琴吹闇斗のペルソナ崩し」等を読んでくださった皆様はこんにちは、そうでない方は始めまして 作者です。

この小説は、推理小説です。そのくせこの第一話で一つも事件が起きていないのはどういうことだよ、とか突っ込まれそうですが、推理小説です。推理しまくります。ミステリです。もう事件事件の雨あられです。

……と言いますと、すこし過言なんですが。

では、なるべく迅速な執筆を心がけ、面白いもの書けるよう頑張りますので、「くるくるまわる」をどうかよろしく願います。  
では。

## しめしめころし

0

自分の周りの異性のうちほとんどが自分に好意を抱いている、ということには、疑問をはさむ箇所が全くない。

それは全然不自然じゃない。

理になっっている、と言ってもいい。

なぜなら、異性とある程度時間を共有すれば、その異性のことを好きになる、というのはなんら不思議でないし、好きな異性に近づく常に周囲にしようとする、というのモやはり不自然でない。

だから自分に近づいている異性のうち何人かが自分に好意を抱いている、というのは当然のことである。

で、告白を受けたとしようか。好きです、みたいに。

そしてその相手が、自分にとっては特に好きでもない人間だった場合の適切な返答は『ごめん。僕好きな人いないから』というものだと思う。

しかしこれがどの時でも最適な返答であるとは限らない。

状況によっては、他に最善の行動があるだろう。

僕は今回、それを選択したつもりだ。

春風蒼波の好意に対し、僕は最善の策をとった。

まああくまで『つもりだった』だけで、これが後々あんな最悪の結末に結びつくだなんて、この時の僕には予想することができなかったわけだけれど

1

僕と楓が初めて互いを拒絶したのは昨日。  
そして今日。

結局僕は久々に一人で登校することになった。

妹と行こうかとも思ったのだが、いろいろと考えたいことがあったので、それはやめた。

南校舎三階の三年二組の教室に入る。楓はまだ来ていないようだ。僕の学校は、北校舎と南校舎があり、渡り廊下で繋がっている。校舎内として渡り廊下を利用できるのは一階・二階で、渡り廊下の上　つまり外　を利用することになるのが三階。つまり渡り廊下を利用して移動することができるのは一階・二階・三階だけであり、両校舎とも四階建てだ。

自分の席について鞆の中身の教科書類を机の中に移していると、蒼波が話しかけてきた。

「やあ直弥、おや、今日は姫宮さんと来たんじゃないのかい？」

お前のせいだな、なんては勿論言わない。

「ああ、少し、いや、結構な喧嘩をしてね」

「なるほどそうか、まあそれについては何も言わないでおこう。巻き込まれては大変だ、ふふふ」

楽しそうに微笑む蒼波。

うわあ……　　すげえ可愛い。

「いやそれにしてもだね、もう僕は日曜日が楽しみで楽しみで楽しみで楽しみで堪らないねえ。昨晚も気持ちが高ぶっちゃって全然眠れなかったんだよ。見てくれ、クマだ」

蒼波がそう言って指差さした目の下には、確かに薄くクマができていた。

おいおい、前日でもねえのに。

「ふふふ、直弥も楽しみかい？」

「あー、まあな。そりゃあ楽しみだな。蒼波との学校外、初めてだし」

「ありがとうね。僕は嬉しいよ、直弥。ふふふ」

僕は少し視線をずらす。少し離れたところから翔伍が僕らのほうを見てニヤニヤしている。僕と目が合うと、親指を立ててきた。

ちげえよ、別にお前に言われたからってわけじゃねえって。

楓が登校して来たのは遅刻寸前の危うい時間帯であった。

楓は僕の方には一瞥もくれず　　というか意図的に見ないようにしている　　に席に着き、表にはなるべく出さないようにしているのかもしれないが、僕から見れば機嫌が悪いというのは明白だった。授業中、ちらりと楓のほうを見ると、何回か目が合うことがあった。そのたびに楓は慌てて僕から目を逸らすのだが、その時の悲しそうな表情を見て、僕は少し胸を痛めることになった。

さらに、蒼波の方を向くと、もうほとんど毎回目があった。蒼波のほうはニコリと微笑んでしてくれるので、何となく和めたが、しかし楓に対する後ろめたさのようなものはより増した。

これがずっと続いたら、ストレスになるな。

いや、もう今日一日、結構キツかったって。蒼波は僕の事情など知らないで休み時間など積極的に話しかけてくるし、その度に僕はちらちらと楓のほうを気にしながら話さなければならぬし。結局昼休みからは、楓の方が教室から出て行くようになってしまった。多分優奈のところに行ったのだろう。

ああ、優奈に殺されるなあ。

罪悪感に耐えながら、給食の時間は翔伍にいろいろ話しかけられて、それを全て適当にあしらひ、なかなか憂鬱な気分。午後の授業も過ぎ、そしてやっと放課後になってくれた。

帰りの挨拶が済んだ途端に楓は教室を飛び出していった。どうやら今日も遅くまで委員会の話し合いがあるようだ。何だったわけ、環境委員会だったか。それと、当たり前だが、今日僕は楓と一度も口をきいていない。

で、僕なのだが、教室から出た瞬間に、左腕を掴まれた。

半ば予想通りの展開に苦笑しながら左を見ると、

「何笑ってんだ、気持ち悪い。いいから付いて来い優柔不断の下種男が」

予想的中、津辻優奈が立っていた。

直後、優奈に引つ張られて、僕は生徒達に途中何度もぶつかりながら、三階から四階への階段の踊り場まで連れてこられた。三階も四階も移動教室の時に生徒達が来るだけの階なので、まわりに人はいない。遠くから聞こえてくる生徒達の声が、別世界のもののように感じられた。

「うわー、こんなトコにつれて来られちゃって、私何されちゃうんだろー」

「ふざけんな」

僕が軽口を叩くとその口の中に、突然がちゃがちゃと、何かが押し込まれた。

それがダイレクトに前歯に命中したので、痛い。

その、僕の口の中に押し込まれた冷たい何かというのは、これはもう説明の必要もないだろうが、エアガンだった。昨日と同じやつ。「何も喋るなよ。お前がしていい動作は、首を縦に振るか横に振るかの、どちらかだ」

「……………」

凄いい剣幕で、優奈は僕を睨み付けてくる。怖い怖い、勢いあまつて殺しちゃう人の目だよ、それは。

「昨日忠告したばかりにも関わらず、何なんだお前は。楓と喧嘩して、さらに学校では別の女と楽しそうにお喋りですか」

「あー、ほうひふへい（あー、放置プレイ）」

「次は撃つ」

冷淡な声でそう言って優奈は、エアガンをさらに口の中へと。それ以上押し込まれたら喉に達して、吐いちゃうと思う。それにしても、大好きなエアガンを他人の口の中に入れるって、どうよ。

まあ、とにかく冗談が通じる相手じゃないことは改めて分かった。にしても、どこからエアガンなんて……、ああ、スポーツバックからか。スポーツバックとは、学生鞆と共に配布されている、体育着や部活に使う道具などを入れておける、バックである。優奈はそ

れを片手に提げていた。

ちなみにこの階段は、昨日僕が楓に言った“蒼波が放課後本を読んでいる階段”ではない。それは別の場所だ。南校舎には西側の階段と真ん中の階段があつて、ここはその真ん中の階段。

「まず問一。お前は楓が好きなのか」

首を縦に振つて肯定する僕。

「問二。お前はあの気持ち悪いゴキブリみてーな女のことも好きなのか」

気持ち悪いゴキブリみてーな女に心当たりがなかったので、僕は首を斜めに傾ける。

「馬鹿分かんذار。春風蒼波だよ。とにかくソイツも好きなのか」  
今度は首を横に振つて否て

ズガンッ！

「あぁッ！」

優奈は、エアガンを僕の口に入れたままの状態で、撃ちやがった！  
堪らず僕はその場に前かがみに倒れ その時にエアガンは口内から外された 、咳き込む。

ころん、と。踊り場の床に、僕の口から出た小さなBB段が転がった。

僕は首を押さえて、さらに咳き込む。

痛い、熱い、苦しい。なんだか喉の奥が燃えてるみたいだ。

その場で僕は屈み込む。痛みは一向に引かない。当たり前だ、昨日額にやられたのも結構痛かったのに。

しかし、僕は髪の毛をつかまれ、また立たされた。

文句を言つてやろうと優奈を見る、と

「……」

優奈は泣いていた。

いや、涙は流れてないが、しかし泣きそうな顔だ。それでいて、

僕を睨み付けている。

辛そうに。

「……」

僕は何も言えなくなってしまう。

「頼むから、もう楓を傷つけるな」

声が少し、震えていた。

「私は楓の親友だ。小学生の頃からな。で、楓が中学に上がり、初めて恋に落ちた相手がお前だ」

「……」

「楓は本気だ。本気で、本当にお前のことが好きだ。私は分かるんだよ。もう楓にとって、お前は重すぎる。なのに、それなのにお前は……」

ぼん、と。

僕は、優奈の左肩に、右手を置いた。

俯きかけていた顔をはっと起こす優奈。

その優奈の目を真っ直ぐ見つめ、僕は言う。

喉はまだ痛くて、喋るのは少し苦痛を伴うものだったけれど……。

「大丈夫だよ、優奈」

「……」

「僕が一番好きなのは楓だし、二番目以降はいない。楓だけだ」

「……」

「もう楓を傷つけるようなことはしない。一生ね。誓うよ」

と、そこまで言ったところで、突然優奈は僕を突き飛ばしてきた。後ろに倒れそうになったがなんとか踏みとどまり、僕は「何すんだ！」と怒鳴った。

良いこと言ってる真っ最中だったのに！

「ば、馬鹿者！ 惚れてしまうだろうが！」

「惚れんのかよ！」

「私は一途な女だからな！ お前に惚れたら危うく楓を殺してしまうところだった！」



「お前の友情はその程度か！」

そこでお互い、ふーふー、と、息を整える。

「しかし、まあ……」

優奈は咳払いしてから、再び話を切り出す。

「心配なさそうだ。いや、心配だったとしても、そんなのは全て無駄になるのか……」

「ん？」

後半は独り言のようで、聞き取れなかった。

「まあいい。なあ冬月、今日は一緒に帰ろう」

「あれ、お前と僕って家の方向同じなのか？」

「ああ、同じだ。だいたい、昨日お前の下校中を襲撃しただろうが」

「あ、そうだな」

「ここで待っていてくれ。鞆を取ってくる。いいか？　ここで待てるよ。動くなッ！」

そう言って優奈はエアガンの銃口をこちらに向けてくる。僕は霧囲気に乗って、両腕を上げる。

「はは、なんてな。まあとにかく、待っていてくれ。すぐ戻ってくるさ」

優奈はエアガンを自分のスポーツバックに仕舞い、タッタッタと階段を一段飛ばしで下りていった。

「……えーっと、なんでここにいなきゃなんだろう……」

僕も一緒に階段を下りたほうが効率いいと思うんだけど。

まあとにかく、ここにいろと言われたし、ここにしよう。

階段を上がって四階に行けば、西側階段の上のところに蒼波がいるはずだけど、しかし優奈は二階の教室に鞆を置きに行っただけのようにだし、宣言通りすぐに戻ってくるだろうから、ここにるのが一番いいだろう。

で、本当にすぐ。一分ちよつとで優奈は階段を駆け上がってきた。学生鞆を持って。

「よお、ちゃんといってくれたか。さあさ、帰ろうではないか」

「お、<sup>おう</sup>応」

何だろう。先ほどまであんなに激昂していた　　というか今までずっと陰悪だった僕と優奈が、一緒に下校だなんて。

さっきの僕の肩に手を置いての台詞がよほどうけたのかな。

「なあ、勿論お前はもう楓とキスはしたんだろうな」

優奈は帰りながら、突然そう訊いて来た。

「あー……、うん、まあな」

そりゃあね。

「ほう。ではそれがお前のファーストキスカ」

「いや、ファーストは二年前に妹と」

ズガン！

「いてえッ！」

頬を撃たれた。

エアガンだ。拳銃タイプ。

「な、ななななな、何言ってんだお前！　まさかのシスコン！？」

「男とやりました、とかよりはマシだろうが！」

「お、お前、BLをあなどるなよ！？　今のご時勢、異性愛より同性愛だ！」

「なわけねえだろ！　子孫作れずに全滅するわ！」

「畜生。私はお前と朝片翔伍の絡みを想像して毎日楽しんでたというのに！　そんな……妹好きだったとは！」

「は！？　てめえ、勝手に何想像してやがんだ！」

「仕方ないだろう！　クールな秀才少年＆運動神経バツグン少年とというのは王道なんだぞ！　お前は妄想において最高の受けキャラなんだ！」

「気持ち悪い！　おお、虫唾が走ること走ること！」

はー、はー。

そこでお互い、呼吸を整える。

はしやぎすぎた。

素が出てしまった。

「楓には知られないようにしろよ。お前がシスコンだと知ったら泣くだろう」

「ああ、そうしたら僕はお前に殺されるな」

「分かってるじゃないか。その通りだ」

「……」

それから少ししてから、優奈は改まったような口調で、言った。

「なあ冬月、」

「ん？」

「楓を大事にしてやれよ」

「……ああ、そのつもりだが」

「楓は本当にお前のことが好きだから」

それは何度も聞いている台詞だ。

「うん、そうなんだろうな」

「お前が思ってる以上にだよ。お前が思っている以上に異常だ」

「……何が言いたいんだよ、お前」

「すぐに分かるさ。お前は嫌でも、楓を大事にしなきゃならなくなる」

「……？」

「私は楓の親友だ。二年間程度の付き合いしかないお前よりも、楓のことはよく知っているつもりだ」

多分、その通りなのだろう。

朝片翔伍が春風蒼波の幼馴染のように、

津辻優奈は姫宮楓の親友なのだから。

なら、僕は姫宮楓の何なのだろう……？

曖昧な関係。

それはひどく心地いいけれど、しかし、よく考えてみれば、空っぽだ。

僕はこれじゃあ、誰とも関係していない。

「私は私で狂ってると思うよ」

突然、優奈はそんなことを言い出す。

「でもさ、親友のためならなんでもできるっていうこの気持ち、お前には分からないんだろうな」

優奈は思いつめたような顔をしている。

何なのだろう。

先ほどから、言っていることに繋がりが無い。

「冬月、お前、楓のこと好きなんだろ？」

「うん」

「じゃあ、告白しろよ。お互いに好きなのは分かっているんだからさ。でも、まだお前達は告白すらしていない。関係をハッキリさせなきゃいけないと思うな、私は」

「ああ」

僕は優奈の目をしっかり見て、言う。

「そのつもりだ」

「……」

格好良く決まったところだったがしかし、僕は突然優奈に頭を叩かれた。

「見つめるな。惚れてしまう、と言っているだろう」

僕は肩を竦めた。

2

楓は委員会の話し合いのせいで、遅くに帰ってきたようだ。

僕の部屋の窓を開けておけば、楓の部屋の窓が閉まっていようと、楓が帰ってきたかどうかくらい、物音で分かる。

やはりカーテンも閉まっていたし、勿論鍵もかかっている。完全拒絶状態継続中。

優奈にはあんなこと言っただけ、ああこりゃ、どうにもならないや。

時間が解決してくれる……かな。

でも、怒ってるんじゃないなくて、落ち込んでるんだろうなあ。

何やっ  
てんだ  
よ、僕。

「最悪だ……」

楓を傷つけるなんて、

楓を拒絶するなんて、

楓以外の女と、いや、楓以外の人間と仲良くするなんて、

「最悪だ……」

もう、ほんとう最低。

死ねよ、僕。

頭おかしいんじゃないの？

さて、自問自答だ。

お前は誰が大事なんだ？

「楓だ、決まってるだろ、ぶつ殺すぞ」

はい、落ち着きました。

タイミングが掴めない。

楓と仲直りしたいんだけど、そのタイミングが分からない。

どうしたらいいのか。

あれこれ悩んで、結局深夜。

もう寝ちゃっただろうなあ。

携帯電話を使う手もあったけれど、できればこれは直接会って解決したかった。

とりあえず、今現在は打つ手ナシ。

寝よう。

翌日、僕はまた一人で登校した。

楓は欠席みたいだった。

ホームルーム開始のチャイムが鳴っても、登校して来なかったか

ら。

風邪をひいた……わけがないから、うーん、僕が原因か？  
いよいよ、解決しなきゃならないな。

帰ったら、無理やりにも部屋に入れてもらおう。

ん、待てよ、蒼波も来てないぞ？

あれ、教室に駆け込んできた担任が何か言っている。

何故かは知らないけど、慌ててるな。

何て言ってるんだろう。

どれどれ？

「す、少しの間ここにいてくれ！ は、春風蒼波さんが 死んでる！」

3

その日の学校は休みになった。

僕はまた、一人で下校することになった。

優奈を探して一緒に帰ろうかな、とも思ったけれど、僕には考えるべきことが多くある。手に余るほどに。

それに、優奈からしてみても、僕にあんまり馴れ馴れしくされるのは嫌だろう。昨日のあれは気まぐれみたいなものだったのだろうし。

蒼波の死体は朝、北校舎四階で発見されたらしい。

北校舎四階は一年生達の教室が並ぶ階だ。そこにある女子トイレの個室の中で、死んでいたらしい。発見したのは、当然、一年の女子生徒だ。

もう生徒達の間では、その時の細かい状況なども広まっている。目撃した生徒は多かったし、そのうちの一人が多言し、どんどん広まっていくわけである。

その話によると、死体に出血などは見られず、首には紐のような

ものを巻かれた痕が深く残っていたらしい。

それだけで判断するのは早計すぎるかもしれないが、まあこの場合、間違いないだろう

春風蒼波は、首を絞められて殺されていたということだ。

醜い表情、だったという。

まあ、首を絞められ苦しみながら死んだのだろうから、当然だけ  
ど。

見にくいくらいに醜い死体。

細かい状況などと言っても、きっとそれらは話が伝わっていくうちに虚実入り混じってしまっているのだろうから、確実に言える情報と言つと、このくらいである。

翔伍の落胆っぷりは、凄いものだった。何も喋らず、無表情に、目もうつろで。

自分が幼い頃から仲良くしていた幼馴染の死 経験のない僕にそんなことを思われても翔伍としては迷惑だろうが、きっと辛いものなのだろう。

それと、春風蒼波は昨日から行方不明になっていたようだ。学校から帰らなかったのだという。

ここから推測するに、春風蒼波は放課後に、自宅に帰る前に殺されたということになる。死体の傍には、彼女の鞆・スポーツバックも捨てられていたそうだし、それもこの推理を裏付ける材料の一つだろう。

まあ僕には、この事件について考えるべきことなんてない。

僕は別に推理小説の探偵役じゃないし、ただの一般人が殺人事件についてあれこれ推理するなんて、まったくもって馬鹿馬鹿しい。警察の仕事をこんな学生風情が調子に乗ってする必要もない。

だいたい、犯人が誰かなんて、分かりきってるじゃないか。

しかし、警察がこの犯人を捕まえるのは、かなり難しくなるだろう。

子供のことは、子供がよく分かる。

子供をナメるなよ。

とにかく、僕が下校中に考えなければならなかったことは、蒼波を殺したのが誰か、なんてことでなく、もっと現実問題、最上級に僕にのしかかっている事柄についてだ。

それに一応の考えを完成させて、僕は帰宅した。

早すぎる下校に驚いている母親に「詳しいことは直に帰ってくるだろう流々に訊いて」とだけ告げて、僕は階段を上がり、自分の部屋へ。

鞆を机の上に放り投げ、そして楓の家を向いている窓を開けた。

五十センチもないほどの距離をおいて、楓の部屋の窓がある。

カーテンは閉められていて、鍵は

「……………」

開いていた。

楓が開けておいてくれたのだろう。

僕が来れるように。

僕に甘えたくて。

もうこれは……決まりだ。

僕は楓の部屋の窓を開けた。

迷っている時間なんてない。

そんな時間があるのなら、その分楓の傍にいろ。

楓の部屋に移る。

喧嘩して以来だ。楓の部屋が、ひどく懐かしい場所に感じられる。

まだ二日も経ってないのに。

「……………」

楓は、ベッドの上にいた。

楓のベッドは、部屋の端、壁につけられるかたちで置いてある。

そのベッドの上で、背中を壁につけ、楓は膝を抱えて座っていた。

やはり顔は下を向いていて、その表情を窺い知ることとは出来ない。

「……………楓」



呼びかけると、楓のその小さな肩がびくんと反応する。膝を抱えるその手の指が、小刻みに震えているのが分かった。

布団は床にずり落ちていて、シーツもぐしゃぐしゃだった。近くの壁には、今まではなかった爪で引っかいたような痕が何本も何本も残っている。

あのきれいな髪が、ひどく乱れていた。

本棚の中身がなくなっていると思ったら、それは床に散らばっていた。

椅子が倒れていた。

机の上にあつたらしい教科書類は全てその下に落ちていた。

圧倒的に、死んでいた。

「……………」

御託を並べる場面じゃない。

そんなの必要ない。必要ない必要ない　邪魔だ。

僕はそつと、当たり前のことを当たり前にするかのように、自然な動きで楓のベッドの上上がる。そのまま、楓を刺激しないように傍に近づいていって、優しく、抱きしめた。

「っ！」

楓が少し驚いたらしいことが、そのまま体に伝わる。

壊れやすいものを扱うようにそつと、しかし楓がしっかりと僕を感じられるような、適度な強さで抱く。

正面から、右腕を楓の首に絡めて、左腕を楓の背に回して、顎を楓の右肩に置いて。

楓の体はまだ震えている。いや、余計に震えている。

「ごめんね、楓」

謝った途端、楓はついに堪えきれなくなったようで、嗚咽を漏らし始めた。

辛そうに。苦しそうに。

僕はでも、そのままの姿勢で続ける。

「こんなことさせちゃって、本当にごめん」

耳元で囁くように。

楓に聞こえてくれればいい。

僕の言葉は、楓にさえ届いてくれてればそれでいい。

楓のむせび泣く声は止まらない。弱弱しく、今にも消え入りそうな声で、泣き続ける。苦しそうに、時に声を詰まらせながら。

「もう楓を一人にしないから」

楓は僕の右肩に顔を埋めて、未だ泣き続けている。だんだんその声は大きくなってきているようだが、顔が僕の体に埋まっているので、あたりにはそれほど響かない。

「ずっと、一緒にいるから」

口調を乱さず、僕は続ける。

「ねえ楓、」

僕はそこで、顎を楓の肩から外した。

僕は今度は楓を、正面から見つめるようにする。

右手で楓の頬を撫でて、涙をぬぐってあげる。

左手は肩に置く。

楓は少しして、なんとか泣き止んだ。いや、泣き止んではないけれど、でも、僕の言葉を待つようにした。

二日ぶりに見る楓の顔だ。

泣きはらしていて、頬には自分の爪で引っかいてきたらしい傷跡を幾筋か残しているけれど、

とても綺麗だった。

「ねえ楓、」

楓のことを真っ直ぐ見て。

楓以外を全て見ないで。

僕も泣きそうになるのを抑えて、言った。

「好きです。僕と 付き合ってください」

シンプルな言葉だった。

本当はいろいろ考えていたんだけど、いざとなってみるとそれしか言えなかった。それ以外に何をいえばいいか、全部忘れてしまっ

た。でも、飾り立てた言葉なんか、きつと邪魔だった。

これでいい。

僕はきつと、これでいい。

僕はそのまま、楓からの返事を待った。

楓は頬を赤らめて、若干恥ずかしさのためか顔を俯かせて、そしてやがて　それが長い時間だったのか短い時間だったのかなんて分からなかったし気にも留めなかったけれど　少し頬を膨らませて、怒ったように、言った。

「遅いよ」

「ごめん」

僕も少し、苦笑する。

そうだよな。こういうのって、女子は待ってるものだよな。

二年間、ずっと、待ってくれてたのかな。

でも直後、楓は顔を上げて、今度は僕をまっすぐ見て、答えてくれた。

「よろしくお願いします」

まだ楓の体は震えていたけれど、でも、その表情、いつもの楓の元気な顔を見て、僕は思わず、口元を綻ばせた。

4

今日の晩御飯はハンバーグだった。

いや、だからと言ってどうというわけでもないのだけれど。

父親はまだ帰ってきていない。母親は現在、そのハンバーグなどの乗った皿を、ダイニングにある机の上に運んでいた。

普通、それを子供が手伝うのが常識なのだろうが、僕は席に座っていて、その隣では妹も席に座っていた。手に持った数学の参考書を見ながら、なにやらぶつぶつと不気味に呟いている。たまに理解が難しい箇所があるらしく眉を顰めるたびに、それに連動するようにツインテールが小さくぴよぴよこ動いて、それが面白かったの

でもっと観察してみる。その視線に気付いたらしく、妹は可愛らしく首をかしげて、僕に質問してきた。

「なんですかお兄ちゃん。いやらしい目つきでにやにやと流々のことを見て……。ああ、シスコンですね分かります」

「馬鹿かてめえ！」

「おつと恐い恐い。我が家の長男は反抗期ですかー？ で、何でしょう、流々の頬に何かついてますか？ はい、えくぼがついています」

「お前は笑つてもえくぼはできない」

「じゃあ何でしょう？」

「いや、こんな時にも数学ばっかで、楽しいのになって」

「脳内でチェスやら将棋やらオセロやらやっていつも暇を潰しているお兄ちゃんに言われたくありませんが……。まあとにかく、妹の性欲の解消手段をとにかく言わないで下さい」

「女子中学生が身内に性欲とか言うな」

意味分かってんのかこいつ。数学以外は意外とらしい奴なんだけど。

「にしても、なんで数学なんだ？」

何度か今までにしたことのある質問だけれど、他に訊くこともなかったのでとりあえず訊いてみた。

「問題の段階では数学って何だかもやしてるじゃないですか。それを答えを導き出すことによってすっきりさせるのが好きなんです。流々はもこもこしてて曖昧模糊なのが嫌いですからね」

自然に駄洒落を交えてくる流々。そこにいちいち突っ込むほど僕は優しくない。

「お兄ちゃんと違って」  
びくり。

癢にさわった。

流々は皮肉を込めた口調で、続ける。

「お兄ちゃんは何もかもが曖昧です。全て途中で満足してます。人

間関係においてもそれは言えます。二年前だって」

「黙れッ！」

「ッ！？」

気付くと、怒鳴っていた。

見ると、妹は、今にも泣き出しそうな表情になっていた。当然だ。僕に怒鳴られるのなんて、下手したら、流々にとっては初めてだろう。

直後、流々は席を立つと、走り出して、階段を上がっていった。しまった。ばたん、と、流々が自分の部屋に駆け込む音がした。机の上には、数学の参考書が残されている。

「ちよつと直弥、」

母親が僕に何か言いかけたその時、

ぴんぽーん。

「……出てくるわ」

母親は言つて、ぱたぱたと玄関へ駆けていく。

おお客人、ナイスタイミング。つっても、後回しになったただけだけだな。

すると母親が戻ってきた。怪訝そうな顔をしている。

「直弥、あなたに話があるって」

「ん？ 誰？」

「警察」

ああ、

なるほどな。

僕は立ち上がって、玄関へ行つた。母親もついてくる。

そこに立っていたのは、二人の男だった。

二人とも茶色いコートを着ていて、刑事だ。

いや、個人的な服装のイメージからなんとなく“警察官”でなく

“刑事”と言つてみたけれど、実際は分からないよ？

「やあ冬月直弥くん。分かるだろうけど、私達はこういうものだ」  
二人とも、揃って警察手帳を見せてくる。

両方歳は同じくらい、つまり中年に見えたが、背の低い方の男が話しかけてきている。もう一人は後ろに回っていて、口を開く様子はない。

ドラマみたいだ。

「お母さんは席を外してもらえますかな。息子さんと話したいものでね。お母さんの前じゃ、いろいろ話しくいだろう」

もったもな意見だった。

母親は心配そうな顔をしながらも、不承不承といった感じでリビングに入っていく。

「うん、立派なものだね。他の中学生は、髪を後ろで束ねたお嬢さん以外はみんなどこか緊張したご様子だったが、なるほど、君は随分と落ち着いたものだ」

ゆつくりと、絡みつくような口調で男は喋る。

髪を後ろで束ねたお嬢さん 知り合いのエアガンマニアにめちやくちや心当たりがいるんですけど……。

「言っておくとだね、私達は事件に関係なくとも一応学校で起きたことだから同学年のみんなの家を順々に回っている わけではないよ」

「はあ……そうなんですか……」

反応に困るよなあ。

「関係がありそうな人達だけを絞って訊き込みしている。事件っていつのが何かは、当然、分かってるよね。春風蒼波さんが殺された事件だよ」

「……」

殺された、と、男ははっきりそう言った。

もう、只者じゃないということがひしひしと伝わってきて、すごく疲れる。

早く訊き込みとやらを終えて帰ってくれたまえ。

「学校の生徒さんが職員に伝えてくれた情報を総合してだね、君は春風さんとは一応クラスメイト以上の関係はあったそうだね？」

「いえ」

即答した。

「本当に？」

「はい。ありませんよ。クラスメイトだったこともつい先日知りました。だから春風さんが死んだと聞いた時も、顔を思い出せなくて困りましたよ。いえ、別にどうでもよかったんで、全然困ってなんてないんですけど」

そこで男は、一度背後の男と顔を見合わせた。背後の男は、メモ帳のようなものになにやら書き込んでいる。

「まあ、時間も遅いからね、どんどん訊かせてもらうよ。君は昨日、一人で帰ったのかね？」

「いいえ、三組の津辻優奈さんと一緒に帰りました」

「そのことについて、詳しく訊かせてもらおうよ」

「はい、どうぞ」

それからしばらく、僕はあれこれ質問されて、放課後から帰宅までのことを詳しく話した。それが終わると、いろいろな人間関係について訊かれた。後半になると楓の名前が出ていた。なるほど、いろいろと情報は掴んでいるようだな。

結局十五分程度立ち話をさえられ、そして刑事二人は帰っていった。

母親に「どういうこと？」と訊かれ、僕は答えた。

「ああ、学校でゴキブリが殺されたことについて調べてるんだってさ」

・絞め占め殺ししめじめころし、終わり・

・ばらばらころし、へ・

## ばらばらこらし

0

後悔、という行為は最も時間の無駄だ。

人間は失敗するものだから、反省は必要だろう。しかし後悔は何も生み出さない。

だから後悔なんてするのは愚かだ。

僕はそういう風に考えているのだが、しかし、一生に何度かは、僕でも後悔をしてしまうことがある。

あの時あしていれば、もしくは、あの時あしていなければ。

そしてその何度かの内の一度は、明らかにこの物語に含まれるだろう。

何が間違いだったかと言うと、僕が自分を《改善》しようとしたことだ。

欠けたものはまだ使えるかもしれないし、壊れたものは直せるかもしれない

しかし、欠けすぎてしまえば使えないし、直せないほどに壊れたものは救いようがない。

つまり僕は、救いようがなかったわけだ。

1

土曜日の夜だ。

春風蒼波が殺害されたことにより、学校はその週を休校とした。

明後日、つまり月曜日からはまた普通に学校も始まるわけだけれど。僕と楓の関係は《恋人関係》だ。今まで曖昧だったものが、はっきりとした。妹に言わせれば、数学の文章題を解いたかのように。

そつえばその妹なのだが、少し今僕と陰悪な感じだ。夕食の時



間は同じ机で飯を食うわけだが、しかし互いに目を合わせることもなければ、勿論言葉を交わすこともなかった。蒼波の死体が発見されたあの日の夕食の時以来、ずっとそうだ。

ちよっときつい。

あの後、一度また刑事（同じ二人組み）が訪ねてきたが、質問の内容は一度目の時とさほど変わらなかった。どうなんだろう、捜査は難航しているのかな。

昨日は、優奈が楓の家に遊びに来ていて、僕とも顔を合わせた。

楓から事情は聞いたらしく、僕に「見直したよ、いやあ、それにしても抱くタイミングと告白のタイミングが絶妙だったわけだな。狡猾なものだ、くくく」等と耳打ちしてきたのがちよっと嫌がらせを受けているみたいだった。ただ、優奈とは結構仲が悪かった、というか暗黙の了解みたいな感じで今まで会話をすることはなかったのだが、まあ、友達と呼んでいくくらいの仲にはなれたみたいだったが、ちなみに、楓はまた僕の部屋に来るようになって　というか、自分の家にいる時間よりも僕の部屋にいる時間のほうが長い　いて、夜は一緒のベッドで寝たりした。いや、別に変な意味じゃなくてさ。

ただ、楓とも優奈とも、その会話に春風蒼波の名前が出ることは一度としてなかった。

そして僕も彼女のことについて考えることは、やはり一度としてなかった。

で、土曜日の夜。

風呂から上がってパジャマに着替えて自分の部屋に戻ると、机の上に楓が突っ伏して寝ていた。僕の机なのだが、その上には楓の学校のワーク（宿題）が広げっぱなしだ。

僕が風呂に入る前に楓は「直弥が上がってくるまでおりこーに宿題して待ってるねーん」と言っていたから、まあ寝ないよう結構頑張ったんだろうけれど、ついに耐え切れなくなって睡魔に敗北、とそんな感じだろう。

肩に左腕を回し、膝の裏には右腕を回して、僕はそのまま楓を抱き上げた。楓は細身のほうだが、それでも中学三年生なので、少し重い。

俗に言う《お姫様抱っこ》で楓をベッドの上に寝かせる。エアコンが一時間後にとまるようにタイマーをセットして、消灯。真っ暗だけど、自分の部屋の家具の位置くらいちゃんと把握している。

僕もベッドに寝転んだ。

当たり前前にシングルベッドだ。二人寝れば、必然的に体をつけることになる。僕は楓の体を、横からそっと抱いた。部屋はエアコンでちよつと寒いくらいだったので、楓の暖かい体を抱くと、ちよつと気持ち良かった。

はい寝ましよう、と思ったところで、楓が「ふふん」と笑った。

「直弥えろー」

「なんだ、起きてたのかよ」

当然ながら、小声での会話だ。隣の部屋の妹は、下手をしたらまだ起きて《数学三昧してる》かもしれない（変な日本語）。

「うつん、今また起きたんだよ。直弥が変なところ触るから」

「触ってない。勝手なことぬかすな」

「えへへー」

起きてるんなら、ってことで、僕は楓をもっと強く抱く。

「う。ちよつと苦しいかなー」

「楓、」

「うつん？」

「すげえ可愛い」

「……」

さすがに恥ずかしいようで、楓は何も言ってこなかった。うつん、ちよつと苛めちゃおうかな。

「でも今日はもう眠いからな。僕は寝るよ」

電気ももう消しちゃったし。

「了解」

窒息しない程度に強く楓を抱きしめて、僕はそのまま目を閉じた。

2

朝です。

起きると、僕は昨晚の状態とは逆で、楓に絡みつかれる感じになっ  
ていた。

暑い暑い。

なんとか楓の束縛から脱して、僕はエアコンをまた入れる。設定  
温度二十二度。僕は地球にシビアナ男の子だ。死人に鞭打つような  
行為である。

時計を見ると、げっ、十二時半。どんだけ寝てたんだよ。

カーテンを開けて（楓家側でないほうの窓のカーテンだ）窓から  
外を見ると、家の前を丁度体育着姿の中学生が歩いていて。

時間的に、そうか、日曜の部活すな。午後にやるのか。野球部  
部長の翔伍だが、幼馴染の蒼波が死んで意気消沈しているだろうか  
ら、どうなんだろう……三年生として引退間直で、そろそろ夏の大会  
だし、練習に休むわけにはいかないと思うのだが……。

まあ考えても栓ないことだ。だいたい、僕と翔伍は《教室で席が  
近い》くらいの関係でしかない。話すのだって、給食の時間くらい  
だ。修学旅行では同じ班だったから、まあ一緒に東大寺とか見学し  
ただけだね。大仏の顔が理科教師そっくりだったもんだから二人で大  
爆笑したな。

にしても、この暑い中部活とは、運動部（吹奏楽部とかもか？）  
は大変だねえ。帰宅部は楽でいいや。まあ妹の写真部もかなり楽な  
ようだけど。

楓に勉強を教えてやったりしながら一日を過ごして、夕方になっ  
た。今日は猛暑日だった。部活をやっていた生徒の半分は熱中症で

倒れただろうと推測する（ちょっとおおげさ）。夕方になっても暑かった。

現在は、僕のベッドの上に座って楓が優奈と携帯電話で楽しげに会話していて、僕は脳内でチェスをやっている。

その時、階下から母親の声。直弥ー、と僕を呼んでいる。

脳内でチェス盤をひっくり返し、僕は「はい」と答えて一階へ。結果、母親に《おつかい》を頼まれた。夕食を作っている最中にビールが切れていることが判明したらしい。「ビールがないとパパに殺される！」ということで（殺されないよ）、僕が買いに行かなければならないようだ。ま、最寄のコンビニに行けばいいわけだ。そんなに遠くはない。

ただ面倒くさいよなー、と思いつつ、自分の部屋に着替えに戻る（出かけなかったからパジャマのままだ）。

クローゼットを開けて、適当に中からジーパンとＴシャツを取り出して、それに着替える。楓の前だけど、別に気にしない。着替え終わると同時に、楓は通話をやめた。

「直弥ー、出かけるのー？」

「うん。おつかい頼まれた。父親にビールを買った」

「コンビニに買いに行くの？」

「ああ、そうだよ」

「私が行ってきてあげよっかー？」

「え、いいのか？」

せっかく着替えたんだけど。

「うん。今ガムきらしてるからついでに買うのであります」

「へえ、そうでありますか。じゃあお願いしようかな」

普段の楓なら「一緒に行こうー」って言うところだけれどどうしたのだろう、と一瞬不思議に思ったが、そうか、おそらく本当はガムなんかじゃなくてＢＬ本でも買いに行くのだろう。最近はコンビニにも売っているところは売っているし（いや別に僕はチェックしてるわけじゃないけど、目に付くだろう？）。

「ほらこれお金。Bえ……ガムは自分の金で買えよ」  
「はい」

僕が「五本くらい買ってきて」と言いつつ母親からもらったお金を楓に手渡したその時、扉が急に開けられた。

びつくりしてそちらを向いたが、そこに立っていた人物を見て一安心。我が妹であった。

「お兄ちゃん、楓ちゃんをいのように利用していますね!？」

そんなことを言ってきた。

タオルを頭に巻いてパジャマを着て、風呂上りのようだった。まだ五時前だぞ、おい。

にしても、ここ最近陰悪な感じだったのに、いつの間にか戻っている。ま、中学一年生だし兄妹だ。けろっとしているものなのだろう。

「いのように利用って、ちげーよ。楓はガムを買いに行くついでに、ビールも買ってきてくれるの」

「お兄ちゃんも行くんですか？」

「いや」

「なるほど」

何が《なるほど》なんだろう。

と、そこで楓が、

「流々ちゃん久しぶりー」

確かにこの二人が会うのは久しぶりとなるな。言っても、二週間ぶりくらいだろうけど。

「はい、楓ちゃん、久しぶりです」

にこにこ笑いながら、妹はベッドの上、楓の隣にちょこんと腰掛けた。一応楓は二歳年上なのだが、妹は楓を《楓ちゃん》と呼ぶ。

「ああ、そろそろ暗くなってくるからもう行かないとかな」

そう言っただけで楓は立ち上がった。夏だからまだ太陽は沈まないけれど、確かに女の子が遅くに出かけるのはちょっと心配だ。

「楓よろしくな」

「うん！」

それから楓は妹に「帰ったらお話しようねー」と告げて、窓を使  
って自分の部屋へと戻っていった。

「ああ、僕も楓がおつかい行ってくれてる間に風呂入っちゃおうか  
な」

「それがいいと思いますよ」

僕と妹は部屋を出て、妹は自分の部屋に引込み、僕は宣言通り  
風呂へ。

ああ、ほんと着替えた意味なかったなあ。

湯船に使った頃になって、ぴんぽーんと、家のチャイムが鳴るの  
が分かった。少しして、玄関の扉が開く音閉まる音。でまた少しし  
てから、浴室の扉のすりガラスの向こう側、脱衣所に人影が。

「お兄ちゃん、楓ちゃん買ってきてくれたよー」

へえ、結構早いな。走ったのかな。

「んー、分かったー」

脱衣所と浴室、扉ごしに会話。

「あ、楓ちゃんなんか怒ってたよー」

「え、何で？」

「無視されたって言ってたなー。んじゃあね。にやははー」

妹が脱衣所を出て行くのが分かった。

にしても、無視された、って何だ？

僕はちよつと早めに湯船から上がると、体を拭いて新しいパジャ  
マに着替えて、自分の部屋に戻った。

そこで思い至る。もしかして。

僕は自分の机の上に置いてある、僕の携帯電話を手に取った。

メール一件。

楓から。

「これか……」

見る。

『ねえねえ直弥、どのビールだか分からないよーウワァァン!!!!』

「こいつ、コンビニ店内でただ泣いてるんだよ……」

僕は楓家に面した方の窓を開け、正面の楓の部屋の窓を開けようとして、開かないことに気付く。

.....

鍵がかかっていた。

僕は、この窓の鍵は大抵の場合開けっ放しにしているから、これは明らかに意図的に閉められている。カーテンも閉められていた。

「えー……」


メールの返信しなかっただけでこんなになる？


僕は仕方なく、メールの返信をした。

謝る時は直接、というのが僕の主義だけれども、これは僕に謝る要素はない。

「楓鍵開けてー 僕風呂入ってたんだよーウワアア」








































































































































泣き返してやった。

これで解決。十秒後には開くだろう。

一。  
二。  
三。  
四。  
五。  
六。  
七。  
八。  
九。  
十。

開かなかった。

「あれあれどうしてだろっ?」

少ししてから、僕の携帯がちゃらちゃらと音を立てた。メール受信だ。

楓から。

『馬鹿馬鹿うそつき！　こんな時間にお風呂なんか入るわけないよ！　直弥くんなんてもう知らない！』

「ええええええ……！？」

マジギレだったら返信してこないだろうから、まあ大丈夫なんだろうけど……。

いやでも、《直弥くん》と書いてあるところに、何か地味な怒り

を感じるぞ。

一応確認してみるが、まだ鍵は閉まっていた。

もう一度チャレンジ。

『もついいじゃん 開けてよー 早く開けてくれたらキスしてあげるよ』

勝ち確定だ。

三秒で開く。

三。二。一。

……開かなかった。

その後結構待ってみたが、返信すら来なかった。

なんでそんなに怒ってるんだろ。

分らない。

悪戯いたずらでやっているのだろうか。というかそうとしか考えられない。

七時頃、母親に呼ばれて夕食のために下に下りると、妹はリビングでニヤニヤしながら「仲直りできましたかー？」と訊いてきた。

無視してやった。

で、結局夜になってしまった。楓の部屋の鍵は閉まったままだ。

無論カーテンも。

「……………」

寝る前にもう一度メールを送ってみたが、やはりいくら待っても返信は来ない。

仕方ないので、一人で寝た。明日は学校だし、あんまり遅く寝るのは良くない。

ああ、最近はずっと楓を抱きかかえて寝てたから、一人だと何だか物足りない感じだなあ……

3

翌日、月曜日。

学校再開だった。



結構早く目覚めた。携帯電話を取って確認すると、残念ながら楓からのメールは届いていなかった。

望み薄だけど、楓の部屋の窓を見る。

「……………あ」

鍵が開いていた。夜、僕が寝てから開けてくれたのだろうか。

まだパジャマだったけど、構わない。まだ楓は寝ているだろう。ちよつと悪戯してやろうと思う。

手を伸ばし、楓の部屋の窓を開けた。

さつ、と楓の部屋に移る。

「ん？」

変なおいがするな、と思って部屋を見渡すと

「……………」

床が真っ赤だった。

なんかぐにやぐにやしたものが散らばっていると思ったら、肉片だった。

人のだ。手首とか、部品とかから、そう判断した。

気持ち悪かった。

人の中身がどうなってるのが、全部見えた。

汚い。醜かった。見るも無残だ。こんなの、気持ち悪すぎる。生きてない。死んでる。当たり前だ。もう終わってる。これはどうしようもない。駄目駄目。嫌だ。こんなの嫌だ。吐いちゃいそう。頭がぐらぐらする。体の中に、なんか重いものがたまってる感じ。ぐったりする。何の感覚もしない。立ってるのが分からない。視界が、ぐるぐる回った。ぐるぐるぐるぐる。ぐるぐるまわる。おかしくなってきた。視界が真っ赤だ。薔薇みたい。もう死にそうだ。酔いすぎてる。

視界の隅が、それをとらえた。

「……………あ」

姫宮楓の首だった。

「あ……あ、あ、あ」

あの、綺麗だった黒髪が血で汚れて台無しだ。

あの、綺麗だった顔が血で汚れて台無しだ。

あの、あの、あの、楓が、

「あ、あ、ああ、ああ。あ、……ああ」

これじゃあ、全部台無しじゃないか。

「あああああ……あああああああ……」

なんとか、

なんとか、楓の首があるところまで、部屋の中央まで、血の中を、肉片の中を歩いて、たどり着いた。

「ああああ、ああああ。あああ、あああ……ああああ」  
そっと、

壊れないように、

壊さないように、

優しく、

楓の首を、僕は抱えた。

その、可愛い顔、綺麗な髪を、僕は震える指先で、撫でた。  
ああ、顔や髪を撫でてあげると、いつも笑ってくれたのに。

楓は目を開けない。

顔についている血を、僕は撫でながら、落としてやる。もうほとんど固まってしまった。

「楓……楓。……あ、ああああああああ」

なんか喉から、ひたすら変な音が漏れる。

いろいろ言おうとしてるのに、何も言えない。

僕は楓の首を、抱きかかえた。

「あああああ、ああああッ　あああああああああああッ！」

また一度、ぐるんと視界が回って、  
その後のことは、覚えてない。

4

「私、姫宮楓だよ!」

「へえ、僕は冬月直弥だ」

「直弥くんか」。知ってるだろうけど改めて、私、隣に引っ越してきました!」

「うん、知ってるけど」

「私の親友の子もね、ちょっと遠いところに一緒に引っ越してきたんだよ」

「そうなんだ。その子も女子?」

「うん。エアガン集めてる」

「物騒だね。もしかして楓もそういうの集めてるの?」

「え、ちよっ……………」

「どうしたの? 顔真っ赤だよ?」

「いや、だって、直弥くん、いきなり楓って呼び捨てにするんだもん……………」

「ああ、いや、僕は大概の女子にはそうなんだけどさ」

「あ、そうなんだ……………」

「うん」

「じゃ、じゃあ、私も直弥くんのこと、よ、呼び捨てにしても、いいかな?」

「ああ、全然構わないよ。どうぞどうぞ」

「……………なお、っ……………ああ、ちょ、ちよっと恥ずかしいな、えへへ……………」

「そんな恥ずかしいことでもないだろ。直弥って呼ぶだけなんだから」

「そ、そうだよな」

「うん」

「あのっ！ な、直弥！」

「……んー、何かな、楓」

「と、ともだちに……」

「え？」

「友達に、なってください」

もう楓の声聞けないのか。

楓ともっとたくさん喋りたいことあったんだけどなあ。

こんなことなら、もっと楓と、話しておけばよかった。

楓と、もっといろんな所に、一緒に行きたかったなあ。

僕らの時間はほとんど、僕の部屋だったもんなあ。

楓のこと……好きだったんだけどなあ……。

「……………」

「あ、起きましたか、お兄ちゃん」

「……………」

「ここは……僕の家……リビングか。」

「ソファアの上……だな。」

「頭がぼーっとする。」

「なんか停止してる。」

「パパとママは、警察の人とお話してますよ」

「……流々、か」

「はい。お兄ちゃんの絶叫が聞こえて、流々が駆けつけたんです」

「流々は制服姿だった。」

「る、流々も少しだけ、見てしまいました……。実は今も、ちょっと吐きそうです……」

ソファーの上に僕は寝かされていて。その横に流々が座っている。何が、どうなってるんだろう。分らない。

「楓ちゃんのこと……残念……でしたね」

「流々も悲しいけど、でも、お兄ちゃんは、もっと悲しい……ですよね」

「で、でも、大丈夫ですよ。お兄ちゃんには、る、流々がいますから。ずっと傍に……流々が、」

「ふざけんなッ！」

僕は、訳も分からず、叫んだ。  
いや、分かっていた。  
分かってるよ。

楓のことは、嫌って言うほど分かってる！

というか、僕以外誰も楓のことなんか分かってないんだ！

僕には楓がいれば十分で、楓には僕がいれば十分なんだから！

「お前みてえな他人が楓のかわりになんかなれるわけねえだろうがッ！」

何も見えない。自分がどこを見ているのか分らない。

「何も知らねえのに知った風な口ききやがって　ぶっ殺すぞ！

楓は一人だけだ！　なのに、何が《傍にいる》だ、ふざけんなッ！

僕の傍には楓しかいらねえよ！　楓にかわりなんかいるもんか、

楓じゃなきゃ駄目なんだよ、楓しか、楓しか楓しか楓しか

「や、やめて」

「ッ！？　」

気がつく、僕は妹を床に押さえつけていた。  
その細い首を、絞めていた。

「」

自分でも何を言ったのか分からない。

多分言葉にはなっていないだろう。

僕は、やっと気付いて、妹の首から、手を離す。

妹は苦しそうに、げほげほと咳き込んだ。  
泣いていた。

「ち、違う」

妹に手を伸ばしたが、でも妹は僕から逃げるように、後ろに引き下がって　僕に背を向けると、リビングから出て行ってしまった。  
「……………う、あああああああああ」

もう、駄目だ。

何もかも終わりだ。

閉幕。

楓。

楓のことが、頭を巡る。

そして僕は、また倒れた。

もうこのまま、永遠に目覚められなくなればいいのに……

・薔薇薔薇殺し、終わり・

・おろおろすいり、へ・

おろおろすいり

0

しらないしらないなんにもしらない。

いいからほうっておいてくれ。

どうでもいいし。

どうでもいい死？

ちがうちがう。

1

部屋に優奈が入ってくるのがなんとなく見えた。

「冬月……」

ずかずかと、僕に近づいてくる優奈。

僕は優奈に頭をつかまれ、そのままベッドの上に押し倒された。

首に、なんか冷たいものが当たっている。

エアガンかなと思ったら、ナイフだった。

「楓を殺したのはお前か」

優奈は上からまっすぐ、僕を睨み付けてくる。

重い。

なんで優奈はそんなに怒ってるようなんだろう……。

ああ、そうか。

「僕を、殺してくれるのか」

「は？」

怪訝そうな顔をする優奈。

え、間違えたのかな。

「殺してくれに来たんだろ？ そのナイフで、僕をばらばらにしてくれるんじゃないの？」

楓みたく、切り刻まれたい。

僕は首を右に動かす。  
ぱくり。

少し、ナイフによって首が切れた。

頸動脈じゃないし、浅いから、血は少ししか出ないけど。

うん、そのナイフ、切り味いいじゃないか。

「ッ お、お前、何してるんだッ……！？」

優奈はナイフを僕の首元から遠ざけてしまった。

何を……驚いているのだろう。

どくどく、少量の血が首を伝い、ベッドに赤い染みを付け、広がっていく。

首をまた動かして、僕は自分の部屋の窓の向かい側、楓の部屋の窓を見る。

あの部屋で死にたいなあ。

「妹さんの言うとおりだな。お前……死んでるよ」

優奈の声が、言葉が、耳に入って、どこからすぐに抜けていく。なんとなく、呼吸をとめてみた。このまま、窒息して死のうと思っ

でもすぐに苦しくなって息を失ってしまった。これじゃあ駄目だ。

「冬月、お前は楓を殺した奴が憎くないか？」

「……？」

いきなり、何を訊いてくるのだろう。

「楓の死体が発見されてから、三日が経った。私は今日やっと学校に行ったが、お前はまだ来れてないんだな」

がっこう？

なんでしたっけ、それ。

「お前の今の姿見てれば分かる。すげえ悲しいんだろ。まだ楓の死を受け入れられない感じか？」

「……」

「お前だから言う。私は犯人を殺すつもりだ」



「……」

「今はこうやって冷静でいられているが　いや、実はさっきまでは落ち着いてなかったな。知らないうちにナイフまで……でもまあ、こんなお前見たら、嫌でも冷静になるわな」

「……」

「頭のいいお前なら分かるはずだ。楓を殺した奴が誰なのか。だいたい、隣の部屋でのことだろう」

「……うるさいなあ」

「ッ……」

「僕はもう、どうでもいいんだよ」

「……」

「楓？　死にました。もうお仕舞いだよ。おじやんだね、この世。

僕には何も見えないし、聞こえないな。もう頭を使わせないでくれ。もうなんか体の中で大量の虫が巣つくって暮らしてるみたいな気持ち悪さが溢れてくるんだよ。……放っておいてよ。君には関係ないんだからさ」

「いい加減にしろッ！」

がつ、と、また頭をつかまれ、今度は体を起こさせられた。気付くと、壁に押さえつけられてた。ぐわんぐわんと、脳が揺さぶられている感じがする。

優奈は、僕の頭を、潰そうとしているくらいの力で掴んでいる。まっすぐに僕を見ている。僕はどこを見てるんだろう。

「どうしたんだよ冬月直弥！　貴様はもつと骨のある奴だったじゃねえか！　なのになんだこのザマは　もう全部諦めたみたいな生活しやがって。ずっと何も飲まず食わずで、部屋にこもって、餓死寸前で……目さましやがれ！　私にこんなことさせてんな、諦めていいことなんか一つもねえ、諦めちゃ駄目なことなら、そいつは全部だ！　諦めて、一人で楽しやがって……、もつと苦しめよ！」

「……離してよ、死ぬのはいいけど、痛いのは嫌なんだ」

「まだそんなこと言ってやがるか！」

一度前に引つ張られて、直後壁に頭を叩きつけられた。  
痛い。

「……………頼むよ」  
ぼそり。

呟くように、優奈が下を向いて、そう言った。

「こんなこと頼めるの、お前しかいないんだよ……………」

優奈は、まるで、屈辱に耐えているかのように言った。

「私に協力してください」

「……………」

僕は何も、答えない。

放っておいてほしいのに。

もう僕は関係ないのに。楓としかなかった《関係》がなくなつて、僕は何とも《関係》ないのに。

なんでそうやって、僕を楽しんでくれないんだよ。

「……………僕もね、頑張ったんだよ？」

「？」

優奈が、顔をあげる。

僕はどこを見ているのか分からないままに、誰に言っているかも分からずに、虚言なのか狂言なのんか……………言葉を紡ぐ。

「僕、楓のこと好きだったから。本当に好きだったから。頑張ったんだよ？ 楓にはいつも笑つて欲しかったから、今まで、二年間だけだけれど、でも二年間、ずっと、頑張ってきたんだ」

優奈が頷いているのが見える。

泣きそうな顔で。

あ、僕も泣いてるんだ。

「なんかさあ……………全部終わっちゃったんだよなあ……………う、う、ううう、うあああ」

体が震えた。

熱い。

熱かった。

右手で自分の顔を掴んだ。いつの間にか、優奈の手は僕の頭から離れていた。

熱い。顔が汗か涙でびっしょりと濡れていた。

つらい。胸が苦しい。

呼吸したいのに、呼吸できなかった。

息が詰まる。

歯を食いしばって、何かを抑える。

「なんでなんだろう……、僕、一生懸命、やってたのに……、楓とうまく、できてたのに……、楓も、幸せそうだったのに……」  
ぎゅっ。

僕は、優奈に抱きしめられた。

僕が楓にやったように、優奈は僕に顔を、自分の肩に埋めさせた。でも、優奈も泣いてた。

「分かってるさ。楓から聞いて、全部知ってるさ。二年前からの、お前のことは。それが私以上にすぐくて、もしかしたらこいつは私以上に楓のことを想っているのかもしれないって思って、私はずっとお前とはあまり関わらないでいたんだ。嫉妬してたんだ。分かっているよ。お前が、楓のために、やったこと。やってきたこと、全部……」

声が震えてる。

僕もだ。熱いのか暑いのか寒いのか何なのか、全然分からなくなっていた。

「悔しいッ……、僕は悔しいよ、楓は、楓は何も悪いことしてないだろ？」

「ああ、してない。楓は、誰よりも純粹だった」

「優奈、ぼく……僕はッ……」

「うん」

「楓を殺した奴が……すげえ許せない」

「ああ、そうだな」

僕は、全部吐き出した感じになった。

少し、楽になった。

三日間、溜<sup>た</sup>めていたものが、全部なくなった感じだった。  
三日間、重くて全然動かなかった体が、軽くなった。

2

木曜曰。

久しぶりに登校した。

僕の前の席には、朝片翔伍が腰かけていた。  
表情が暗いというよりも、表情がなかった。

「……おお、直弥じゃねえか。久しぶりだな、元気してたか？」

言葉だけだった。

何も気持ちがない。

僕と、同じだな。

幼馴染を殺された、朝片翔伍。

「あんまり元気とも言えなかったよ。でも今はこの最近で一番元気。  
昨晚、久しぶりにご飯食べたからね。飲まず食わずだって家族は思  
ってたみたいだけど、実は水は水道水飲んだ。三日も飲まないわ  
けにはいかなかったからね」

「そうか……」

「なあ翔伍」

「何だ？」

僕は、いつも通りに教科書類を鞆から机の中に移しつつ、訊いた。

「お前、部活行ってるのか？」

「ああ、蒼波が死んでしばらくは行ってなかったんだけどさ、とい  
うか顧問に練習に出してもらえなかった、でもまあ、最近は行っ  
てるよ」

「日曜日も？」

「あ？ 日曜？ …………… ああ、なるほどな。お前、姫宮殺した奴  
が誰だか突き止めるつもりなんだ」

「うん、その通り。君、容疑者筆頭だよ」

「ん？ それは何でだ？ オレには動機がねえだろ。とりあえず皆に訊くかってことでオレにも訊いたっつーわけじゃねえのか？」

「何を言っているんだ。動機だったら君のが一番分かりやすい。蒼波を殺した奴への復讐さ。警察はついに突き止められなかったし、もうほとんど確信していたんだとしても本人が死んでしまったわけだけれども 僕ら同級生からしたら、蒼波を殺したのが楓だなんて誰にでも分かる」

「……ま、学校で殺されてる以上、蒼波を殺したのが中学生なのは当然だろうな。教師には動機ねーし。言っちゃうと、オレのところに警察来たんだよな。二人組のこえーペアだったぜ」

「ま、そゆこと。分かってもらえれば話は早い。翔伍、アリバイを聞かせてもらうよ。日曜のそうだな……午後四時から月曜の午前七時まで」

「あーっと、思い出すから待ってる」

「制限時間、十秒。十。九。八。七。六。五。四……」

「三秒残して答えまーす」

「どうぞどうぞ」

文面ではそれなりに楽しい会話だが、お互い無表情に無感動に言葉を交わし続けているだけで、周りから見たらなかなか怖い光景かもしれない。

「午後は部活だった。四時半まで。で、その後は部活のメンバーー部と晩飯食いに行っただぜ」

そんなことしちやいけないんだろうが、別にそれはここでは問題にすべきものではない。

翔伍は《一番近くても少し遠く》にあるファミリーストランの名前を口にした。で、その一緒に行ったというメンバーの名前を覚えてくれた。僕は、一度聞けばほとんど覚えることができる。メモの必要ナシ。

「いろいろ喋ってたから、六時半あたりまでいたかな……。ま、そ

こらへんは細かくは覚えてねえ。で、その後は普通に帰路について多分七時半頃だったな、家についた。その後すぐ風呂入って、宿題やって、リビングのソファでドラマ見てただけどさ、疲れてたから寝ちまって、そのまま朝まで寝てたよなあ……うん、そんな感じだ」

「君がソファで寝たのはリビングだったから、母親が証人となれるのか？」

「ああ、多分。キッチンから見えるから」

「そのドラマは何時から何時までの？」

「九時から十時」

「風呂から上がった時間」

「オレ風呂は三十分くらいだから……八時だな」

「そうか。うん、だいたい分かったよ。ありがとね」

「ああ、大体こういうのって容疑、早く晴らしてーだろ？」

「そうだね」

そして僕は考える。

その翔伍の日曜の行動、本当なら、翔伍に犯行は絶対に不可能だ。楓からの最後のメールがあつたのは（あの返信のやつ）六時頃だった。で、僕が楓の死体を発見したのは、月曜日の朝六時半頃。

つまり、日曜午後六時から月曜午前六時半までの十二時間三十分の間に、楓は殺されたことになる。

で、翔伍の行動はというと。六時にはファミレスにいて、六時半には丁度ファミレスを出る。そして七時半、つまり一時間で帰宅したらしい。あのファミレスから翔伍の家……うん、丁度歩いて一時間くらいだろうな。この間に楓を殺害することは、翔伍には不可能だ。何故なら、楓の家と翔伍の家は、地域が全然違う。ファミレスから楓の家へ向かい、楓をばらばらに解体して殺し、そして自宅へ帰るとなると、どう考えても一時間じゃ足りない。運動神経バツグン朝片翔伍の全速力をもつてもそれは、完全に無理。

「翔伍、ファミレスから自宅までは、徒歩で？」

「ん？ 当たり前だろ。学校帰りだから、チャリなわけねえじゃん」  
ですよね。

じゃあ、帰宅後を考えてみよう。

風呂に入ってる時と寝ていた時は母親に見られているだろうが、宿題をやっていたという時間はどうだろう。おそらく自分の部屋でだろうから、この時間は一人だということになる。アリバイの証人はいない。

しかし、これも八時から九時の間。つまり一時間。

……厳しいかなあ。

翔伍の家から楓の家。ここでは自転車を使うことが可能だから……往復四十分くらいか。

で、部屋に行くポーズは親にもとらないとだから、一時間まるまる使えるわけがなく、まあ五分これに費やすとして。

十五分であそこまで殺せるか？

朝片翔伍。

容疑者筆頭だけれど、しかし。

アリバイが完璧すぎるだろ。

いや、親が寝静まってから、起きて犯行を行ったのかもしれないよな……。

だいたい、アリバイだけが問題じゃないんだ。

犯人は、どうやって楓の部屋に入ったんだ？

話によれば、楓の部屋は、扉の鍵が閉まっていて、ベランダに面する側の窓の鍵もしまつてて、僕の部屋を向いている窓だけが、開いていたのだという。

しかし二階の高さだ。

これ、密室殺人事件じゃねえの？

3

姫宮楓殺害事件の簡単な状況整理。

これは、僕が生で見たものや、ニュース等での情報や、まわりの住人に知っていることを聞きこんだ結果や、警察からなんとか聞きだしたことや、母親が警察から説明されていたことや、楓の両親に警察が話しているのを何度か盗み聞きしたことを、総合した情報である。

残念ながら、楓の死亡推定時刻については、分からなかった。まあ仕方ないだろう。

しかし、当時の状況は、分かった。

まず楓は、夕食を食べていないらしい。

母親が呼んでも下りてこないのので部屋に言ったら、扉の前にメモ用紙が置いてあり『具合が悪い。寝る。起こさないで。薬は大丈夫』と書いてあったそうだ。で、結局夕食を食べずに次の日になり、朝、僕が発見した、と。

扉には鍵がかかっていて、だから母親は中に入ることができなかったそうだ。

僕が寝る 十一時頃だったかな までは、僕の部屋側の窓には、鍵がかかっていた。

つまり、午後十一時までは、あの部屋は完全な密室だったことになる。

「で、楓は体をめちゃくちやに切断されてたんだってな」

「ああ」

「私も警察から聞いたぜ、それは。とても見れたものじゃなかった。ま、私が教えてくれて頼みこんだだけさ。もう原型留めなかったってよ。楓だと証明するのが難しいほどだったようだ」

いや、顔はまあ無傷とはいえないまでも原型留めてたから、後半は優奈が大げさに言ってるだけだけれども……。

「ホントかよ、その朝片の話。私がナイフ持って脅して、犯人なのかどうか問い詰めてこようか？」

「そんなことしたら、やってねーって言うに決まってるだろ。それと、翔伍のアリバイは結構信憑性がある。さっき野球部員達に確認



したところ、本当だってさ。翔伍があらかじめ《話合わせてくれ》とか言わないように、一時間目が終わった休み時間に即訊きに行ったからな、間違いない」

「んー、死亡推定時刻が分からないのがどうにもなー」

「だな。あ、それと、その部屋の前に置いてあったというメモ用紙。文字は定規つかって書かれたみてーでカクカクしてたようでさ、これ、完全に犯人が書いたんじゃないかって思うんだけど」

「ああ、そうだよな。楓には文字をカクカクで書く理由がないもんな」

「そう考えると、母親が夕食を作り終えて楓の部屋に行ったという八時には、楓は殺されていたのかもしれない」

「八時、か……」

「そういやさ、」

「うん、なんだ」

「翔伍がさっき言ってたよ。《友達が殺されたっていうのにこんなにすぐに持ち直して、何をするかと思ったら探偵ごっこか。お前、おかしいよ》」

「……ああ。朝片はあのゴキブリ女が殺されても、探偵ごっこなんてやってねーもんな」

「確かに、おかしいのかな。持ち直してはないけれど……。でもさ、警察に任せるわけにはいかないよな」

「ああ。そうだ」

「犯人は、僕達が殺さないといけないんだもんな」  
そう。

これは《探偵ごっこ》なんて楽しいものじゃない。

「犯人が翔伍じゃない可能性もあるし、そっちの方が高い。もっと他にいろいろ考えてみようか」

「うん、そうだな。だいたい、どうやって犯人は楓を殺したんだ？」  
今は、昼休みだ。

南校舎、四階、西側階段の上に、僕らはいた。

春風蒼波が殺されたあの日、彼女はここにいたはずなのだ。どうでもいいけれど。

「分からない。だいたい、どうやって楓の部屋に入ったんだろう。楓の母親によれば、来客はなかったってよ。バレずに家に侵入なんができるか？」

「……さあ。どうも考えるのは苦手だ。だからこそのお前だ」  
「ですよ」

早いうちに、犯人を見つけ出さなければならない。

警察よりも早く見つけ出して、殺さない。

殺しないと、気が済まない。

殺しないと、僕は崩れてしまう。

楓のためじゃない。

自分達のために、殺すんだ。

殺して、犯人に、楓を殺したことを思う存分後悔してもらおう。

そんなくらいしないと、駄目だろう？

「実は犯人母親っていうのは？ そうすれば母親の証言《おかしな物音も悲鳴のようなものも何にも聞こえなかった》っていうのも解決するんじゃないのか？」

「なわけねーだろ。陰悪でもなかったし、そんな単純なら、警察がもう捕まえてる。四日経ってるし」

「難しすぎんだろ」

「ああ、進展しない。何から考えればいいのかも分からないな」

それと、携帯電話。

楓の携帯電話は、破壊されていたらしい。

ハンマーみたいなので叩かれて、粉々に。

ちなみに警察には、楓とあの日メールのやり取りをしたことは、話していない。

あの生きてることも分からなくなっていた僕は、質問に適当に首を縦に振ったり横に振ったりしていただけた。

「二階で、密室……ねえ」

と。

そこでひらめく。

偶発的なひらめきだ。

「二階の高さだったけど、あの窓から入ることも可能だよな……」

「ん？ ……ああ、確かに、お前の部屋から入れるな」

「違うよ。あそこまで、登って行けるんだ」

「どういうことだ？」

怪訝そうな顔をして、首をかしげる優奈。不覚にも、惚れてしまいそうになった。こいつ、よく見てみると、可愛いんだよな。

「僕の家と楓の家の間は、五十センチもないんだよ？ 手と足を両方の壁に突っ張って、手・足で交互に動かしていけば、登っていけるだろ。そうじゃなくても、背中・右足を僕の家の上に、両腕・左足を楓の家の壁に押し付けて、少しずつ上に上がる」

「……言っぶんには簡単だけどよ、できねーだろ。私じゃできねえな」

「筋肉あるヤツならできるだろ。例えば 朝片翔伍」

「……確かに、皆の尊敬の眼差しを一身に受ける野球部部长なら、できるかもしれねえけど」

「だろ？」

「でも、だから何なんだ？ 扉の前の紙のこと考えると、犯行時刻は八時までなんだろ？ だとすると、楓の部屋の窓は鍵がかかっている。どうやって犯人は楓に部屋に入れてもらったんだ？ 楓も何で入れるんだ？ 下から這い上がってきて窓ノックするような奴を」

「……はい、そうですね」

「……」

それから二人で黙り込んでしまい、そのまま昼休みは終了した。授業中も、考えにふける。

全然分らない。

「……」

楓のこと怒らせたまま、二度と会えなくなっちゃったなあ。

なんであの時だったんだろう……、  
一生後悔しなくちゃいけないじゃないか。  
気付いたら、ノートのページを握り締めていて、ぐちゃぐちゃに  
なっていた。

楓と最後に交わした会話は、何になるのだろう……。

あのメールの言葉でいいんだろうか。

『馬鹿馬鹿うそつき！ こんな時間にお風呂なんか入るわけないよ！  
直弥くんなんてもう知らない！』

多分本当には怒ってはなかったんだと思うけど……。

「……ん？」

違和感、だ。

何だろう　これ。

おかしくねえ？

どこが？

「直弥くん？」

メールでは《二人きり》となるらしく、僕の呼び方は《直弥》だ。  
くん付けじゃない。

あの時は呑気に《ああ、怒ってるからこんな風によそよそしく呼  
んでるんだろうな》って思ったけれど　本当にそうか？

しかし、違うとして、何だ？

4

家に帰って僕はまず水分補給をした。

夏で暑いし、水分補給は大切だ。

水道水をコップにためてゴクゴクと。

飲み終えて、二階に上がろうとしたところでちょうど玄関の扉が

開いて、妹が帰って来た。

階段下の僕と玄関の妹。お互いに目が合う。

妹は気まずそうな顔をして、目を背ける。

なんだか、ひどく落ち込んでいるようだ。

楓の死のせいじゃ、ないだろう。

そりゃ悲しみはするだろうが、でも妹は、そこまで楓と仲が良かったとか、そういうわけじゃない。

僕のせいだ。

しかし、気にしてもいられない。いつかみたいに、またコロッと立ち直ることだろう。

「なあ流々、この前の日曜の夜、何してたの？」

一応、だ。

このまま何も言わずに二階に上がって行くのは僕も少し気まずかったから、そう訊いた。

妹は目をそらしたまま、

「え、えつと、たしか……お兄ちゃんがお風呂に入った時は、自分の部屋で勉強してて、でも途中で分からない問題が出てきちゃって、答え見ても全然意味が分からなかったから、リビングに下りて、インターネットで調べてましたよ。それで途中、楓ちゃんがピンポンしてきて……。それで、夜ごはんの後は、部屋で数学の勉強を……」

「そうか、うん、そこまでいいよ。ありがとう」

「あつ、う、うん……どういたしまして、です」

妹はそこで一度だけちらりと僕の方へ目を向けた。

僕はそれに微笑んでから、二階に上がった。

今の話が本当なら、妹に楓を殺すことは不可能だ。

動機は           あるんだけど。

部屋でも僕は、楓が殺された事件について考え続けた。

気になる点は多く存在するが、事件当時、悲鳴が聞こえなかったというのもおかしな話である。

同じ家の中だ。部屋で楓が悲鳴を上げれば、母親にも聞こえるだろう。その日、母親はずっと家にいたというし。

殺されそうになって、楓が悲鳴を上げないのもおかしい。だいた

い、どこから入ったのだとしても、犯人が部屋に入って来た時点で悲鳴くらいあげそうなものである。

ばたばたとか、そういうあわただしい音も聞こえなかったみたいだし……。

つまり、悲鳴の上げられない、死に方をしたといことだろうか？  
体がバラバラにされていたからといって、死因がそれじゃないことも考えられる。

例えば、首を絞められて殺されて、その後体をバラバラにされたとか。

十分に考えられる。

死因については、僕も知らないんだから。

自殺はあり得ない。自分で自分の体をあんなにバラバラにできるはずがない。それに、部屋には凶器も残されていなかったのだから血の量から見ても、あの部屋で殺されたことも間違いない。

だいたい、楓の母親の証言によれば、楓は家を出ていないらしい。もちろん、あの《お使い》の時を覗いて、だ。

首絞め殺人　絞殺、か。

しかし死体は解体されていた。その理由は？

首を絞めて殺した後に、わざわざ死体を解体した　理由、は？

「やっぱり……楓に恨みがあつたヤツの犯行だよなあ」

とすると　朝片翔伍。

あー、頭痛くなってきた。

でも、早く回答を見つけ出さして犯人にしかるべき制裁を与えないと、警察に先を越されてしまう。

警察　大人　プロの集団、だ。もうそろそろ、犯人は掴まってしまうだろう。

妹の好きな数学のように、考えてみようか。

つまり　様々な角度から、アプローチをかけてみる。

「……………」

僕は携帯電話を手にとり、あのメール　楓からの最後のメール

を見た。あの、気になっていたやつだ。

発信時刻、五時二十五分……。まあ、丁度コンビニに着いた頃の時間だな。

「直弥くん……ねえ」

直弥くん直弥くん……、

あれ？

「ちょっと待てよ。これ……」

一つの事実を見つけて、それにより、他の事実も見えてくる。点と点が、結ばれていく。

そんな感じた。

数学の文章題だって、解き方が分かっちゃえば、あとは計算作業だけ。

ケアレスミスだけ防げば、正解に辿りつく。

「ふむふむ……つまり、どういうことだ？」

僕は、近くにあった学校で使用している大学ノートをさっと手元に引き寄せると、シャープペンシルで、分かったことを次々と書きだした。

途中、芯が何度も折れて、いらいらする。

アリバイ。鍵。家と家の間隔。窓。紙。メール。恨み。時間。証言。お使い。コンビニ。二階。

様々な単語が脳内を駆け巡り、そして

そして、辿りついた。

回答。

真相。

「ああ　なるほどね」

こんなことか。

「　つまらねえ」

ほんとに、つまらない回答だ。

笑ってしまいそうになる。

何が完璧なアリバイだ。

朝片翔伍のアリバイ 穴だらけじゃねえか。

全部の真相に気付いた僕は、しばらく泣いた。  
全部、僕のせいだった。

明日、僕は全てを終わらす。  
カタをつける。

いや、やり直すと、言うべきなのかな。

- ・おろおろすいり愚愚推理、終わり・
- ・まいまいしまい、へ・



まいまいしまい

0

いつまわりはじめて、いつとまらなくなったのだろう。  
多分、これからもまわりつつづけるんだ。  
そう、死ぬまで。

1

日が変わり、金曜日。

昼休みに、僕は隣のクラスに出向き、優奈を呼んだ。

「どうした冬月」

優奈はいつも通りのポニーテールだ。

「優奈、放課後、空いてる？」

「ん、空いてるが」

「そうか。じゃあ、僕の家に来てくれ」

「ん、どうしてだ」

「分かったよ」

ぴく、と、優奈が僕のその言葉に反応した。  
表情も、真剣になる。

「誰が犯人なのか　が？」

「ああ、そうだ」

昨夜、僕は推理を完成させた。  
どこにも間違いはない。

完璧に、

すべて解けた。

「それを、お前の家で話そうと？」

「ああ、そうだ」

「……分かった。確かに、学校でできるような話じゃないよな」

「そういうこと。もし僕よりも早く着いちゃったら、勝手に僕の部屋に上がっていいよ。妹が多分入れてくれる」

あ、でも妹部活やってくるのかな

まあ、その場合でも母親がいるか

「了解だ。　覚悟を決めとくよ」

「うん、そうしておいてくれ」

覚悟　犯人を殺す覚悟

それなら僕は、とっくにできてるよ。

もう一人、声をかける相手がいた。

「翔伍、放課後、ちょっと、いいか？」

教室の椅子に、ぼーっと座っている朝片翔伍の肩を叩いて、僕はそう言った。

翔伍は休み時間、ずっとこうだ。

だから他のクラスメイトも、気を遣って、翔伍には話しかけないようにしている。

「ん、ああ、直弥か。放課後？　部活だよ」

「部活の前だよ。五分くらい」

「ああ、なら別にいいけど　何だ？　今じゃ駄目なのか？」

うつろな目をしている。

昨日までの僕みたいだ。

でも僕は、もう、回答を出したから。

あとは、後始末。

いや、本来の目的の達成　だな。

「放課後だ。こっちの校舎の、西側階段の、上に来てくれるか？」

「ああ、分かった。ところで、探偵ごっこは順調か？」

「うん、順調」

「そうか……」

言って、翔伍は僕から目をそらし、思いつめたような表情になっ

た。

用件は伝えたので、僕は適当に校内を歩くことにした。

今日で、終わって、

今日で、始まる。

今回の事件のきっかけを作ったのは、春風蒼波だ。

あの、僕に好意を抱いていたと言う、女子。

しかしそれが理由で、姫宮楓から恨みを買ってしまった。

姫宮楓は、仲良さげな僕と春風蒼波のことを見て、ずっと苦しんでいて。

そして、春風蒼波は殺された。

首を絞められて。

北校舎の一年生用女子トイレで、死体となって、発見された。

僕と今度買い物に行く約束をして嬉しそうだった彼女は、殺された。

僕は姫宮楓との曖昧だった関係性をはっきりと《恋人》にした。

それからしばらくして、姫宮楓の死。

部屋で、体をバラバラにされていた。

殺したのは、当然

朝片翔伍だ。

2

放課後、生徒達はそれぞれ、下校するなり、部活に行くなりして、学校の雰囲気はがらりと変わる。

どこからか、吹奏楽部の演奏が聞こえて、運動部の生徒達の掛け声も聞こえる。

そんなどこにでもある風景から解離して、僕は南校舎四階、西側階段の上にいた。

ここで、朝片翔伍を待つ。

「よう。で 何の用だ？」

翔伍は階段を上がって、やって来た。

僕の曖昧な人間関係が巻き起こした今回の一連の事件、そのの、  
完結編だ。

これにて終了。

「分かってるはずだよ。姫宮楓殺害の罪で処罰です」

「ああ、そういうことな。すげえすげえ。よく分かったな。お前のことだ。あてずっぽうってんじゃないくて、ちゃんと全部分かったんだろ」

「もちろんだよ。簡単すぎて拍子抜け」

翔伍は僕の正面で　二メートルほどの間隔をあけて　立ち止まった。僕に体を向け、対峙する。

「で、どうすんだ？　オレを警察に突き出すつもりか？」

「いいや。別に僕は何もしないよ。たださ、言いたいことがあってね」

「へえ、言ってみろよ」

「翔伍、お前さ、分かってるよな？」

「何が？」

僕は間を持たせずに、さらりと、言った。

「お前　人殺したんだぜ？」

翔伍の表情が、停止した。  
フリーズ  
凍結。

「勘違いしてんのかもしれねえけど、お前がやったことは、誰のた・めにもな・って・い・ない」

「ち」

翔伍は、震える声で、怒鳴った。

「違うッ！」

対して僕は、冷静なままで、言葉を紡ぐ。

「一体何が違うんだい。君は自分のために楓を殺したただけだ」

「違うッ！ オレは、蒼波のためにッ！」

「へえ、蒼波」

「あ？」

「蒼波なら、とつくに死んでんじゃん」

「ッ！？」

翔伍が、目を見開いた。

口が、何かを発音しようとしたが、そのまま、何も言えずに、開いたままになる。

無様なツラだ。

先程までの、《すべてどうでもいい》みたいな表情では、すでにない。

あんな表情、できるはずがない。

僕は今、ピンポイントで朝片翔伍の弱みを刺激しているんだからだから、すぐに崩れる。

「死んだ人間のためにした？ そんなはずねえよ。そいつ、死んでるし。お前はただ、自己満足で人殺しただけだろうがよ」

「ち 違、」

「違うねえよ。阿呆じゃねえの？ 人を殺したっていうのがどういうことだか、ちゃんと分かってんのか？」

「あ ああ あ」

翔伍の全身が、ぶるぶると、小刻みに震えだす。

僕が一步翔伍に近づくと、翔伍は一步、後ろに引きさがった。

「あんなに体をばらばらに刻んで、そのくせ罪から逃れて、警察に怯えて、ずつとぼーっと椅子に座って 馬鹿じゃねえの？ お前はとつくに終わってんだよ」

「が …… あ」

僕は一步一步近づいていき、

翔伍は一步一步、引き下がる。

僕に圧倒されているかのように。

僕に恐怖しているかのように。

「許してもらえだなんて思うなよ？ お前が蒼波を殺した楓を憎んだ通り、楓を殺したお前は、これから全員に憎まれる、拒絶される、軽蔑される。社会からはじき出される」

「ち　ちが　」

何かを言おうとする翔伍を遮り、僕は反論の隙をあたえず、一気にまくし立てる。

「甘えんな。人を殺すっていうのはそういうことだ。お前を今まで慕ってくれた奴らは皆お前を見捨てる。お前は誰にも認めてもらえない。逃げられるだなんて、絶対思うな。お前は自分のために人を殺した最低の人間だ。幼馴染を言い訳にして、逃げて逃げて、春風蒼波も浮かばれないよな」

「　な　なにを　き　」

「だから僕は、こう言うために、お前をここに呼んだ　」

翔伍は背中を壁につけて、もう、逃げられない。下がれない。僕は、そんな翔伍に一步一步近づき、目の前に、立った。

「　お前、死んだほうがいいんじゃないの？」

翔伍が、ぶつぶつと何やら呟き続けるのを、止めた。

この男　朝片翔伍は、姫宮楓を殺してからずっと、誰かにこう言ってもらえるのを、待っていたんだ。

本当は全部、自分で分かっていた。

自分のしたことは　自分のためでしかなく、自分の責任でしかないことに。

そして、楓をバラバラに解体した時の映像が脳内をぐるぐると回り、苦しみ続けていた。

終わるうにも終われずに、もがき続け、憔悴していた。

だから僕が、言っただけだ。

お前、死んだ方がいいんじゃないの　と。

これが、物語の終止符<sup>ヒリオド</sup>となる、シメの言葉だ。

一連の事件の、ラストを飾る言葉。

死をすすめる言葉。

お終いの言葉。

つまらない 本当につまらない、幕引きだ。

多くの人を巻き込んだ、事件の犯人、朝片翔伍の甘えに、僕は乗ってやつただけ。

終わらしてあげた。

僕はどれだけ、お人よしなんだろう。

「すみませんでした」

やがて、朝片翔伍は、そう言った。

泣いていた。

きつと、悲しいんだと思う。

取り返しがつかなくなってしまうて、悲しいんだと思う。

もうこいつは、死ぬしかないから。

僕は、やはり落ちついた声で、返した。

「許さねえよ」

3

僕が家に帰り自分の部屋へ行くと、津辻優奈がベッドの上で、僕を待っていた。

「待ちくたびれたぞ。何やってたんだ」

「お前こそ僕のベッドの上でごろごろして、何やってんだ」

「どっ、どうでもいいだろ！」

何故か顔を真っ赤にして優奈は僕のベッドの上から慌てて下りた。  
「で、早く教えてくれよ。その犯人ってのを」

「朝片翔伍。こいつが犯人だ」

僕は鞆を床に下ろすと、ベッドの上に座った。優奈は僕の正面に立っている。

「どうやって殺したのか　分かったのか」

優奈は、何やら急いでいるようだ。僕にどんどん先を言うように促してくる。

「簡単だよ。翔伍のアリバイ。嘘だったんだ」

「全部か？」

「いや、一部。翔伍はね、部活のメンバー達とファミレスになんか行っていないんだよ」

「じゃあ……」

「いやごめん嘘ついた　確かにファミレスには行ったようだけれど、六時半までなんかいなかったんだ。他のメンバーは、そのくらいまでいたようなんだけど、翔伍は途中で抜けたんだよ。これは今日、そのメンバー達に確認した」

「そいつらも嘘ついてたってわけか？」

「ああ。月曜、つまり翌日、そう口裏を合わせるように言われてたんだよ、翔伍にね。ほら、翔伍は部活の部長でエースで　皆の憧れの存在だろ？　だから皆、嘘をつくのを快諾してたんだよ。何人かは、楓を殺したのが翔伍だって気付いてたみたいなんだけど、それでも嘘をついていた。翔伍が復讐でやったんだってことは言わずと分かるからね」

「なのに、なんで今日そいつらはお前にそれを教えてくれたんだよ」  
「楓がどんな風に殺されてたのか。詳しく話してやったよ。部屋の中にばら撒かれていた様子をね。そうしたら、皆簡単に教えてくれた」

「……………」

そして僕は、一気に、推理を披露した。

「話を戻すよ。翔伍は途中でファミレスを抜け、楓の家に向かった。着いたのが、丁度楓がお使いから帰って来た頃だ。」



「そして、翔伍は、楓の家に忍び込んだ。

「どうやって忍び込んだのか、だって？ 簡単だよ。開いていた窓から、こっそり入ったんだ。楓の母親に見つからないようにね。あの日、すごい暑かったの覚えてる？ すごい暑かったよね。だから楓の家では、家中の窓を開けていたんだろうと思うよ。だから侵入は簡単だ。

「それから二階に上がり、楓の部屋に侵入。僕に腹を立てる振りをして遊んでいた楓は窓の鍵は閉めていたけど、もちろん扉の鍵はしめてないよ。

「次に、楓が悲鳴を上げないうちに、用意していたロープが何かで、楓の首を絞める。これなら悲鳴は聞こえないよね。

「それから、定規を使って例の《タご飯いらない》っていうのを書いて、扉の前に置いて、扉には鍵をかけた。

「で、翔伍は楓の体をバラバラにしたんだ。これの目的は、ただ単純に《憎しみを晴らすため》だろうね。まあこの時の翔伍は《蒼波のため》だなんておかしい勘違いをいていたんだろうけれど。あ、多分返り血とか浴びないように、ベッドのシーツをまとうなり何なりしていたんだと思うよ。当然だけども。

「でも途中、僕からメールが、楓の携帯に入った。それで翔伍は、楓になりきって返信したんだ。でもご存知の通り、楓は皆の前では僕のことを《直弥くん》と呼んでいたからね。翔伍はそのメールの返信で、僕のことを《直弥くん》と書いてしまったんだよ。その後、携帯をハンマーで破壊。

「なんで携帯を破壊したのか？ ああ、ただ単にストレスを携帯にぶつけたんじゃないかな。ハンマーは多分これも用意していたんだろうね。楓の死体を甚振るために。まあ、この時の翔伍は多分興奮状態だったから、狂人の奇行だよ。

「そして、窓の鍵を開け、前に説明したやり方で、僕の家と楓の家の壁の間を下へと下りたんだ。それから走って家に帰って、少し残っていた血のにおいを消したかったんだろうね。すぐに風呂に入

った。

「ああ、それだと、僕が寝るときにも楓の窓の鍵が閉まっていたことに説明がつかないじゃないか、って？ うん、これのせいで警察もなかなか困ってるんだろ？ 簡単だよ。僕の勘違い。」

「僕、見るだけで、実際に窓が開くかどうかを手で試したりはしてないんだ。だけど夜で暗かったからね、見間違えてた。ほら、どうせ閉まってるんだろ？ っと思いついて見たし。」

「はい、これで全部だよ。 推理終了」

僕が喋り終わると、優奈はすぐに、僕の部屋を飛び出して行った。翔伍を殺しに行ったのだろう。

今の優奈は一見落ちついてるように見えるけれど、やはり感情を制御できていない。

まあ、親友が殺されたんだもんね。

当然の話だ。

これで、後始末も全部終わるか。

いや、あと一つ、一番大事なことが残っている。

僕の部屋での楓の声を リビングにいた両親でさえ気付かなかったその声を 風呂場にいたのに気付けたほどに耳のいい彼女は、きっと今の嘘推理も、隣の部屋で聞いてくれただろう。

その後、僕の部屋に、開きっぱなしになった扉から、妹 冬月 流々が入ってきた。

「お兄ちゃん……」

「流々……」

僕は、自分の妹を、愛おしく、見つめた。

流々は、僕の部屋に駆け込んでくるようにして、直後、僕に抱きついた。

手を僕の首に回し、顔を僕の胸元に埋めるようにして。

「お兄ちゃん、なんで、なんで流々を、守ってくれたんですか……っ？」

泣きじゃくりながら、流々はそう言う。

溜まっていたのだろう。

二年間、ずっと、流々は、溜めこんできたのだろう。

だからこれは、僕の責任だ。

僕のせいだ。

「お兄ちゃんが大切なのは……楓ちゃんなのに……、お兄ちゃん……  
…どうして……っ」

「僕が一番大切なのはお前だよ、流々」

「っ　！？」

「ごめんな、今まで」

僕は流々の髪を、そっと撫でた。片方の手は背中にまわして、流々を強く、抱きしめる。

全部、僕が悪かった。

だから僕は昨日、泣いたんだ。

自分の愚かしさに。

「本当に、ごめん」

僕は流々の顔を強引にあげさせて、そして、

二年前と同じように、流々のその小さな唇に、自分の唇を、重ねた。

- ・舞まいまいしまいい妹お終い、終わり・
- ・最終章：わいわいかんけい、へ・

わいわいかんけい

0

簡単な話。

二年前、僕は妹に拒絶された。

いや、妹の方はその頃は道徳がある人格だったから、あれは反射的なものだったのだろう。

口付けして、それっきり。

僕も《自分が妹のことが恋愛対象として好き》という事実には嫌悪感を抱いていた。もちろん、妹ではなく、僕に。いや、背徳感か。自分がひどく気持ち悪かった。妹も僕のことをきつと好きだったのだろうけれど、その妹の方も罪悪感のようなものを抱いていたのだろう。

社会的に、いけないことだ。

タブーと言ってもいい。

だからこそ、というのもあるのだろうけれど。

それで、僕らは二年前、口付けを機に、言葉では言い表せないような、曖昧な境界を引き、距離を置いた。

そんな時に、楓が引越してきたのだ。

楓は、性格的にも、顔のつくりからして、妹に似ていた。

だから僕は、妹でなく、楓を好きになろうと頑張った。

楓を、妹の代わりにしたのだ。

代替品。

そして二年。

僕は楓が好きだったし、妹のことは　　本当は覚えていたのだけれど　　考えないことにした。　　

しかし妹は、ずっと僕と楓の関係を見て、イライラして、苦しんでいたのだろう。

それが、簡単な、真相だ。

1

「今日は優奈とデートです。いいい」

「何嘘ついてんだお前！」

「ああ、ごめんごめん。優奈と初めて学校外で会ってるから、はしやいじゃって。あ、でも僕の家とか何度か来てもらってるか。あと帰り途中に撃たれたり」

さて、今日は日曜日 休日だ。

僕のせいで起こった一連の事件が、後始末も含めて全て完結してから、二日後。

僕は優奈に呼び出されて、この駅前のファーストフード店に来ている。

「で、何の話だい？ 告白だったら受けられないよ」

「誰がするか！ あー、ほら、お礼だお礼」

「お礼？ …… ああ、そういうことね。だったら僕の部屋でも別に良かったんじゃない？」

まあ、本心としては優奈の部屋がいいんだけど、それはさすがに変態だから口には出さないよ。

「いいや。お前の部屋で会話すると、耳のいい妹さんに筒抜けだから」

「まあね」

「まあとりあえず、ありがとうな。二日空いて、私も落ちついたよ。今考えれば、あの時の自分が信じられない。つっても、ほとんど覚えていないんだけどな。とにかく、お前が事前に手をまわしておいてくれなければ、私は朝片を殺してしまっていた」

「ああ、あのままいつたら確かにそうなって、あの逆上状態の君なら計画的な殺人なんてできないだろうから、そうだね、今頃君は警察に捕まってたよね。少年院行きかな」

朝片翔伍の自殺　南校舎四階からの飛び降り自殺だったらしいのことは、ニュースで知った。

翔伍を殺そうと学校に行った優奈だったが、その頃にはもう翔伍は自殺した後だったのだろう。

「だから礼を言ってるんだ。　復讐は自己満足でしかない、か。」

お前本当、うまいこと言うよな」

「ああ、どうだろ。どっかで聞いた言葉だって気もするけどな。誰から聞いたんだろう……。故頃こころとかからかな？　自慢げに解説してた気がする」

「でも、それだけじゃない　私が今日お前を呼んだ理由はな。だいたい、これだけだったら電話で足りた」

「ん？」

「あれから頭冷やして考えてみたんだが。お前、私に嘘教えたな？」  
おお。

僕は少し驚いた。

「よく分かったね。なんで？　一応、あれでも筋は通ってるんだけど」

「通ってないから分かったんだ。無能な私だが、さすがにあれくらいは分かる」

「へえ」

「楓が殺されたあの日はすごい猛暑日だったよな。だから楓の家では窓を全開にされていて、それで朝片翔伍は侵入できた　とお前は言っていた。でもさ　あんな暑かったらどんなエコ家庭でもエアコン使うだろ」

「はははっ」

思わず、笑ってしまった。危ない危ない、コーヒーを嘔き出しちゃうところだったよ。

「うん、僕も考えた時さ、そこはおかしいと思ってたんだよね」

「エアコン使えば、当然家中の窓は閉める　逆に朝片翔伍は家に侵入できないんだよな」

「そうそう。楓の家はリビング・和室・ダイニング・キッチンが全部繋がってるから、エアコン使っと、空いている窓はトイレと風呂場だけなんだよね。でもこの二つ、柵がついてるから。それに、トイレと風呂場の窓が閉まってることも考えられるし」

「と言っても、楓の部屋の窓が閉まっていたと言ってたのが勘違いでした、っつのーが一番無理あるけどな」  
「だね」

しかし、嘘推理がバレたところで何の問題もない。

真相に気付いていないのだったら、何の問題もない。

「そして私は二日間考えて、全部分かったよ」

「……………本当に？」

あれあれ、ちよつとピンチ。

「本当に、だ。私はお前と違って嘘はつかんよ」

「ふうん。ちよつと長くなりそうだね、コーヒーもう一杯頼んでこようかな」

「いや、そんな長くはならない。そのコーヒーで足りるよ。ん？」

お前、ブラックで飲んでるのか、かつくいーじゃん」

「まあね。惚れるだろ」

「いいや」

心の中で舌打ち。

さつきからちよいちよい優奈のこと狙ってるのをアピールしてるんだけど、効かない。

「まず犯人。犯人は朝片翔伍ともう一人　お前の妹、冬月流々だ」

「へえ。なんで流々が犯人だって？」

こいつ、本当にぴったり当てやがった。

推理小説で探偵に追い詰められた犯人の心境だ。まあ、僕は犯人じゃないのだが。

「まず私がお前の妹を疑ったのは、証言の食い違いだ。私は警察から楓の死体は《原型が分からないほど、体中バラバラにくちゃぐちゃにされていた》と聞いていた。しかしお前の証言だと、頭は無事

だったそうじゃないか。警察が私にこんな嘘をつく理由はないと思うんだよ。だって、頭が無事だっというのは救われる話じゃないか。つまり、警察が発見した時は、楓の頭もぐちゃぐちゃになっていたんだ」

僕と同じ気付き方をしてやる。

あなどれないな。

もしこれが二日早かったら、大変なことになっていた。

「お前が楓の死体を発見して気を失ってから、お前の妹が警察を呼ぶまでに楓の頭をぐちゃぐちゃにすることが可能だったのは、その、お前の妹しかない。じゃあ、何故お前の妹は楓の顔をぐちゃぐちゃにしたのか。恨みがあつたからだろう。そうすると、お前の妹には楓を殺す動機があつたということになる。で、私が考えに考えた末に行きついた推理を、これから聞かせてやる」

そして一呼吸置いてから、優奈はまさに推理小説の探偵よろしく、推理を披露し始めた。

「まず、犯人。これはさっき言った通り、朝片翔伍とお前の妹だ。

何故かは知らないが、二人は共犯関係になった。最初、ちょうど偶然風呂から上がったお前の妹は自分の部屋で、お前と楓の会話を聞いていた。そして、楓が一人でコンビニに行くことを知った。その直後に、お前の妹は、お前の部屋に入って来たんだったよな。お前と少し陰悪になっていたのに、突然、入って来たんだよな。

「で、お前の妹は楓の隣に座って、こっそりと、携帯電話を奪ったんだ。その時楓は、私との電話を終えた時だったからな、当然携帯電話は楓の隣に置いてあつたわけだ。

「そして楓は買い物へ。お前は風呂に入ることにしたんだろ？ まあ、お前が入るつもりなかったとしても、お前の妹がそれをすすめて。自分はもう入っちゃってるわけだし。結果、お前は風呂に入ることになっただろう。

「お前の妹は朝片翔伍に連絡をとり、計画をそこで伝えた。ファミレスにいた朝片翔伍は、それを聞いて、一人抜けて、楓が向かった



コンビニに、同じく向かった。ノコギリを使ったんだか包丁を使ったんだかは知らないが、おそらくそれは事前に持っていたんだろくな お前の妹に指示されて。多分スポーツバックに入れていたのだろう。部活帰りだから、当然スポーツバックは持っている。

「一方お前の妹は、一階で母親を証人にアリバイを作りつつ、楓がコンビニにいただろう時間帯に、先程奪った楓の携帯電話から、お前の携帯電話に、メールを送信。ビールの種類が分からない、つて言うアレな。これはまあ、お前に《楓がメールを無視されて、腹を立てている》という状況を作りだすためだな。

「朝片翔伍のほうは、帰り途中の楓をどこかひと気のないところに連れ込んで、首を絞めて殺せばいい。多分ロープを使ったのだろうが、これも用意していたのだろう。お前の妹は、いつか来るだろう楓を殺せるチャンスが、いつきてもいいように、そう指示していただろうから。

「その後、楓の死体を、スポーツバックにつめる。この際はまだ解体はしてねえだろ。そしたら、血がスポーツバックに付着しちまうからな。

「そしてそのまま、朝片翔伍はお前の家へ。《楓をひと気のないところに連れ込んで、さらに殺したぶんのタイムロス》をつめるために、走っていったんだろな。でも、朝片翔伍の足の速さじゃ、逆にタイムロスなんて取り返して、早く着いちゃう。だからお前は《思ったよりも早く戻って来たな》って、妹から楓がビールを買ってきてくれたことを聞かされた時に思ったんだろな。

「お前の妹はそれを出迎え、朝片翔伍をこっそり、自分の部屋に上げる。そして朝片翔伍が持ち帰ったビールを受け取り、さっき言った通り風呂に入っていたお前にそのことを伝えて、《楓がまだ生きている》と思わせて、ビールは冷蔵庫に。

「朝片翔伍とお前の妹は、お前の部屋に次に行く。で、窓をつたって、朝片翔伍は楓の部屋へ。その時、お前の妹は奪っていた携帯電話を朝片翔伍に渡した。

「朝片翔伍は楓の部屋の窓・扉の鍵を全て閉めて、例の《ご飯いらない》っていう紙は扉の前に置いておいた。そして、後は楓の死体をばらばらにした。恨みで、な。」

「一方お前は風呂からあがる。ああ、《お前が朝片翔伍が来る前に風呂から上がってしまう危険性》もあるじゃないか、っていう問題か。それは心配いらないだろうな。だってお前 別に寝むそうにもしていなかった楓が、お前が風呂からあがってきたら寝ているほどに 風呂長いんだろ？」

「とにかくお前は窓を開けようとしただろうが、朝片翔伍はお前の妹の指示通り、それを無視する。」

「次にお前は楓の携帯電話にメールを送った。それに朝片翔伍は返信した。まだ楓が生きていると思わせるためにな。しかしここでミスをした。朝片翔伍は《楓がメールでお前をくん付けしない》ことを知らなかったから《直弥くん》と表記して返信しちゃったんだ。」

「とにかく、この返信によってお前に《まだ楓は生きている》と認識されられたから、これもお前の妹の指示通りに、楓の携帯電話を朝片翔伍は破壊したんだろうな。お前の妹がその携帯電話を破壊させた理由は、警察に《楓がコンビニでメールをうった、ということになっていいること》を履歴から知らせないようにするためだろう。」

「だって、楓は実際はコンビニで携帯電話と取り出してさえないこととは、監視カメラの記録に残ってしまってるんだから。あとはお前の妹が適当な理由をつけて、お前にメールのことを喋らせないようにすればいい。少しでも楓の事件に関係ないように見せるため、とか何とか言っつてな。まあこれは、お前がお前の妹のことを怒鳴りつけたせいで、落ち込みしまって、お前の妹は言えなかっただろうけど。でもお前も意気消沈してたから、警察にこれを言ったりはしなかったんだよな。だから警察は、まだ真相に気付いてない。結果オーライっていうやつか？」

「で、お前が夕食で一階に下りていったのを機に、朝片翔伍は楓の部屋から出た。どうやって出たかって言うと、お前が言うように、

壁と壁の間を使ってだ。ちなみに入る時は、スポーツバックの中に楓の死体入れてるから、さすがに重くて無理だろう。

「これが七時。それから走って、七時半に朝片翔伍は家についた。真っ先に風呂に入ったんだよな。血の臭いを消すのに。」

「これだと、お前が寝る時間でも楓の部屋の鍵がかかっていたことに説明がつかない。お前の勘違い、なんてーのなわけがない。だいたい、何度か確認してるんだろ？ そんな勘違いはあり得ない。」

「では何故か。簡単だよ。お前の妹が入っていたんだ。夕食を終え、お前よりも先にお前の妹は二階に上がり、お前の部屋から、楓の部屋に移って、鍵を閉めた。この時楓の顔を傷つけなかったのは、なんで何だろうな、気付かなかっただけかもしれない。まあ私は、翌日お前の悲鳴を聞いて駆け付けた妹が、お前が楓の頭を抱きかかえて気を失ってるのを見て、耐えられなくなってやったんじゃないかって思うけどな。」

「あと、多分朝片翔伍の方は、お前のために顔は傷つけなかったんだろうけどな。朝片翔伍 あいつ、一応友達思いなやつだもんな。」「そして妹は、その部屋にずっといた。お前が寝るまで、ずっとな。で、お前の部屋の電気が消え、お前が寝た頃になって、部屋から出たんだ。お前の部屋にうつったわけだな。で、多分もう一度風呂に入ったと思うぞ、血のおいを消すのに。それから寝て、朝、お前が楓の死体を発見したっていうわけだ。」

「まあ、これだけだが、それにしても、すごいよな、お前の妹。楓がお使いに一人でいくらしいことを知って、一瞬でこれを思いついたわけだから さすがわが校始まって以来の天才と呼ばれるだけはある。数学に限ってたがな」

そして優奈はそこまで話し終えると、コーヒを飲んだ。

「すげー自信ある推理なんだが、どうだった？」

「ああ 当たりだよ。すごいすごい、優奈って頭良かったんだね」「お前からいろんな情報聞いてたのが大きいよ。いやー、にしても、全部喋ってスッキリしたぜ。ただ、なんでお前の妹は楓を恨んでた

んだ？」

「……………」

それは 言えない。

誰にも、秘密、だ。

僕達兄妹二人だけの 秘密。

二年間、嫉妬し続けてきた妹のきもちなんて 測り知ることも  
できない。

だから、これは僕のせいだったんだ。

「で、どうすんだ？ 僕の妹も復讐で殺すのか？」

「いいや。だいたい、さっき言ったろ あの時は普通じゃなかったんだって。落ちつけば、殺すだなんてとんでもない。楓はもう

死んじゃったし。ただ、

「ん？」

「許しはしないよ」

口調こそ晴れやかだったが どうだろう。

親友を殺された津辻優奈。

もしかしたら、一番不幸なのは、優奈なのかもしれないな。

こうやってまだ、生き続けなければならぬし。

「お前が私に嘘を教えてのも、朝片翔伍を殺したのも 妹さんを守るためなんだろう？ 妹の共犯者の朝片翔伍が死ねば、お前の妹がやったことは、バレるわけないもんな。警察でも、こんなの、分か  
りっこねーよ。子供なら、分かるかもしれないが」

大人は子供をナメているよね 楓を思い出す。

楓が好きだった。

でも、あくまで楓は、妹の代わりでしかなかった。

「ただよ、私もこれは分からなかったんだが、お前の妹と朝片翔伍は、どうやって手を組んだんだ？ お前の妹は、朝片翔伍の復讐心を利用して 朝片翔伍を操って・繰<sup>く</sup>って 楓を殺させたんだろ  
うけれど。お前には分かってるのか？」

「ああ、僕の妹が、朝片翔伍に、楓を殺そうって話を持ちかけたん

だよ。《春風蒼波を殺したのが楓だっという証拠》を持ってね」

「証拠？」

「写真だよ。僕の妹、写真部でさ。あの蒼波が殺された日は、前日に僕から部活のこと言われたから、妹、珍しく部活に出てたんだ。

それで、たまたま、蒼波の死体を北校舎四階の女子トイレに運んでいる楓を発見して、持っていたカメラでそれを撮影していたんだよ」

「はあん、納得。ただ、お前の妹も、朝片翔伍も 勘違いしてたんだな。まあ、春風蒼波の死亡推定時刻を知らないんだから、無理ないが」

「だね」

「もちろんお前は、春風蒼波を殺したのが私だってことは分かっているんだろ？」

「ああ、当たり前だろ。あんなもん、すぐ分かる。楓が考えたのか？」

「うん。私は楓の計画に乗っただけ。親友だもんね」

そう、蒼波を殺したのは、優奈だ。

あの、僕を中央階段の踊り場のところに待たせている時に、優奈は西側階段の上 四階にいた春風蒼波を、殺した。

首を絞めて。

首を絞めて人を殺す場合、うまくやると一分程度で殺すことができる。優奈は走って自分の鞆を教室に取りに行き、南校舎西側階段の上、四階にいた蒼波を殺害して、走って戻ってくる、というなかなか大変なことを、あの時やっていたのだ。

そして、アリバイ作りのために、仲が良くない僕と、一緒に下校した。

アリバイ作り そう、これだと、優奈には蒼波の死体を北校舎四階の女子トイレに運ぶことが不可能なのだ。

蒼波が南校舎四階でなく、北校舎四階で殺されていたのだとしても 優奈には、あそこから北校舎四階まで行って帰ってくる時間はない。

蒼波の死亡推定時刻がこの時だったことは、警察の僕に対する訊きこみで分かった。

勿論、警察が死亡推定時刻を覚えてくれたはずがない。でも、警察が僕に訊きこみしてくるのは、この時間帯のことばかりだったのだ。

二回目来た時も、この時間帯のこと　優奈のアリバイについて何度も説明させられた。

つまり、蒼波が死んだのは、この時間帯だったのだ。

楓の方は、この時間帯は、すぐに委員会に行っていたことが証明されているから、犯人なりえない。

さて、話を戻そう　では、蒼波の死体を南校舎四階から北校舎四階に運んだのは誰なのか。

当然、委員会を終えた楓だ。

楓は、蒼波の死体をスポーツバックにつめて、運んだのだ。

でも、そんなの重いに決まっている。運び方がおかしくなる。それを見つけて不審に思った僕の妹は、それをつけて、北校舎四階女子トイレで楓がスポーツバックから蒼波の死体を出したところで、写真をとったのだ。

これが真相。

他愛もない、下らない、なんてことはない、呆気ない、詰まらない、茶番で素朴な、答えだ。

首を絞められて殺された春風蒼波　まったく、《締まらない話》だ。

「ん、じゃあこれで終わりでいいかい？　なんかいろいろ思い出して気持ち悪くなってきたからさ」

僕が席を立とうとすると、優奈はそれを止めてきた。

「確認したいことが、あと二つ。答えてくれなくてもいいからよ」

「……何？」

「これは、あくまで推測の話だ」

「うん」

「本来、訊いてはいけないことなのかもしれない」

「うん」

「春風蒼波を殺したのは　お前なのか？」

「何を言っているんだい。殺したのは君だろ？　首を絞めてさ」

「そういうことじゃない。お前も、お前の妹が朝片翔伍を操ったように、私達を操っていたのか？」

「……………」

「《南校舎四階、西側階段の上で、放課後、春風蒼波は朝片翔伍を待つのに、いつも本を読んでいる》っていうの　嘘だろ」

「……………」

「だって、春風蒼波って、朝片翔伍と一緒に登下校なんてしてねえじゃん」

「……………」

「私も、楓から聞いてすぐ信じちゃったけどさ、これ、お前が楓についた嘘だろ？」

「……………」

「あの日、お前は、放課後あの場に来るように、春風蒼波に言っていたんだ。大事な話がある、とか何とかいえば、あの女のことだ

絶対行くもんな」

「……………」

「それを楓に、喧嘩をした前日にお前は教えた。……………どうりでな、私が行った時、春風蒼波はこう言っていたよ《あれ、直弥じゃないね？》」

「……………」

「不自然だと思ったんだ。今まで、あんなに楓のことを一番に考えて行動していたお前が、なんで楓が悲しむって分かってるのに、春風蒼波と親しそうにしていたのか」

「……………」

「あれは、楓が春風蒼波を殺すように　コントロールするためだったんだな」

「……………」

「その結果として、お前は曖昧だった関係性をはっきりさせて、楓を《恋人》にした。しかも、自分に絡んできて邪魔だった蒼波は死んだし。さらに、蒼波を殺させて、楓が後戻りできないようにした」

「……………」

「違うか？」

「……………さあね」

僕はそれだけ言って、立ちあがった。

僕の背中に、優奈はさらに声をかけてくる。

「朝片翔伍は飛び降り自殺になっていたけど、あれはお前が突き落としたのか？」

それにも答えずに、僕はそのまま、ファーストフード店から出ていった。

答えるべきじゃない。

さて、じゃあ、愛すべき妹が待つ家へ、帰ろうか。

そういえば、昔、勉強が嫌いだった妹に、算数を好きにさせたのは、僕だったっけ？

算数の面白さを教えてやったのは、僕だったっけ？

初めて算数のテストで満点をとった妹を褒めてやったのは、僕だったっけ？

それ以来、妹は算数・数学を極め続けているんだっけ？

ああ、やっぱり流々は、可愛いな。

見ると、ファーストフード店の前に並べられている植木鉢の中で、風に吹かれて勢いよく回っていた風車が、止まった。

・歪歪関係、わいわいかんけい 終わり・





## わいわいかんけい（後書き）

「くるくるまわる」の《くるくるまわる》はこれにて完結となります  
す いかがでしたでしょうか！

トリックや伏線などについてあれこれ解説しても興ざめなので、こ  
こではキャラクター達の名前について。

まず冬月直弥。語感で決めましたね。

で、犯人役の朝片翔伍は主人公と対比させる必要があったので、冬  
月の月が「夜」で、それに対して朝片の「朝」です。

春風蒼波は簡単です。彼女は直弥を追いかける恋する少女なので、  
「冬」を追う「春」です。

姫宮楓は、親友の津辻優奈と、「カエデ」「ツツジ」で植物繋がりが  
ですね。

ちなみに冬月流々ですが、彼女はこの物語のキーなので、《くるく  
るまわる》は「る」が三個使われているところから、その「る」を  
とって流々です。溜々流だとちょっとおかしいかな、と。

ご感想やご評価をいただけると嬉しいです！ 募集中つてやつです  
！ もちろん、批判も受け付けてます！

さて、この物語、第二幕に行きます。「くるくるまわる」の《いと  
いといいと》ですね。ただ、個人的な都合で、第二幕からは更新ス  
ピードが落ちると思いますので、ご了承ください。ちなみに、第二  
幕からもこちらでの更新です。

では、第一幕、読んでくださり、ありがとうございました！

## 食事の始まり

食事と言うのは、人類にとって欠かせないことの一つである。

それは、食欲ゆえの食事だ。

食べなければ死んでしまう。だから人間には食欲が備わり、それによって、人間は食事をする。

食欲ゆえの食事。

まあ、それはそうと、閑話休題だ。

僕は今回、絶対に触れてはいけないものに触れてしまった。

絶対にやってはいけないことを、やってしまった。

取り返しのつかないことを。

自分という存在を、ことごとく破滅へ導く、とんでもない状況へと、自らを置いてしまった。

知らないうちに、自分に関係ないところで、僕はそれに巻き込まれたのだ。

踏みこんではいけない禁忌の一線

それこそは、生徒会。

本来、絶対に関わってはいけないものとして別世界にあったソレに、僕は嵌った。

ああ、そういえば、さっきの話ね。

この物語は、食欲ゆえの食事を取り扱った物語ではない。

とにかく、この物語を見てみるといい。

これは、愛情ゆえの食事だ。

第二幕「いといといいと」

0

てをあわせてください。

おいしいきゅうしょくいただきます。

1

「ひひひ。直弥クンって、ほんと可愛いお顔してるよねえ。故頃サ  
マなんかはさ、キミのその童顔が目当てで学校に来てるフシがある  
んだけど、知ってたかな？」

「知らねえよ」

言つと、糸井故頃は、ひひひと笑った。

「無愛想だねえ。ひひひ、でも故頃サマなんかはさ、キミみたいな  
無愛想クンがだあい好きだからね。マニアだしね。ひひひ。無愛想  
マニアっつーこと。うーん、キミはそうだね、故頃サマ的には、無  
愛想順位四位つてところかな」

ひひひ、と八重歯やえはをちらつかせながら笑う故頃。

「それにしても、本当姫宮サンと春風サンがいなくなったのは故頃  
サマにとって好都合だった。だって、そのおかげで僕は今までみた  
いにこそこそせずに、堂々と直弥クンとお喋りできるんだもんね。  
ひひひ。嬉しいよ。本当に嬉しい。僕はキミとお喋りするのがめっ  
ぽう好きなんだから。こうして席替えのおかげで隣の席にもなった  
しね。運命というヤツを信じたくなる」

「君は本当によく喋るね。疲れないのか？」

「《君は本当によく喋るね。疲れないのか？》、おお、それぞれそ  
の言葉を待っていたのだよ。もっと言ってくれ」

この女、糸井故頃。彼女はこの給食の時間、席を隣とするクラス  
メイトだ。

後ろ髪を肩のところで切りそろえていて、前髪は特徴的。右目は見えているのだが、左目はその前髪で隠れてしまっているのだ。鬼<sup>き</sup>太郎<sup>たろう</sup>です。

成績は普通、勉強運動ともに正常値　しかし、僕に言わせれば変人、いや、ただの変態だ。

姫宮楓が生きていた時には、僕とは楓のいないところでこそそ話すことが多かった彼女なのだが（多分、気を遣ったのだろう。単に面倒事に巻き込まれなくなっただけかもしれないけれど　春風蒼波のように）、もうその楓はいないので、普段は僕にべたべた付きまとってくる。

僕がこの女子生徒を変態……もとい変人だと考えているのは、彼女が自ら立候補をして学年委員会に入ったところからきている。いや、それを理由に故頃を変人だと考えているのは、僕だけでなく、きつと学年中の生徒、皆がそうだ。

それについて、訊いたことがある。

なぜ、自ら好き好んで学年委員会になんて入ったのか、と。

あの生徒会に自分から近づくなんて、常軌を逸している、と。

しかし故頃はその質問に答えてくれなかった。誤魔化された。

「そのことについて次に故頃サマに質問したら　怒るね」

なんて言われて。

「……ってことなんだ。あれ、直弥くん？　直弥くん、キミ、ちゃんと故頃サマの話聞いてくれてる？　そういう放置プレイは感心しないな。故頃サマって寂しがりやさんなんだ、構ってくれないと泣いちゃうよう」

「ん……ああ、考え事してた。何だっけ？」

「……酷い。女の子のお話を聞かない男の子ってどうかと思うよ。だからね、明日からは土日だね？」

「土日だな。休日だ」

「うん、大部分の学生から見て、休日とはすなわち天国だ。ひひひ、故頃サマもそうなんだよ？　それでね、その土日の内、日曜を使っ

て、故頃サマはキミと映画を見に行きたいと言っているんだよ」

「ああ、妹さんと行くことをお勧めするよ」

「うん巫羽<sup>ふう</sup>も行くんだよ。しかしね、キミも行くんだよ。ひひひ」

「行かないよ。嫌だ嫌だ。なんで僕がキミ達姉妹と映画なんか……」

「……うん、そうか。ならばそうだね、仕方ない。うん。まあ、故頃サマも無理強いする気はないし、そこまで完璧に断られるとさすがにね、うん、うん、うんうん……」

あらまあ、故頃落ち込みモードだ。

故頃は意外と繊細なので、落ち込みやすい。

故頃は機嫌がいいと「ひひひ」と笑うのだが、気が沈むと「うんうんうんうん」とうるさくなる。

どうでもいいけどね。

## 2

生徒会。

我が校の生徒会は、端的に言って、《恐れられている集団》だ。

ここ二年間、生徒会メンバーは変わっていない。

誰も立候補しないのだ。生徒会に立候補しようとすると、現生徒会メンバーに、裏で潰される。

だから二年間、不変のメンバー。

会長。一名。

男子副会長。一名。

女子副会長。一名。

書記長。一名。

書記。一名。

会計。一名。

計 六名。

議員の子供だったり、教育委員会の子供だったり、刑事の子供だったり、PTA会長の子供だったり、医者の子供だったり何だった

り……らしい。

だから教師も迂闊に手を出すわけにはいかなく、黙認している。生徒会が裏でやっていること。それは 依頼の受付である。生徒からあらゆる悩みや頼みを聞き、そして、それを解決・達成する。

過去に一度 人殺しも、やったらしい。

かつて学園内で自殺をした生徒を自殺に追い込んだのも、その生徒会だとか。

ただ、出回っている噂はほとんど眉つばもので、実態がどうなのかは、何も知らない。

ただ、《依頼》をするためには、《交換条件》というのを出される という噂がある。

残念ながらその生徒会メンバーは僕のクラスにはいない。しかし、クラスでもやはり浮いているらしい。誰も、今では生徒会に関わろうとはしないのだけれど。

実態を誰も知らないのに、生徒会に近づかないことは、暗黙のルールだ。

我が校の、闇。

だから、学年委員になるのも、皆、嫌がるものなのだ。だから教師達が指名をして、学年委員は決められる。だって、学年委員になるということは、生徒会と接する機会が増えると言うことなのだから。

しかし糸井故頃は、自ら立候補して、学年委員会に入った。

どういっつもりなのだろう……。

とか考えながら、下校して、家についた。

「 お兄、ちやあああああああああああああああああああああ  
あああああああつ、んっ！」

直後、玄関で待ち構えていたらしい妹 流々が抱きついてきた。  
「おかえりです。えへへへへー」

流々は嬉しそうに頬ずりしてくる。

こんなことをしてこれるということは……そうか、母親は買い物にでも行っているのか。

「うん、ただいま」

靴を脱ぎつつ、頭を撫でてやる。

「土日ですね。日曜、今回は何処行きましようね。えへへ、楽しみですー」

流々は僕と片腕を組み、一緒に階段を上がりながら、そう言うてくる。

そう、僕は日曜日は毎週、流々とどこかへお出かけすることに決めている。

だから君からの誘いを断ったのだよ、故頃。

僕らは僕の部屋に入り、そのままベッドの上に座る。

「お兄ちゃん、流々、見たい映画があるんです」

映画、というワードに少しドキツとしたが、偶然だろう。

「へえ、じゃあ、日曜は映画見にいくのか？」

「はい！」

3

日曜日。

約束通り、僕は流々と一緒に、駅前のショッピングモールに入っている映画館へと向かった。

人が多くて鬱陶しい。半分くらい死なないかなあ。

「あー、上映開始されたばかりじゃん。次はえーっと、二時間後？ うわあー」

「やっぱりじゃないですかー。ちゃんと上映時間調べてから行きましようって何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も……」

そこまで言わえてねえ。

「仕方ねえ。本屋でも行つて時間つぶすか？」



「そうですね。数学の参考書買いますー」

また数学。もう極めなくていいだろ。お前は社会が苦手なんだから、そつちを頑張れよ。

というわけで、書店。このショッピングモールはこのあたりで一番大きいもので、この書店も県下最大級とかオープン時に言っていた。

特に買いたい本もなかったので、僕も流々と一緒に、参考書類の棚へ。

「お兄ちゃん他のところ見てもいいですよー？ 一時嵌りまくった戯曲はどうしたんですか？ 読まないんですか？」

「戯曲の話はやめてくれ。うんざりだ」

「そうですか」

「でも流々、長くなりますよー？ 三十分くらいここにいます」

「うーん、じゃあ僕も適当にぶらぶらしてくるかな」

「はい」

宣言通り、文庫本が並ぶ棚の前を歩いていると、なんかガチャガチャした小さな音が聞こえてきて、その方向を向くと 男の子がいた。

いや、僕と同じ年くらいか？

文庫本を立ち読みしている男の子は、頭に大きなヘッドホンをつけていて、ノイズはどうやらそれから聞こえてくるみたいだ。ロック難聴とかになるんじゃないかな、ってくらいの音量だ。ああ、道理でこのあたり、人がいないのか。こいつの垂れ流している雑音が鬱陶しいわけだな。何で誰も注意しないんだ、まったく。

「ん？」

と。

男の子が、僕を見た。

ちらり、と。

そして。

「何だ君か」

あたりを凍結してしまいそんな温度の声だった。

「あ？」

なんだ、こいつ、僕のことを、知ってるのか？

前髪が長くて、さらに立ち読みのために俯いているから、男の子の表情は窺えない。

やっぱ……知らないなあ。

「あ」

そこで男の子は顔をあげ、再び僕を見た。

寝むそんな目だ。空気に接していることが気だるそんな表情。

「そうか。君は僕を、知らないか」

言って、男の子は手に持っていた文庫本を、放り投げた。

おいおい。

男の子は僕に向き直ると、すたすたと近づいてきて、僕と三十センチほどの距離で止まった。

「初めまして。僕 なかやまこと ばんく 中山里反玖だよ」

そう名乗って、中山里くんはペコリと頭を下げてきた。距離が近くて頭が当たりそうになったので、僕は後ろに一步下がる。

何なんだ？

「ああ。そうか。これじゃあ駄目か。名前名乗っても何にもならないっていうわけか」

頭を上げ、僕の目を見ながら、変わらないの無表情で、中山里くんは言う。

「そうそう。僕ね 生徒会で書記長やってるよ」

「僕と同じ学校か」

しかも 生徒会。

なんで生徒会書記長が僕を知っていて、僕に挨拶してくるんだ。

「うんうんなかなかどうして いい顔してるね、冬月直弥」

名前も合っている。

「人を殺せる人の顔だ。そういう顔は、嫌いじゃないよ」

「……」

見透かしたようなことを言う。

書記長……つまり、三年生。僕と同じだ。

僕は集会などでもいつも寝ているから、こいつを知らなかったんだろっな。

僕はそっいつの、疎いから。

そっいつえば中山里反玖 聞いたことある名前じゃないか。

「良い反応だね。無関心そっだ。でも、内心戸惑っている って感じかい？ そっだね、きつと君はさ、感情を表情に出さないタイプなんだね。なら僕と同じだよ。仲良くしよっじゃないか」

そっで初めて中山里くんは笑った。

唇の端をつり上げて。

「……何で、僕のことを、知っているんだ」  
やっつと、言えた。

何故か、今まで、口を、開けなかつた。

威圧感。

自分より背が低いのに。

これが、禁忌の一線 生徒会。

「あれ。ああ、口パクじゃないよね。ごめんね。僕さ、ヘッドホンのせいさ」

会話が苦手なのだろっか。中山里くんの日本語は時々間違っているし、ぎこちない。

「これこれ、もう少っしでこの歌が終わるからさ、しばらく待っつてくれるかな。ごめんね」

それから、一分待たされた。

中山里くんはヘッドホンを外すと、それを首にかけた。音がまだ漏れている。とめるよ。

「それで、何だい？ 何が言いたかつたんだい？ 言っつてみるんだ」

「ああ……。何で僕のことを知っつてるんだ」

「ははは」

ずいぶん乾いた笑い声だ。

「面白いことを言うね　抱腹絶倒。倒れてしまったね。うん、君は君で、この学年でなかなかの有名人だろ。知らないのか　そうかい？」

「……」

何だろう。こいつと喋っていると、疲労する。生命力を吸い取られているみたいだ。いらいらする。

「ぎこちない　awkwardなるほどね、君は確かに不自然だ。面白いね」

「……」

「ほら、この間、僕らの学年の生徒さんがさ、三人もさ、死んじやったよね。春風蒼波。姫宮楓。朝片翔伍。この三人の中心に君冬月直弥がいたことは偶然じゃないよね。僕ら生徒会は今　君に興味を持っているんだよ。大方、君が姫宮楓と津辻優奈を操作して春風蒼波を殺害したって感じじゃないのかい？」

「　っ！」

なんでこいつは　こつも見透かしてるんだ。

「読心術」

「？」

「僕、得意なんだ」

読心術？

どういうことだ？

分からない。

気持ち悪い。

気が付いたら、吐きそうだった。

「僕はね、興味があるものには興味深々なんだ。でも今日はこつまかな。なんだかさ、最近、危ないんだよな。何だろう。怖いな」

「……？」

今度は何を言ってるんだ？

会話なのか。独り言なのか。

「こつちの話。君はさ、感じたことない？　《ああ、殺されるな》

って。僕はさ、生きてることも死んでも同じだと思っからさ、どっちでもいいけど。殺されるんなら、殺されるんだよ」

そして中山里くんは再びヘッドホンを被りなおして、

「じゃあね」

と。

立ち去って行った。

中山里くんが立ち去って、

僕は中山里くんが先程放り投げた本を、本棚に戻してやった。

『ファウスト』だった。

「……………」

黙り込むしかない。

すべてを、見透かしてるよ……………あいつ。

4

「うー、きゃらめるぽぷこーんはおいしいですー」

僕と流々は、無事に劇場に入って、席を確保することができた。

混み具合は……………うーん、普通。

サスペンスものの映画みたいだ。僕もテレビで宣伝を見たことが何度かある。

僕はもう中山里くんのこととは考えないようにしようと決め、この劇場に入っている。

あんなの 最悪だ。

と、その時。

「直弥くんじゃないか」

見ると、そこにいたのは 糸井故頃だった。

「何だ何だ。故頃サマの誘いを断ったくせにのこにこいやがると思ったら、妹さんと来ていたのか。ひひひ、道理だね。なかなかシス」

「……………いや、妹思いなんだねえ。ひひひ」

「……………」

危うく、掴みかかるところだった。

「うわぁ、この女、せっかくの僕と流々のデートを台無しにしてくれるつもりだな！」

「ああ、そういえば、紹介するよ。ひひひ。この子が故頃サマの妹  
糸井巫羽だよ」

故頃は隣にいる女の子を、そう紹介した。

へえ、この子が、故頃の妹なのか。

なんか思ったより マトモな感じ。

流々と同じ、ポニーテールだった。

…… キヤラ被り！

しかし、その髪は、ポニーテールにするには少し長さが足りていなかった。

少し短い。

ちよつと無理してるかも。

そこがあまりに可愛くて、ぞくぞくした。

気弱そうな表情。

恥ずかしがりの子っぽい。

ほら、授業中先生に指名されたら、一度びくつとしてから、顔を真っ赤にして、答えを小さな声で言っつて、すぐ座つて、俯いちゃうタイプ。

背の高さは、えーつと、まあ、高い方かもしれない。故頃が中学三年生にしては少し背が低く、それと並んで立っているからそう見えるだけかもしれないけれど。

ワンピース姿だ。白い上品そうなワンピース。垢ぬけてるのか垢ぬけてないのかどっちなんだよ！ って感じ。

でも、もしかしたら恥ずかしがりやさんの巫羽にしては、それは結構頑張つてお洒落してきた方なのかもしれない。隣の故頃が夏で暑いのに何故かパーカーを着ているのと並んでいるから、その上品さが際立っている感もあった。

少し伏し目がちな瞳。眼鏡が似合いそうだ。ナース服も似合いそ

う。

というか、制服姿も見てみたかった。どうなんだろうねどうなんだろうね。

僕とは初対面なわけで　おそらく人見知りするほうなのだろう  
巫羽は少し所在なさにしている。

なんかこう……初々しい感じがすごいする。何が初々しいのかは  
分からないけれど。くうくう

って、おい僕、何まだひと目見ただけの女の子についてこんな  
に語ってるんだ!?

しかも、今日は流々とデートだぞ。  
しつかりしろ、僕。

「ん、どうしたんだい直弥くん。自分の頬をつねったりして。しかも  
そんなに強く。故頃サマなんかはさ、君のそのなんだか恐ろしい  
剣幕に少し怯えてるんだけど」

これは邪気を払っているのだ。

「いいや。なんでもないよ。えっと、巫羽ちゃん、初めまして」

「えっ、あっ、う、うん、は、初めましてっ、えっとえっと、よ、  
よろしく……ね」

噛み噛みだった。

なんだこの緊張っぷり。

僕がひと目で見抜いた人物像は当たっていたのかもしれない。  
ただ一つ予想外なこととして　タメ口だ。

二つ上の先輩にタメ口。

感心しないねえ。

僕は気にしないけれど。

それに、これで敬語だったら、髪型といい年齢といい、流々とキ  
ャラ被りまくりだ。

駄目駄目。

流々とキャラが被ってしまったがために、死んでしまった少女が  
いたから。

それは いけない。

流々に代用は効かない。

流々の代替はあり得ない。

「ではそうだね、ひひひ、隣、いいかい？」

言って、僕が答える前に、故頃は僕の左隣に腰を下ろした。その左隣に巫羽は座る。

危ねえ危ねえ。もし巫羽が隣だったら、なんかこう……ドギマギしちまうところだった。

「ん。流々、お前って巫羽ちゃんとクラス一緒？」

「いいえ、違います。今日初めて見ましたよ」

「ふうん。そうか」

巫羽はどうして、僕に挨拶して、妹に挨拶しなかったのだろう……  
ああ、僕は自分からして、返してもらったんだったか。

「ねえねえ直弥くん」

「ん？　ぐふっ」

故頃に呼ばれて振り返ると、突然口にポップコーンを押し込まれた。僕と流々が一緒に仲良く食べているポップコーンとは違い、塩味。

「なんだいきなり。あれこれ、なんか湿ってんぞ？」

「ああ、故頃サマが舐めたからだよ」

「なんで舐めたんだ!？」

「ひひひ。嘘だって。怖いなあ。妹さんの前なのに、そんなんでいいのかい？　ほら、このコーラを一滴たらしただけだよ。怒らないでくれ」

「……ところでお前、なんでパーカー着てんだ？　フードまで被って、暑苦しいぞ」

「ここまでは車で送ってもらったし、劇場内は逆に寒いくらいだからね、おかしくないよ」

「へえ、そういうことな」

でも劇場内で浮いてるぞ、お前。



真夏にパーカーで。

まあほんと　変人だよな。

「あ」

《変人》で思い出した。

「さつきさ　生徒会のメンバーに会ったぜ」

「……え？」

故頃は眉をひそめて、僕を見た。

「キミ　生徒会に、会った？　《見た》じゃなくて？」

「うん、向こうから話しかけてきたんだよ」

「っ！？」

目を見開かせて、驚愕の表情をする故頃。

「それは……どうということだい？」

「書店でさ、向こうが話しかけてきたんだ。確か名前は　中山里

反玖つつたかな」

「……」

「ん、どうした？」

「キミ、生徒会から話しかけられたってだけでも異常なのに、その上、中山里クンだって？」

「ああ、ヘッドホンつけてた」

「……キミ　異常だよ。どうということだよ。中山里クンと会話をしたって、どういうことだよ」

「あ？」

「……殺してえー……」

故頃の声は小さくて、僕には最後、故頃が何と言ったのか分からなかった。

で、丁度上映が始まった。

僕は流々と手を繋いで、映画を楽しんだ。

僕には始まって三十分でオチが読めてしまったのでつまらなく、見る気もなんだか失せてきたので、後半はずっと流々の顔を眺めて楽しんだ。

学校である。

嫌だ嫌だ。

といつても、別におかしな事件が起きることもなければ、誰も死なず、通常通りに、どこまでも正常に、つきぬけて簡単に、まっさらにな、くると、ただ単に《繰り返し》が繰り返されるだけの、予定調和な、どこまでも茶番な、笑い話にもならない、何も残らない、ただの一日であった。

ただ一つ、今までの僕と違うことがあったとすれば、そうだな、昼休みのことだろう。

「ひひひ。ところで昨日のキミの無愛想といったらなかったね。映画が終わるなり、すぐに妹さんとどこかへ行つてしまったのだから。故頃サマ姉妹はポップコーンを最後にまとめて全部食べるのに忙しかったから、キミを追えなかった。あの後探したんだがね、見つからなかった。キミ達、何処へ行つていたんだい？」

「あー、あの後つて言うつと、駅前にちよつといかした喫茶店があつてね、そこに妹と言って、コーヒー飲みながら、映画の内容について話していたよ」

「キミ、妹さんに夢中で映画なんか見てなかったじゃないか」

「ふうん、よく気付いたな。君は映画に熱中してたじゃないか」

「気付いたのは巫羽さ。それにしても、キミつてシスコンだったんだね。意外意外、意外以外に言葉がない」

「別にシスコンじゃないさ。そういう誤解は受けたくないね。どうやら君は、妹のいる男子は全員シスコンだと思いのようだ」

「いや、映画の間中、ずっと手繋いで顔じーつと見つめてたら、立派な妹好きなんじゃないのかな……」

と、苦笑いのような表情を浮かべていた故頃だったが、そこで自分のお盆を持つて、さつと立ちあがった。

今は給食中。

「ひひひ。故頃サマ、昼休みは会議あるから、これにて失礼ね」  
会議ねえ。

ああ、委員会のか。

全委員会が会議室に集まるやつ

あと、生徒会も。

彼も、参加するのだろうか。

彼 中山里反玖。

僕と接触した、生徒会。

図書室でも行こうかな、と思って、昼休み、僕は教室を出た。  
そこで。

「やあ、誰かと思えば何だ君か。君だよ 冬月直弥。うん、君のことを言っているんだ。相変わらずの無表情、恐れ入るね。僕さ、昨日の遭遇を機に、君への興味関心度がぐぐつとアップしたんだよ。ぐぐつとだよ。アップだよ。面白いな、君 冬月直弥、は」

中山里くんが、僕の目の前に、いた。

まるで、この地点に僕がこの時間に現れることを 見透かしていたかのように。

ここは廊下である。まわりには生徒達がいる。生徒達は、全員、無言で、僕と中山里くんを、見ていた。

全員が、驚愕の表情で、僕と中山里くんを見ていたのだ。

「ねえ冬月直弥、」

「……なんだ」

「一波乱ありそうだよね」

中山里くん、さすがに学校じゃヘッドホンはつけていない。でも、やはり表情一つ変えずに、言葉を紡いでいる。

「一波乱？」

「殺人事件 さ」

「殺人事件……」

気付くと僕は、中山里くんの言葉を反復しているだけだった。

嫌でも、力づくに、そうさせられる。

個性の吸収？

無個性の強制？

「殺されるのは、誰だろうね。僕かな　君かな。なんか、殺される気、しないかい？　僕は最近、結構やばめ。でもさ　もしかしたら、死にたい、かな」

気持ち悪い。

気持ち悪い。

気持ち悪い。

こいつ　気持ち悪いよ。

なんか、体が動かない。

視界に、中山里くんしか映らない。

彼が、何かを、言っている。

聞いちや駄目だ。

聞いたら　死ぬ。

「退屈しててね。だから退屈をしのげばいいんだけど。だけど、生きてるから退屈しているのであって、結果、意味、ないよね」

何を言っているのか分からない。

こいつの頭の中ではちゃんと言葉になっているのだろうか。

独り言なのか　僕に話しかけてるのか　そもそも話してないのか。

こいつは、こいつの中で終わっている。

完結してる。

完結しているやつは

「完結しているやつは　死ぬしかない、よな。冬月直弥」

「っ！？」

僕は一步、後ずさる。

何故だか分からないけど、

殺される、

と、

思った。

でも中山里くんはそこで僕から視線を外した。

「じゃあね、冬月直弥」

気付くと、中山里くんはそこにはいなかった。

もう……死にたくなる。

6

次の日 火曜日。

僕は憂鬱な気持ちで、学校に向かった。

「なんでそんなに落ち込んだような顔をしているんですか、朝っぱらから」

「うん、最近、やたら疲れてね」

「何故ですか？ 流々にできることがあれば、言ってください。お兄ちゃんのためなら、流々、何でもしますよ」

「ああ、ありがと。流々」

僕は言って、流々のポニーテールを指先で遊ぶ。

何故だか、流々は少しくすぐったそうにしている。

ああ。

二度会っただけで、こんなに疲れるとは。

中山里反玖。

もう会いたくない。

なんで、僕はあんな奴に目をつけられているんだ。

しかも下手をしたら、他の生徒会メンバーも、僕に接触してくるかもしれない。

あんなのが、他に五人だろ？

……駄目だ。

生徒会がやばいって噂があれだけ上がるのも頷ける。

「糸井故頃さんなんですけど、」

「うん？」

「流々とお兄ちゃんが、映画が終わって出ていく時、糸井故頃さん、ずっと、流々のこと睨んでました」

「睨んでた？ そう見えただけじゃなくてか？ 映画館、暗いし」  
故頃が流々を睨む理由なんて、あるのか？

「はい、睨んでました。お兄ちゃん。多分故頃さん、お兄ちゃんのこと 好きなんだと思います」

「何で」

「だって故頃さん、お兄ちゃんに凄い話しかけてるし。お兄ちゃん、鈍感なんですよ。あんなの、はたから見たらすぐ分かります」

「 殺すなよ」

「え？」

「だからさ、流々、故頃のこと、殺すなよって」

「……………」

「前のは、たまたまバレなかっただけだ。運が良かっただけ。次もうまくいくとは限らない。お前が警察に捕まるようなことがあつちや駄目なんだよ。僕が好きなのは流々だけなんだからさ、他の奴とか、気にすんなよ？」

「…………… はい、大丈夫ですよ」

「約束できるか？」

「約束できます。します。流々は、人を……殺しません」

「よく言った」

まあ、大丈夫だろう。

流々は、僕がなびかない限り、大丈夫。

だって流々は、以前、二年間も、我慢したんだから。

この程度では、平気なはずだ。

僕らはそこで学校に到着して、別れた。一年生と三年生は、昇降口が別だ。

その日も、平凡な一日だった。

何も起こらない。

不確定要素なんてない。

それに、中山里くんにも会わなかった。  
いや、会えなかったのか。  
昼休み、中山里反玖の死体が、発見された。

・  
つづく  
・

## 氷砂糖の苦み

0

好き嫌いせずに食べましょう。

……無理です。好きなものしか、食べられません。

1

密室殺人事件だった。

なかやまこと ばんく

中山里反玖の死体は火曜日の昼休み、会議室で発見された。

それは、異様な光景だったらしい。

体が、ばらばらだったようだ。

話を聞くだけで、僕が以前目撃した姫宮楓ひめみやかえでの死体の状態を遥かに

凌駕することが分かった。

普通の教室の一・五倍の面積を持つ会議室が、壁も床も、血まみれ。

肉と血の区別も、つかなかったらしい。

違過ぎる。

血が過ぎる。

だいたい、中山里反玖だと分かったのも、彼が月曜日の放課後から行方不明になっていたからだ。

それと、会議室の端でぼろぼろになっていた彼の衣服や鞆から。

あとは、警察がDNA鑑定とかで証明するのだらうけれど、とにかく、そのくらいの、凄惨で壮絶で戦慄な光景だった……らしい。

自殺では不可能。

絶対、他殺。

さらに、密室殺人事件だという点。

会議室の窓・扉は、二つ 外から鍵をかける扉と一つの窓以外、



全て、鍵が閉まっていた。

そしてその外から鍵をかける扉だって、月曜日の昼休み、施錠され、鍵は職員室にあったようだ。

職員によると、月曜日、昼休み以降、鍵を持ち出した人間はいないという。

そして火曜日の昼休み、再び会議があり、解錠のために生徒会から鍵当番にされていたという男子生徒が鍵を持ち出し、鍵を開けて中を見たら、会議室の中が地獄絵図になっていたらしい。

まあ当然、第一発見者はその生徒だ。

その生徒の名前は、新坂佐賀。あらさかさか三年五組、学年委員会。

説明が遅れたが、その、一つだけ鍵が開いていたという窓は、外中庭に面している窓で、会議室があるのは三階だ。  
窓から出ることも入ることも、当然、できない。

やはり学校は一週間の休校をとり、警察も当然出入りしたようだが、犯人は不明。

だいたい、密室殺人事件である。

一つ窓が開いていたらしいから厳密には密室ではないけれど、それは三階の窓　密室も同然だ。

以上の情報のほとんどは、火曜日に出回っていたことである。新坂佐賀が死体を発見したあと、たくさんの生徒が集まってきて、情報は一気に出回ったのだ。一部は、ニュース番組で知った情報。

そして今日　月曜日。

久しぶりの学校。

僕は流々もまだ起きていないうち、朝早くに家を出て、そして早くに学校についた。

校舎内に生徒はほとんどいない。

僕が早く来た理由、それは、会議室を訪れるためだった。

中山里くんが殺された事件に、興味があるのだ。

少しだけ。

あの恐れられていた生徒会のメンバーが殺された事件に。

やはり会議室は施錠されており、中に入ることはできない。

「密室……ねえ」

姫宮楓を、思い出す。

と。

「ああ、あなた、冬月直弥くんですね」

「……？」

聞き慣れない女子生徒の声が背後からして振り返ると、そこにいたのは、どこかで見たことがある女子生徒だった。

どこで見たんだったっけ。

「何ですか、その怪訝そうな顔は。大方、私が誰だか分からないと言ったところででしょうか」

女子生徒は、口の中で、ころころと、何かを転がしながら、話している。

食べ物か？

校則違反だぞ、それ。

僕は、学校にエアガンを持ってきて人の口に突っ込む女を知っているけれど。

「自己紹介のシーンですか、成程。私なかのみや まいむ 生徒会女子副会長の、仲野宮舞夢です」

「っ……！」

生徒会、か。

女子副会長 仲野宮舞夢。

「一体全体、登校平均時刻七時四十九分のあなたが、七時二十九分三十一秒現在、この場所に、何の用件があつての推参でしょうか？」

舞夢ちゃんの声も、中山里くん同様、起伏がなく、平坦で、冷たかった。

舞夢ちゃんの髪は長く、腰のあたりに届きそうである。デフォルトで整った顔立ち。可愛いというよりは、綺麗だ。

お人形さんみたい。

背が高い。僕より高いってことは……どうだろう。同じくらいだ

ろうか。

「中山里反玖くん、殺されちゃっただろ？ その事件に少し 興味があつてね」

「そうですか。つまり、犯人を突き止めたいと？ もしくは、トリックを解明したいと？ そのどちらとも、ということも十分に考えられそうですが」

「さあ、どうなんだろうね」

「つまらない駆け引きに興味はありません。我ら生徒会では、駆け引きというのは中山里の領分でしたしね」

「へえ、やつぱりか」

「あなた、中山里と会話をできたようですね。どうでした？ 見透かされている と感じませんでしたか？」

「感じたよ。それに中山里くん、自分が殺されること、殺人事件が起こることも、見透かしてみたいだ」

一体、何故中山里くんがそれを見透かしていたのかは、知らないけれど。

「はははっ」

そこで、舞夢ちゃんは笑った。意外と可愛らしい笑い方だった。

「あなたのようなモノでも騙されるんですね。彼のトリックには」

「トリック？」

「簡単は話です。中山里は『一波乱ありそうだ』『自分は殺されるかもしれない』などと、毎日言っていましたよ。今回は、偶然、その通りになっただけです」

「……………」

「彼は読心術だとか何とか言つて、人の心を見透かしたようなことを言っていますが、半分以上は、外れていますよ。しかし人間は『都合の悪い事情』を取り除き『都合の良い事情』だけで物事を考える、選択的思考を持つ生物ですからね。中山里の発言の中から、自分にあつたところだけが印象に残り、結果、見透かされているように感じるだけです」

「つまり、中山里くんの見透かした発言は全部、自分の予想で適当に喋っていただけだ？」

「はい」

舞夢ちゃんは頷いた。

なんだ……。

そういうことか……。

微妙に間違っていて、微妙に当たっている　その《微妙さ》のせいで、彼と話すと気分が悪くなったのか……。

「飽きました」

「ん？」

突然舞夢ちゃんはそう言い、僕に歩み寄って来た。

「冬月くん、口、開けてください」

「あ、ああ」

言われた通りに口を開ける。

すると突然、舞夢ちゃんは自分の顔を僕の顔にぎりぎりまで接近させてきて、そして

ころん。

自分が先程まで口の中で転がしていてものを、僕の口の中に移した。

「……………」

え、なにこれ。

どうやら、氷砂糖のようだけれど、でも……え？

まじで？

見ると、舞夢ちゃんは僕と再び距離を取り、何事もなかったかのような顔で、今度は、キャンディを舐めていた。

えー……。

「さて、冬月くん」

「ん、何」

僕は、舞夢ちゃんから口移しでもらった氷砂糖を口の中で転がしながら、会話を続ける。

「犯人はどうやって、この密室を形成したと考えていますか？」

「考えられることは二つだね」

「ですか。では、その二つとは何でしょうか？」

「まず一つ。第一発見者が、嘘をついている可能性」

「どういう嘘ですか？」

「鍵がしまっていたという嘘だよ。入り口の扉のね。他に、もう一つの廊下側の、内側から鍵をしめる扉の鍵を第一発見者がしめて密室を作ったという考え方もできるけれど、これには中に入らなきゃいけないわけで、それはつまり上履きが血で濡れてしまうということだから、これはないね」

「しかし、第一発見者、新坂佐賀は、どうして入り口の鍵がしまっていたという嘘を？」

「その理由がない。だって、人殺しが学校内にいるとしたらすぐに逮捕してもらいたくなるのが普通だ。なのに、捜査を攪乱させるわけがない。理由がないよ、本当ね。だから、この可能性は消去」

「ではもう一つの方ですね」

「うん。何らかの方法で、犯人は中庭に面した窓から出入りしたという可能性。この場合、中山里くんもここから入ったことになるけれど、どうなんだろう。事前に撲殺とかしてから運んではばらにされたのか、中山里くん自ら入ったのか」

「ややこしいですね。だいたい、三階の高さですよ？ どうやって出入りを可能にするんですか？ 会議室にはベランダがないのですよ？」

「それが分からないから、手掛かりを探すためにここに来たのさ」  
「成程」

同じ生徒会でも《駆け引き役》だったらしい中山里くんと違い、舞夢ちゃんの話しやすかった。

「ところで、舞夢ちゃんには、分かるの？ この密室のトリックが」  
「いいえ」

「じゃあ、ここで一つ質問しておこうかな」

「？」

「犯人は、生徒会なの？」

これは、大事な質問だ。

「いいえ」

しかし、舞夢ちゃんは、否定した。

「この事件に、生徒会は関係していません。殺されたのが中山里つただけです。なので私がこうして調べているのですけれどね。興味があるもの以外無愛想な奴でしたが、一応中山里も生徒会のメンバーだったわけですし」

「中山里くんは《駆け引き役》なんだよね。じゃあ君は何なの？」

「いろいろありますが、そうですね、このような事件があつた場合私は《情報力》です」

「情報力？」

「私の父、仲野宮和彦<sup>かずひこ</sup>を、あなたは知っていますね？」

「いや、知らねえよ」

「そうですか。でも会つたことがあるはずですよ」

「ないなあ」

「いえ、あります。以前、我が校の生徒春風蒼波が殺された事件で、あなたのところに」

「……………」

「私の父、捜査第一課の刑事です」

「……………ああ」

「あなたの元へ行つた刑事のうち、おそらく前方で質問をしていた方です。後方でメモに徹していたのはおそらく父の相棒の音原音彦<sup>おとはらおとひこ</sup>でしょう」

なんだよ。

知らないうちに、僕は生徒会メンバーの父親と接触していたのかよ……………」

だから中山里くんは、楓が殺された事件についても、あのような推理が可能だったのか。

情報力、ねえ。

「さて、ここで得られる情報は少なそうです。私はこれにて失礼しますね。お話できて嬉しかったですよ、冬月直弥くん」

「うん、僕もだよ。舞夢ちゃん」

舞夢ちゃんは僕に背を向け、歩き出す。

しかし途中で、

「ああ」

と。

僕の方を向いて、言った。

「生徒会長が、あなたとお話したいと、おっしゃっていましたね」

2

朝、ホームルーム前。

「やあ直弥くん。殺人事件だなんて残念だったよね。でも故頃サマなんかはさ、そのおかげで休校になったわけだから、実は嬉しかったり。ひひひ」

「その分夏休みが削れるかもな」

「ッ！ そうじゃないか、それは一大事だ」

故頃は両手を自分の頬に当てて、絶望を表現する。表情豊かな奴だ。

「なあ故頃、」

「ん、何だい直弥くん。ひひひ、前々から思ってたんだけどさ、直弥クンに名前呼び捨てにされると、ぞくぞくするよね」

「するな。例の中山里反玖くんの密室殺人事件の話なんだけどさ」

「あれ、珍しいね。直弥クンが男子生徒の名前を覚えているだなんて」

その言い方だと、すげー女好きな奴みたいだ。  
ん、そう言ってるのか？

「ああ、でも直弥クンはこの前、映画館で会った時、反玖クンにも会っていたんだっけ？」

「印象強い奴だったしね。で、その密室殺人事件なんだけど、犯人はどうやって密室を形成したんだと思う？ 故頃ってこういうの得意だろ？ よく推理小説読んでるし」

「ひひひ……、あれは推理小説のカバーをかけているだけで、本当はB.L小説を読んでるんだけどね。でもそうだね、嫌いじゃないよ。ただ直弥クン、密室殺人事件が起こった時にまず考えなければならぬことはないからね。それが本当に密室なのかどうか、なんだよ」

「まあ、厳密には違うな。外側の窓が一つ開いていたんだから。でも三階だぜ？ そこから出入りすることはできないだろ」

楓の時と違い、近くに建物はないから、壁と壁の間を利用して、とはいかないし。

会議室の窓から近い建物っていうと……体育館か。といっても、体育館の二階から跳び移る、なんてことはとてもできないけれど。」「それに直弥クンの言い方では、まるで密室を形成したのが犯人だと決めつけてるみたいだ。そうとは限らないのに、さ」

「ん、そりゃ新説だな。つまり？」

「今頃、犯人は驚いているかもしれない、ってことさ。そんなつもり全然ないのに、密室殺人事件だなんて言われてね」

「でも犯人じゃないとしたら、誰が何の目的で密室を作るんだよ」

「そうだね、それが問題なんだよ。確かに直弥クンの言うとおり、犯人が密室を形成したという可能性が一番高い。でもキミの言い方にのっとって言わせてもらうならば、犯人こそ、何故密室を形成したのかは謎だよな」

「なあ故頃。君はトリックが分かっているのか？ それとも分かっているから、そういう回りくどい言い方をしているのか？」

これじゃあまるで、中山里くんと話しているみたいだ。  
ん？

そういえば、故頃の方こそ、さっき「反玖クン」などと呼んでいた



たけれど……何か接点があるのか？

故頃が名前プラスくん付けで呼ぶのは、ある程度親しい男子に限られるのだけれど……。

「ひひひつ。直弥くんの方が故頃サマなんかより、何倍も頭いいんだからさ、自分で考えた方がいいんじゃないのかい？ 《人間の長所とは思考ができることである》　ってね。直弥くん、知らないのかい？」

「何が」

「人間に考えて分からないことなんて、ないんだよ？」

その時丁度、教室に担任の教師が入ってきて、朝のホームルームが始まった。

3

暑い。

夏だし。

なので僕は少しでも涼しいように、人口密度の低い　　というか人のいない、南校舎四階に来ていた。

西側階段の上。

ひんやりとしている。

喧騒から逃れリラックスすることはいいことだ。

「はは……」

なんか、笑えてきた。

ここで、春風蒼波は、殺されたんだよな。首を絞められて。

なんか今回は、踊らされてる、感じた。

「ん、冬月じゃん」

と。

見ると、そこにいたのは、津辻優奈だった。

……おお。

懐かしい。

「はっ、相変わらずいい顔してんのな、お前。いい無表情だ。なんか最近、またワケ分からねえことやってんだって？」

言って、優奈は僕の隣に座る。ほとんど体が接触するくらいの隣だ。えーっと？

「生徒会に関わってんだろ？」

「なんで知ってんの？」

「……お前ってほんと噂話に疎いよな。みんな知ってるよ。中山里反玖と廊下で会話してたってさ」

「そんなにすげーことなの？　なんかみんな言っただよな。あの中山里反玖と会話したのかとかなんとか」

「いや、すげーだろ。だってあいつさ　喋らないぜ？」

「ん？」

「中山里、私のクラスだかね。でもさ、あいつが喋ってるところ、私は見たことねえな……」

「へえ。生徒会では喋ってたみたいだけど」

「ああ、そりゃあな。でもなんかあいつ、目が死んでるじゃん？」

ああ、目が死んでるならお前も負けてないけど」

「……………」

「ま、無愛想なやつだったよな、ほんと。誰が話しかけてもぶいっとしちやってさ」

「ん？」

「どうした？」

「無愛想、って言ったか？」

「ああ、言っただけど」

引っ掛かり、だ。

何だろう。

無愛想？

興味があるもの以外無愛想な奴でしたが、一応中山里も生徒会のメンバーだったわけですし。

ひひひ、でも故頃サマなんかはさ、キミみたいな無愛想

クンがだあい好きだからね。

……ほんと、何だろう。

分らない。

気持ち悪いな。

「ああ、優奈」

「ん？」

「優奈はさ、中山里くんが殺されていた会議室の密室は、どのようにして成立したか分かるかい？」

「ああ、考えならある」

「ん……ほんとう？」

繋ぎのために訊いただけなのだが、まさかの展開。ああ、そういえば、優奈って推理とか意外と結構できるほうなんだっけ？」

「聞かせてよ」

「会議室の外側の窓が一つ開いてたつてのは知ってるか？」

「うん」

「で、あそこの近く、体育館あんじゃん」

「あるけど、それがどうした」

「トランポリンだよ」

「……………」

「分からねえか？ つまり、犯人は体育館からトランポリンを引張ってきて、それ使って三階の会議室のその開いてたつていう窓まで、跳び上がったんだ」

「……………」

「どうだ？」

「……………」

馬鹿かこいつ。

トランポリン？

何言ってるの？

だいたい、昼休み生徒会と学年委員会が集う会議があり、最後に戸締りがしっかりされたというのに、外の窓が開いていたところか

ら原因が不明だというのに、こいつの推理ではそこが説明できない。それに、トランポリンなんて運んでたら見つかるだろ。なんでバシけないんだよ。

あと個人的に言わせてもらえれば、犯人はともかく、中山里くんがトランポリンで跳躍だなんてあほらしいことやってる姿は想像できん。

「……冬月、どうだって私は訊いてるんだぞ」

「どうもこうもない。馬鹿じゃねえのかおま」

ズガンッ！

「いてえっ！」

撃たれた！

久々に！

エアガンで！

この至近距離で！

頬に！

「わっ、私だつて言いながら、ああこれは違うわって分かってましたよ、悪かったね、冬月！」

言つて、優奈は階段を駆け下りていった。  
なんだつたんだ……。

4

その日の放課後。

僕が向かったのは、生徒会室だった。

これは別に、舞夢ちゃんが「生徒会長があなたとお話したいとおっしゃってましたよ」と言っていたのとは関係なく、なんとなく、興味から、訪れたにすぎない。盗聴してみようかな、とか考えてみたりね。

それに、生徒会メンバーを、見たかったから。

うーん、そういえば、中山里くんが死んだことによってあいた穴

には誰が入るのだろう。書記長不在じゃやりにくいと思うのだが。  
生徒会室があるのは北校舎三階。渡り廊下を使い、そちらの校舎へ。

生徒達は皆各自、帰ったり、部活に行ったりで校舎からは出払っている。廊下は静かだった。

誰もいない。

西側に図書室、生徒会があるのは校舎の東側。

歩いて、

歩いて歩いて歩いて歩いて歩いて、

歩い

「よオ、冬月直弥」

て……？

少し遅れて、僕はその声に反応した。

聞き流してしまいそうなほどに自然にしたその声は背後からで、

そちらを向くと、そこに立っていたのは、

「ハッハー、僕、なかなか中奈河可成かなり

ぜ」  
生徒会では男子副会長してる

短髪。背が高い。ガタイがいい。中山里くんとは対極な、感じ。

「……………」

僕が呆気にとられていると、中奈河くんは「おいおい」と笑った。

「無視はお呼びじゃないぜ、冬月。覚えてるか、僕とお前、一年の

時、クラス一緒だったろ」

「ああ、ごめん。覚えてない」

「だろうよ」

ハッハー、と笑う中奈河くん。

「で、なんでこんなトコにお前がいるんだ　もしかして、生徒会

室に行こうとしてた？」

「まあね」

隠しても仕方がない。だいいち、この先にある場所といえ、生徒会室くらいなのだ。

駆け引き役は中山里くんらしい。じゃあコイツは？

中奈河くんは 何の役割なんだ？

男子副会長。

「ハッハー、そいつあ、お呼びじゃねえな。感心しねえよ。全くもって全然だ」

肩をすくめまくる中奈河くん。一台詞のうちに三回も肩をすくめるもんだから、肩の筋力を鍛えているのかと思った。

「分からんかな 帰れつつってんだけど」

「……………」

思わず、一步、引き下がって、しまった。

凄み。

「中山里や仲野宮と何話したのかは知らないけどよ お前、生徒会に関わんな」

「……………」

「僕がはつきり忠告しといてやる。興味本位とか、やめとけって。マジでこちら感心しねえ」

お呼びじゃねえよ、と最後に言っ、中奈河くんは僕の横を通り、そして、生徒会室の方へと歩いていってしまう。

「 な、中奈河くん」

「あん？」

中奈河くんは振り向いてくれた。

「中山里くんが死んで どう思った？」

訪ねると、中奈河くんは、即答した。

「せいせいした」

そして僕は、その場から去り、下駄箱へ向かった。  
帰るのだ。

何か、全てのやる気を削がれた感じ。

それにしても、生徒会には、あんなのも、いるのか。

中奈河可成 男子副会長。

それと、仲野宮舞夢　女子副会長。

もう死んじゃったけど、中山里反玖　書記長。

異常　／　以上、今現在僕が遭遇した、生徒会メンバー。

全部、三年生だな。

二年生も、いるはずなんだけれど。

まだ会っていない。

どんな、子達なのだろう。

「はあ、何なんだろうね」

何がしたいんだろうね。

関係ないじゃん。

中山里くんが死にました。密室殺人事件でした。

あー、そうですか。

馬鹿馬鹿しいや。

僕は普通に、生きるだけだ。

生徒会だなんて面倒くさいものには、中奈河くんと言われるまでもなく、関わらないさ。

魔がさしたんだろうね。

誰にでもあることだよ。

怖いものみたさっつーの？

下駄箱は南校舎なので、僕はまた渡り廊下を渡り、南校舎三階に到着。

そこで、男子トイレから、糸井故頃が出てくるのが見えた。こちらに背を向け、歩き出す。

って、ん？　男子トイレ？

何やってんの、あいつ。

いや、あの変態のことだから、別に不思議じゃないのかもしれないけど。

「あー、なんか気分沈んでるし、あいつと喋って元気だそうかな」  
なんて考えて、僕はその背中に向かって駆けた。驚かすために、足音を忍ばせて。

魔がさした　とは、これのことだったのだろう、まさしく。  
追いついて、ばん、と肩をたたくと、「きやあつ!？」なんて、  
故頃は可愛い悲鳴を洩らし、そして　口からなにかを、  
はきだした。

「……………」

ぐちゃぐちゃになった、人間の目玉と、手の親指だった。

・つづく・



## 真相の一部

0

おかわり自由だよ？  
なんで誰もおかわりしてくれないの？

1

「そう、中山里クンを殺したのは 故頃サマだよ」  
そう、故頃は、言った。  
告白。

場所を移動し、今僕と故頃が並んで座っているのは、すっかりお  
馴染、南校舎四階西側階段の上である。

僕が声をかけた時、故頃は丁度男子生徒を食い終えた後だった  
らしい。

「故頃サマ いや、私はね、好きな人を見ると 食べちゃいた  
くなるの」

そうも、故頃は言った。

食いたくなる、と。  
人間を。

「こう、愛しい人を見ると、独占したくなるの。その気持ちは  
分かるかい？」

こくり、と頷く僕。

「独占したくなる

体の中ごと」

「体の中ごと……」

「うん。好きな人のことを知りたいと考えるのは普通のことだろう  
？ 僕はそれがいきすぎてるってことなんだよ。全部、知りたくな  
る。全部、見たくなる。独占したくなる」

好きだから、と故頃は言う。

「私はね、中山里クンが好きだったんだ」  
そうか。

僕が少し気になっていた、故頃が自ら学年委員に立候補した理由  
少しでも、中山里くんに近づきたかったから。

近づいて 食いたかった。

愛しさゆえの、食事。

故頃は無愛想な男子が好き。そして中山里くんは、学年一無愛想。  
僕にはかなり饒舌だったけれど、しかし普段の彼は何も喋らず、愛  
想が悪かったという。

普段何も喋らないから、日本語も少し下手。

そのなんともいえぬモヤモヤ感に、僕は気持ち悪くなったのだけ  
ど。

だからこそその「駆け引き担当」 書記長、中山里反玖。

「それで、ついに我慢 できなくてね」

「……………」

「で、調子に乗って、中山里クンが死ぬ前では二番目に好きだった  
子を、丁度今、殺した」  
ふるくたりくたり

その生徒の名前は古下降里というらしい。僕の知らない生徒だが、  
三年生だ。

「まあ、そんな感じなのだけど……………どう、思った？」

故頃はそう訊ねてきた。

「……………あー、別にどうも思わなかったかな」

「そうだろうね。ひひひ」

故頃は笑って、そして立ちあがった。

「ひいちゃった？ ドンびき？」

「別に」

「そ。それはよかったよ。故頃サマのこと、警察とかに言っちゃう  
？」

「言わないよ。ただ、バレないようにしろよ、ってだけ」

「そ。それもよかったな。じゃあ直弥くん、またね。明日からも故頃サマと仲良くしてくれなきゃ嫌だよ」

やけにあっさりとした口調でそう言っ、故頃は一段飛ばしで階段を下りていった。そのまま踊り場で旋回し、姿が見えなくなる。

「……なんだかなあ」

拍子抜け。

ほんと、あっさりしたものだ。

こんなもんか。

脱力した。

呆気ねえー。

「帰ろう。流々も帰ってるかな」

僕は考えるのを、やめた。

## 2

古下降里の死体が発見され、また学校は一週間の休校という処置をとった。しかし、学校で起こった事件。そう簡単に犯人を特定することはできないだろう。指紋を採取する、といってもどの生徒が被害者の体を触っていてもおかしくない。まあ、指紋は重なりを調べて最新のものも割り出せるらしいけれど、でもそれには容疑者がいる。警察では、容疑者を見つける糸口すらもつかめないだろう。

なんてことを前置きして、さてまた考えてみよう。

中山里くんの殺された事件について。

なんか中途半端に首を突っ込んでしまったせいで、気持ち悪いのだ。故頃にはどうやって密室を作ったのか、結局、訊くことができなかったし。

犯人は糸井故頃。これは分かった。

さて、トリックは？

報道・噂によれば、古下降里の死体は男子トイレでばらばらにされていた。食い散らかされていた。だけらしく、これといって

おかしな点はなかったという。

何故、中山里くんの時だけ密室にしたのか。

そこまで考えると、犯人である故頃本人が言っていた台詞せりふが思い出される。

『ただ直弥クン、密室殺人事件が起こった時にまず考えなければならぬことはね　それが本当に密室なのかどうか、なんだよ』

『今頃、犯人は驚いているかもしれない、ってことさ。そんなつもり全然ないのに、密室殺人事件だなんて言われてね』

まるで、故頃は密室なんて作る気は全然なかった、とでも言うような言葉だ。

では、あれは偶発的にできたものなのか？

意識してなかったのに、たまたま、密室だった、と？

そこまで考えたところで、突然声をかけられた。

「お兄ちゃん、さつきから呼んでいますのに、何故無視するんですか？　流々、結構しまあまあかなり深く落ち込んでたりしてたりしてなかったりでもしてたりしてるんですけど」

「ああ、ごめん流々」

わが愛すべき妹の声であった。

ここは僕の部屋なのだが、どうやら勝手に入ってきてしかも何度も声をかけてきている妹に、今まで気付かなかったらしい。

「お兄ちゃん、明日から学校ですね」

「ああ、そうだな」

「何か、考え事ですか？」

「うん、生徒会の中山里くんって子が殺されたじゃん。あれ密室殺人事件でめずらしいし、面白いからたまに考えてるんだ」

「トリックをですか？」

「うん」

「へえ、そうなんですか」

「流々は、分かる？」

「いいえ。分かりません。トランプリンでも使ったんじゃないです

か。こう、三階までぴょんって」

「それはない」

考え方が幼稚だよ。

流々らしくないな。

「冗談ですよ。そんなこと大真面目に言ったら、馬鹿じゃないですか」

「……そうだね」

「はい」

「で、流々、何か用かな？」

「あ、えーっと……いや、やっぱりいいです」

「ん？」

「なんでもないですよ」

流々は部屋から出ていつてしまった。

……変なの。

3

さて、久しぶりの登校であつた。

朝、教室に着いた僕は、ある女子生徒から呼び出しを受け、さらわれて、ひと気のない場所に連れてこられた。

「ごきげんよう。お久しぶりです。私を覚えていますか？」

ころころ、と。

口の中で飴玉を転がしながら、彼女はそう訊ねてきた。

「舞夢ちゃん、だよね」

「その通りです」

生徒会女子副会長、仲野宮舞夢。

「なんでいつも口の中に何か入れてるんだい？」

「だって、口の中に何かないと、寂しいじゃないですか」

「……」

すごい萌え台詞を吐かれた。

百点！

……何がだよ。

「で、何の用？」

「少しお話ししようと思いましたがね。それだけですよ。ああ、そういえば中奈河が失礼な態度をとったようですね」

「ああ、少しね。彼はどんな役回りなの？ 中山里くんが駆け引き担当で君が情報力なら」

「彼は簡単ですよ。用心棒、って感じです。武道派でしてね」

「ああ、そういうこと」

「そりゃあ分かりやすくして何よりだ。恐れられている生徒会。そういう人間も、当然いるのだろう。」

生徒会男子副会長    実践担当、中奈河可成かなり

「そういえば、密室の謎は解けましたか？」

「いいや。舞夢ちゃんも、何か、分かったの？」

「はい。犯人はおそらくトランポリンを使ってですね……あれ？ どうしたのですか？ げっそりして。何か気に障ることも？」

「……いいや」

おいおい。こいつ馬鹿じゃねえかよ。

「まあとにかくですね、犯人はトランポリンを……」

「いや、いい、いい、いい、いい、いい、いい、いい、いい、いいよ！」

「さ、さすがにそこまで褒められますと……まだ冒頭なのに……」

「いやプラスの意味じゃないない！ 《良い》なんて言っていないよ！ 君の推理は絶対に間違ってるから、聞かなくていいってことだよ！」

「そうですか。残念。ああ、二人目の被害者も出ましたよね。古下降里」

「ああ、まあ今回は取りたてて不審な点・不可思議な点はないみたいだけだね」

「はい、残念ですよ」

残念ですよ。人が殺されてそんな台詞を普通に吐くことができるところにも、生徒会の異常さを感じ取ることができようと言つものだ。

「まあ二人目の被害者といひましても、犯人が同じだとは限らないので、二人目の被害者とは言えませんが。共通点といえば、三年の男子生徒だということ、学校内での殺人だということ、死体がある程度解体されていること　くらいですからね」

それと、無愛想だということな。

口に出しては言わないけれど。

生徒会と慣れ合うつもりなんて、中奈河くんに言われるまでもなく、毛頭ない。

「どう思います？　また近いうちに死者が出ると考えますか？」

「さあね、分からないな」

「目的によりますよね。無論、犯人の。中山里と古下降里には特にこれといった共通点は存在していませんが」

「目的……」

愛しさゆえの、食事。

「まあ良いです。とにかく我ら生徒会は中山里を殺した犯人を突き止めることを最大の目的としていますから、もちろん、現時点ではの話で」

「トリックが分からないなら、犯人の目星ももちろんついていないんだよね？」

「いいえ、今現在目をつけているのは、新坂佐賀です」

「ああ、第一発見者の」

「ええ」

なんだ、意外と生徒会って大したことないんだな。情報力だとか自称している舞夢ちゃんさえ、故頃に目をつけてさえいない。

いやでも、僕だって故頃が犯人だと分かったのは完璧な偶然であつて、そうでなければ今も犯人も目星さえつけれていなかったかもしれないが。

「なんで新坂くんが怪しいと？」

「そう考えれば密室の説明が成り立つからです。つまり、新坂佐賀が嘘をついているんですよ。鍵なんて、かかってなかったんです。あなたも最初言っていたでしょう。密室を完成させるための方法として、新坂佐賀が嘘をついている可能性を。しかし理由がない。では理由があればいいのでしょうか？ 新坂佐賀が犯人ならば、嘘をついていて不思議ではありません」

「……」

確かに、そういう推理は可能だ。

しかし故頃が犯人なのは間違いない。

では、その推理は全て間違っているのか。

こう考えることができるのではないだろうか 故頃と新坂佐賀が共犯だった。

でも今度はその理由が分からなくなる。

難しい。

「さて、そろそろ時間ですね。私はこれにて失礼しますよ。冬月直弥」

「ああ、そうだね」

僕に背中を見せて舞夢ちゃんは歩き出す と思いきや、こちらをまた振り向いた。

「まだ何か？」

「冬月直弥、あなたは犯人が分かっているようですね」

「……」

「あなたの口ぶりは、犯人もしくは犯人を知る者の口ぶりです。その犯人を知ったのは、昨日までそんな口ぶりではなかったことから推測して、おそらく昨日」

「……」

「しかしあなたは犯人が誰かを、隠している。ということは、犯人はあなたと親しい人物になるでしょう」

「……」



「あなたの妹がそうなるが一番怪しいですが、しかし、あなたの妹  
冬月流々が犯人なら、あなたがそれを知るのが昨日なのはおか  
しい。だとすると犯人は」

「糸井故頃ですね？」

僕は、それに、答えない。

4

昨日あんなことがあったもんだから、故頃とは少し気まづくなり  
そうだな、と思っていたのだが、しかし故頃と会って話してみると  
その昨日のことというのはまったくなかったかのような感じで、あ  
くまで自然にあくまで普通に、会話は進んで、僕は少し拍子抜けし  
て安心した。

「さて直弥くん、故頃サマから少しお願いがあるんだよ」

「へえ、それはなんだ」

「巫羽<sup>ふう</sup>に会ってやってほしいんだね」

「……なんで？」

突然の依頼であった。

と同時に、意味不明。

何故僕が故頃の妹に会わなければならないのだろう。

「いいからいいから。ちょっと会って話してやってくれよ」

「あー、まあいいけどさ。いつ？」

「今日の昼休み。一年五組に行つてやってくれ」

「急だな」

「ひひひ。そうかな？」

とまあ、断る理由もなかったので僕はそれを承諾し、そして昼休  
み、一年五組の教室へと向かったのだった。

それに、巫羽に確認したいこともあったし。

ところで一年五組の教室を訪ねた僕に対し巫羽の方は、

「ひえっ！？ なにぬっとななっ、なななな直弥がなな何のよ  
よ用なのでしょうっしょうかつ、かつ、わ、そ、それそれもわ私に  
っ」

動揺しまくりだった。

「……」

え、巫羽は僕が会いに来ること知らなかったの？

「えーっと、故頃に、巫羽に会ってくれって言われてさ」

「えっ！？ お姉ちゃんの馬鹿ってそうじゃなくて、そっ、さしす  
せそそそそうなんですかつ、はっ、はい、いいよ！ う、嬉しいよ  
！」

「……」

「あ、あれ、どうして、黙っちゃう、の？」

「いやなんでもない。場所移動しようか。いい場所知ってるんだ」

「へ、へえ、そうなんだ……、う、うん、いいよ」

だいぶ落ち着いたみたいだった。先程までの取り乱し様を思い出  
して恥じているのか、顔が真っ赤だった。

というか、やっぱりタメ口なのかよ。

ということ、南校舎四階西側階段の上に移動。

最近ここばかり来てるな……。

「それで、何かな？」

「ああ」

さて、何から話したものかな。

それほど時間があるわけでもないし、ここは単刀直入に聞くのが  
吉か。

「今殺人事件起きんじゃない？」

「うん、お姉ちゃんがやってる」

「……」

あ、隠したりしないんだ。

「お姉ちゃんは直弥にこのこともう話したんでしょ？ だから直弥

はこのことは知ってるんだよね」

「うん、まあそういうこと」

やけにあっさりしていた。

まあこれで気になることが一つ確認できた。

巫羽も故頃がこの事件を起こしているということを、知っている。  
オッケー。

「巫羽は、それに協力してたり、するの？」

「してないよ、何もね」

巫羽は先程から何やらそわそわしている感があるが（恥ずかしがりだから、僕と会話することも恥ずかしいのだろうと推測）、返答は速いし口ごもりたりもしないので、そこは助かる。

「故頃は、全部一人でやってるの？」

「うん、そうだよ」

まあ僕が故頃が二人目を殺害したところを目撃した時、トイレから出てきたのは故頃だけだったところからも、これは分かるけれど。

「あの、次は私から質問なんだけど」

「ん？」

「直弥は、お姉ちゃんのこと、どう思ってるの？」

「……………」

故頃のことを、どう思っているか。

故頃。

糸井故頃。

前々から少し交流があつて、特に最近是最も僕と親しくしている  
だろう女子。

流々よりも、親しくしているかもしれない。

気付かないうちに。

その故頃を、どう思っているか

「別にどうも思っていないよ」

「そう」

「うん、髪型は好きだけどね。あの片目隠したヘアスタイル。あれ

がなかったら、話したりもしないだろうね」

「そう……」

そこで巫羽は少し、悲しそうな顔をした。

姉のことを侮辱されたと思ったのかもしれない。

別にそんなつもりはなかったんだけどな……。

「もっとお話ししたいけど、実は次体育だから、着替えなきゃ  
そう言つて、巫羽は立ちあがった。

「うん、じゃあね」

「うん、またね」

5

最近気持ち悪い。

もやもやする。

少し前まではこういうの平気だったんだけど。

「流々の影響かなあ……」

中山里くんとあの書店で出会ってから、ずっとこうだ。

中山里くんが死んでも、続いて、まるで、呪いみたい。

気持ち悪い。

帰宅して、シャワーを浴びた。

風呂からでて、リビングについたと同時に、電話が鳴った。

見たこともない番号だ。

母は買い物に出ていて、流々は帰ってきていない（久々に気まぐれで写真部にでも行ってるのかも）。

僕が出るしかない。

「はい、冬月です」

「ご機嫌麗しゅう、冬月直弥」  
きげんたつるわ

「……ご機嫌麗しゅう」

聞こえてきたその声は、仲野宮舞夢　舞夢ちゃんのものだった。  
まあ、電話番号を知ってるくらいじゃ驚かないけどさ。

それよりも、気になるのはころころ音が鳴ってることだ。電話するときでも口の中に何かを入れているらしい。

「突然電話してすみませんね。突然ついでに、もうひとつ突然情報を伝達してよろしいでしょうか」

「いいよ」

「新坂佐賀が殺されました」

「……………えーっと、誰に？」

「目下捜査中です」

新坂佐賀って言うと、最初の事件　中山里くんが殺された事件での、第一発見者。

生徒会に鍵当番を任されていた三年学年委員。

「学校で殺されました。古下降里同様、男子トイレで殺されています。体がばらばらにされていることから、三人目の被害者とみてよさそうです」

故頃……………だろうか。

僕に自分が犯人だと知られてもなお、続けるつもりなのだろうか。もう　我慢できないのだろうか。

「ただ、この件で犯人が糸井故頃でないことが分かりました」  
「え？」

思わず、そんな声を、出してしまった。

故頃が犯人じゃない？

「はい。だって、糸井故頃が同時刻に、別の場所で、目撃されていますから」

6

新坂佐賀の死体を発見したのは、生徒会の一年生　中式藻外門  
なかにも　そとも  
だったらしい。

発見場所は、生徒会室がある北校舎三階の男子トイレ。  
発見時刻は、午後四時四十分。

新坂佐賀は帰りの会終了時までちゃんと教室にいたらしく、その時刻は午後三時五十分。

僕と故頃のクラスで帰りの会が終わったのは、午後四時。

それと、午後四時二十五分に同じく生徒会の中奈河可成が同じ男子トイレに行った時、新坂佐賀の死体はなかったようだ。

死体の状況から、男子トイレで殺されたことは間違いない。

つまり犯行時刻は午後四時二十五分から午後四時四十分までの、十五分間。

その間に、現在舞夢ちゃんが集めた証言だけでも、別の場所で故頃は三回、目撃されている。

午後四時二十五分に、野球部員数名が、グラウンドわきを歩く故頃を目撃。

午後四時三十分頃に、テニス部員数名が、テニスコートわきを歩く故頃を目撃。

午後四時三十五分頃には、職員が南校舎一階を歩く故頃を目撃。これらは、四時半のチャイムがその後聞こえたかその前に聞こえたかでの時間判断らしい。

まあとにかく、四時半ごろに、北校舎三階男子トイレ以外の場所で、三階、故頃は目撃されている。

というか、何だこの行動。

散歩でもしてたのか？

とにかく、そんな感じ。

これらの情報から舞夢ちゃんが判断したこと。それは 糸井故頃は犯人ではない。

ああ、そういえば、舞夢ちゃんは、事件について調べたことをやめた、とも言っていた。

さすがに面食らった。

理由は、生徒会長に止められたから、だそうだ。

どうやら、事件について調べていたのは舞夢ちゃんの独断だったらしい。

「生徒会というのは、生徒のためにあるもので、学校のために活動するもので、中山里の死の真相を突き止めるだなんていうことは、警察がやってくれるわけで、生徒会にそうしてくれという要望がきているわけでもありません。つまり、中山里の死の真相を突き止めるだなんてことは、やるべきことではないですよ。生徒から依頼を受けて、それを実行するのが僕らのやり方でしょう、仲野宮さん」

よって、生徒会は事件から手を引く　と。

「にしても、ワケ分かんねえよな。故頃に直接訊いちゃおうかな。新坂くんを殺したのかどうか」

と頭を悩ませていると、僕の部屋に、帰って来たばかりらしい流々が入って来た。

「ただいまです」

「ああ、おかえり」

流々は何だかあたりをキョロキョロと見回していて、落ち付きがなかった。この頃ずつとそうなのだけれど、一体、何なのだろう。

この際、問い詰めてみる必要があるかもしれない。いや、もしかしてそれについて話すために今ここに来たのだろうか。昨日は結局何も言えずに帰って行ってしまったが。

「お兄ちゃん、学校でさっき、また人が死んだの、知ってますか？」

「いいや、知らない」

僕が生徒会と関わっているなどと流々に思われたくはないので、ここは嘘をついておくのが良いだろうと判断しての、嘘だ。

なるべくなら僕は、流々に嘘はつきたくないと考えている。

「そうですか。殺されたのは、新坂佐賀という三年生ですよ」

「へえ」

あまり過剰に驚いた風な演技をすれば、感づかれてしまうかもしれない。だから僕は、あくまで普通に平凡に、答える。

「あの、お兄ちゃん、」

「ん、何」

「お兄ちゃん……流、流々は、お兄ちゃんの言つとおり、もう、誰かを殺したりはしません」

「うん」

なんだろう、改まって。

「……………そ、それだけです　　っ……………」

そこで、さつと振り向いて、自分の部屋に流々は逃げ込んでいつてしまった。

「……………」

デジャヴ。

でも今は、そうだな、流々のことよりも　　故頃のことだ。

7

学校から連絡があり、また一週間休みが続いた。休みまみれ。それにより、あと三日学校に行けば夏休みだ。

休みの間、流々の様子はずっとおかしかった。僕と目を合わせようとしない。ずっと部屋に引きこもっていて、僕がどこかにいこうと誘ってもそれを断る。何やら、何か悩み事があるようで、僕としては相談に乗ってやりたいのだが、しかし、流々はそれをも拒絶する体制であつた。

そして、また登校。

久しぶりに、学校で故頃と顔を合わせた。

「やあ直弥くん。元気してたかな？　　故頃サマは元気元気元気元気で、新坂くんの話題を出すことはできなかった。」

「ねえ直弥くん、」

「ん、何」

「故頃サマは、死んだ方がいいのかな？」

「……………なんだよいきなり」



びつくりするわ。

「そのまんまの意味だよ。死んだ方がいいのかな？ 最近わりと悩んでいてね」

「さあな。分かんね」

「否定しても肯定してもくれないんだね。ひひひ。直弥くんは酷いなあ」

ほんと、酷いよ。とそう言うってから故頃は、ひひひ、といつも通り、笑う。

こんな短い、なんてことのない会話が、僕と糸井故頃が交わした、最後の会話だった。

ずっと続いていたのものが理不尽にも突然終わりを迎えてしまうことがある。

呆気なく、ご都合主義に、突然終了。さながら強制終了。

そうなると、面食らってしまう。

思考が現実についていけなくて。

今回がまさに、それだ。

というか、今回の事件はずっとそうだった。

どこまでも呆気なく。

どこまでも突然で。

どこまでもご都合主義で。

どこまでも仕組まれたみたいで。

からくりが、裏に、ありそうで。

そんな中、体育館裏で、糸井故頃の死体は発見された。

・つづく・

## デザート代わりのラストスパート

0

「ごちそうさまでした。  
ます不味かったよ。」

1

午後の授業は中止になり、家に帰らされた。夏休みの分の宿題も今日渡され、明日明後日は学校に来るなどのことだった。つまり少し早目に夏休みスタート。

母親は買い物に出かけていて、家にいるのは僕と妹だけだ。

「……………「お前の家の母親はいつも買い物に行ってるんだな」なんて声が聞こえたような気がするけれど、気のせいだよな？」

ところで午後の授業が中止になった理由はもちろん、糸井故頃の死体が発見されたからだった。

昼休み、体育館裏で、不良の生徒によって、発見された。

解体なんてはされていなくて、左胸にナイフが一本、刺さっただけ。

普通の殺人だ。

普通の殺人だなんて、変な言い方だけれども。

誰に殺されたのか　それは分からない。

ただ、もうこれで、終わりなんじゃないかと、思った。  
なんとなく。

もう夏休みに入ってしまうわけだし。

僕にできることはもう、ない。

もやもやする終わり方だ。

消化不良。

美味しくない。

味気ない。

味気ない　食后感だ。

ああ、そういえば流々はやはり何か悩み事でもあるのか、隣の自分の部屋に籠ってしまっている。

よし、流々に会いに行こう。

一つ一つ片付けていかないと、気持ち悪い。  
と。

その時、家中に、電話の着信音が、鳴り響いた。

「あー、誰だろ」

僕は自分の部屋を出ると、流々の部屋の前を通り、電話に出るため、一階に向かった。

階段を下りて、リビングへ。

受話器をとろうとして

「お兄ちゃんっ！　駄目！」

流々が、受話器をとろうとしたその僕の手を掴んだ。

「……流々？」

着信音はまだ続いている。

表示されている電話番号を見る。知らない番号、いや、なんか見たことあるような……

「この電話に出ちゃ駄目です、お兄ちゃん！」

流々の声は泣き声に近かった。

「なんでなんだ。これは誰からの電話なんだ」

「う……」

言葉に詰まる流々。

着信音はやまない。

「……うううううううううううう」

「流々？」

「……けて」

「え？」

「助けてください、お兄ちゃん」  
流々は、僕をまっすぐに見つめ、そう懇願した。  
着信音は、まだやまない。

2

ごめんなさい。  
と、流々は僕に謝った。  
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいと、嗚咽混じりに、謝り続けた。

謝ってないで、どういうことだか説明してごらん、と僕はつとめて優しい声で、そう促した。

怒りませんか、と流々は僕に上目遣いで尋ねてきた。  
怒らない、約束するよ。

そう僕が答えると、流々はやっと、話し始めた。

「糸井故頃さんを殺したのは 生徒会です」

まず流々はそう言って、

「私が、依頼したんです」  
と、続けた。

「……………」  
絶句する僕。  
依頼。

生徒会は裏で、生徒から、どんな依頼でも聞きつけている  
過去には、人殺しもやったらしい。

そんな噂があった。

ただ、依頼には、代償が必要になるとも。

「私はもう人殺しなんてしちゃ駄目だって、お兄ちゃんが言ったから」

「だから、生徒会に、故頃を殺すよう、頼んだのか？」

僕は語気を強めないよう気をつけて、あくまで優しく、尋ねる。

「……いいえ」

「いいえ？」

「故頃さんだけじゃなくて　巫羽さん、も」

「っ！？」

と、いうことは。

巫羽はまだ殺されていないから、

これから……

次に殺されるのは、糸井巫羽、だという……

「どうして、なんだ」

「生徒会の人に、言われて」

「え？」

「三年生の女の人です。副会長の」

「……」

舞夢ちゃん。

仲野宮舞夢、か。

「何を言われたんだ」

「お兄ちゃんは故頃さんに命を狙われているって」

「……」

「生徒会の三年生や古下なんとかって人を殺したのは故頃さんだっ

て」

「……」

えーっと、待て。

どういうことだ？

「それは、何時の話だよ？」

「生徒会の三年生の死体が発見された日から、ずっとです」

「あ？」

それだと、舞夢ちゃんは、僕と初めて会ったあの日、すでに故頃が犯人だということに気付いていたということになる。僕の口ぶりがどうとか親しいからどうとか言っていたけれど、そんなものはすべて嘘で、本当のところ舞夢ちゃんは、すべての真相に、最初から

気付いていたとでも言うのか？

そういうことなのか？

「故頃さんは自分が好きな人を殺している、と言われました。すると、じきにお兄ちゃんが殺されることになるとも、言われました。」

「故頃さんはお兄ちゃんのこと好きみたいでしたし、だとしたら、早く依頼しないと、お兄ちゃんが殺されてしまいますから」

「依頼したと？」

「……はい」

「はあー」

嘆息。

確かに故頃は無愛想な子が好きで、僕が無愛想順位四位だと言われたことがあり　それはつまり、次に殺される　四番目に殺されるのは、実際本当に僕であつたかもしれないということだけだ。

「まあ、故頃は分かった。で、なんで巫羽もなんだ？」

「う……」

そこで流々は少し、言葉につまった。

「大丈夫。怒らないから、言ってごらん」

「……ついでです」

「ついで？」

何のついで？

「故頃さんを殺すことを依頼するついでに、巫羽さんも殺してもらおうと」

「必要がないだろ。ついでって、どういうことだ」

「巫羽さんも、お兄ちゃんのこと好きみたいでしたから　気に食わなくて」

「……、あー、なんで巫羽も僕のこと好きだと？」

「あの映画館で、巫羽さん、お兄ちゃんのこと、ずっと見てたんですよ」

気付かなかった。

僕はずっと右側の流々を見てたから、左に座る巫羽の視線に気付かなかったのは当たり前だけど。

それに、流々は一度でも僕を見れば、向こうから僕を見ている巫羽に、気付くと言ふことなのだけど。

「でもあれが初対面みたいでしたから、まさかと思って、そのことはお兄ちゃんに言わないでいたんです」

まあ、僕も、もしかしたら巫羽は僕のことを好きなのかもしれないとは思っていたけれど。

巫羽に会ってやってくれないか、という故頃の発言などから、推測することはそりやあできる。

「で、学校でお兄ちゃんが巫羽さんと一緒に歩いているのを見て……その……、殺意が」

ああ、あの時か。

やっぱり、見られていたのか。

それに、見られなかったとしても、他の一年生の発言から、伝わるだろうし。

「だから《ついで》なのか」

「はい」

なるほど。

大体、分かった。

「で、さっきの電話は何だったんだ」

「多分、代償を払え、という要件だったのだと思います。生徒会はず先故頃さんを、殺したから」

代償。

「今日、呼ばれていたんです。学校が終わって、生徒会室に来るようになって。だけど怖くて、逃げてきたから……電話がきたんだと、思います」

「……」

さて、事情は大方把握した。

では、何をしようか。

何から、始めようか。

「流々、」

「はい、何でしょうか、お兄ちゃん」

「家にいて」

「はい？」

「生徒会に、話をつけに行く」

中奈河くんの忠告はどうやら、無駄に終わりそうだった。

3

学校には警察が来ていた。

誰にも見つからないよう、僕は校舎内に侵入し、そして、生徒会室を目指す。

果たして生徒会がまだ残っているのかは疑問だけれど。

でもきつと、警察や教師の目くらい、ごまかせてしまえているの  
だろう。

生徒会室にいるに、違いない。

でないと、電話してこないだろう。

そして、着いた。

生徒会室。

最高のタブー。最低の異端。

誰もが恐れる、生徒会。

その部屋。

ごくりと生唾を飲み、僕は生徒会室の扉を、開いた。

解離。日常から解離して、さあ、いざ 異常へ。

禁忌の一線を、越えようじゃないか。

果たして

「やあ、冬月直弥くんですね。僕は以前から、君とこの時間この場所  
でこういうかたちで対面することを、心待ちにしていましたよ」



中山里くんみたいに見透かしたようなことを言って、僕と向き合う位置で椅子に腰かけて机に両肘をついていたのは、

「僕が生徒会長を務めさせていただいている  
中途外統二なかとそと とうじです」

だった。

男子にしては長髪。知性的な顔立ちに、さらにそれを印象づける助けとなっている眼鏡。かすかな微笑を口元に刻んでいて、いかにも上品。

「ああ、僕が冬月直弥だ。初めましてだな、会長さん」

「おいおい」

中途外は苦笑いを浮かべる。

「他人行儀ですね。統二と読んでくださいよ」

「中途外、話をしに来た」

「ああ、分かっていますよ。妹さんの依頼をうち消してほしい、と言ったのでしょうか？」

「……」

見透かしたようなことを。

まるで

「まるで中山里のようですか？」

「っ……！」

「ははは。僕にはですね      どんな人間の本质をも見透かし真似できる能力があるのですよ」

どこまで本気でどこまで冗談で、

どこまで本当でどこまで偽装なのか、

分からないような、

口ぶり。

「まあ、そういうことだ。流々の依頼は帳消しだ。故頃はもう殺さ

れてしまったが、巫羽の方は、やらなくていい」

「もちろん、いいですよ」

なんだ、随分あっさりと認めてくれるのだな　と、少しばかり驚いたが、それを表情に出したりはしない。

これは、駆け引きだ。

「生徒の望むことをするのが生徒会です。当たり前じゃないですか」  
「でも、故頃の方の代償とやらは払わなければならないわけだな……」  
「。代償っていうのは、具体的には何なんだ？」

「簡単です。依頼された内容がマイナスなこの場合は、その半分の被害を、依頼者にも負ってもらうということです。自分に都合のいいことだけを依頼する生徒がいないように作ったルールなんですよ」

生徒会室には、僕と中途外だけで、他に生徒会メンバーはいない。帰ったのだろうか。分からない。

「つまり今回の場合で言うそうですね、一人殺したら、依頼者は半殺しにします。流々さんは二人依頼していますからね、半＋半で、流々さんには死んでもらおうと思っていたんですよ」

「……………」

こ、

こいつ、

こいつは、

こいつはこいつはこいつはこいつはこいつはこいつはこいつはこいつは

いや、なんでもない。

当然のこと、なんだろう。

言い争っても仕方がない。

大事なことは、生徒会はすでに故頃を殺しているということだ。

つまり、流々は殺されはしないけれど　半殺し。

させるわけねえだろうが。

「流々が払わなければならぬ代償を僕が払うことはできないのか

「？」

つまり、僕が生徒会に半殺しにされることになる。

暴力を、受けることになる。

甚振られることになる。

いくら泣こうと喚こうと、さだめられた「半殺し」という基準までは、儀式的に、蹂躪されるのだろう。

でも、流々にそれをやらせるわけには……

「ははは。面白いことを言いますねえ」

「ん？」

「ただ直弥くん　　はしやぎすぎないでくださいよ」

直後　　感知した。

「い！」

左に、ぎりぎり避ける。

ダアンッ！

振り下ろされた金属バッドは、床を、破壊した。

その金属バッドを握っていたのは、

「中奈河くん……っ！」

中奈河可成。

実戦担当。

「だから言ったのによ。マジただけねえわ。お呼びじゃねえよな」  
直後には、消えていた。

「　　っ！？」

右だった。

「は、早」

言い終わる前に、

ゴンッ！

「と後頭部を殴られて、

後は分からない。」

4

僕は、駅前の喫茶店にいた。

糸井故頃が殺されてから、はや一週間。

以前優奈と一緒にお茶した場所だ。……記憶が若干美化されている気がしないでもないけれど。

しかし今回僕の目の前にいるのは優奈でなく 糸井巫羽だった。故頃と同じ髪型をした、巫羽だった。

「へえ、故頃は君の恋を応援してくれていたというわけなんだ」

「うん。お姉ちゃん、あの時パーカー着てたでしょ？ あれ、映画館入る前に直弥がいるのを見つけて、すぐに買ったやつなんだよ」

「で、それがなんで故頃が君の恋を応援していた話と繋がるんだ？」

「お姉ちゃんの計画だと、まず私とお姉ちゃんが直弥と接触する。そしてシヨッピングモール内をお散歩。それだけだよ」

「……ん？ どういうこと？」

「つまり、いろんな人に、私と直弥と一緒に歩いているところを目撃してもらってことだよ。だって、直弥も私も普通の格好だから、一人だけパーカーを着ているお姉ちゃんが連れだとは、誰も思わないでしょう？ お姉ちゃんは少し離れて歩く計画だったし」

「ああ、なるほどね。既成事実つっのを作って、僕と巫羽をくつつけようとしたわけだ」

休日、あのシヨッピングモールには多くの中学生が来ている。もちろん、僕の学校の生徒も多く。その生徒達に、僕と巫羽と一緒に歩いているのを目撃させて、噂にさせて、むりやり付き合ってることにさせちゃうっていうわけだ。フードを被れば、故頃は皆に故頃

だとは分らないだろうし。

「下らないことやってんな」

「うん。でも計画は頓挫。流々ちゃんもいたから。映画が終わったら直弥、すぐ出ていっちゃったし」

ああ、それで故頃は出ていく僕と流々のことを睨んでいたというわけか。なるほどね。

「でも最終的には、故頃は僕を殺したい　食べたいを言いだしたわけか」

「うん。お姉ちゃんも、直弥のこと好きだったから。直弥には手を出さないって約束してくれてたのに、我慢できないとか言いだしただから、それで」

「それで　故頃は殺したわけだ」

巫羽はこくりと頷いた。

「直弥を殺されなくなかったから。お姉ちゃんには、死んでもらわないと」

そう。

生徒会は故頃を殺していない。

故頃を殺したのは　巫羽だ。

僕がその答えにいたったのは、僕が半殺しにならなかったからだ。だいたい、半殺しにされていたら、一週間して、こんなところでコーヒーなんて飲んでいられない。

気がついたら、校舎の外に捨てられていた。

気絶させられたただだった。

その後、電話は一度も来ないし。

それで、生徒会が故頃を殺したわけではないのかもしれないと思っただのだ。

そういえば、中途外は一度も、故頃を殺したとは言っていないかったし。

「直弥は、中山里さんの死体現場が密室になっていた謎は解けたの？」

巫羽は、紅茶を飲みつつ、そう訊いてきた。

「ああ、解けたよ。ようは、鍵がかかっていたと言うのは第一発見者新坂佐賀のついた嘘だったってことさ」

そう。

新坂佐賀は嘘をついた。

嘘をつく理由がないということで、それはないとしてきたけれど、理由は会ったのだ。

まず新坂佐賀は、鍵をかけたつもりでいた。しかし実は鍵はかかっていなかった。

翌日、新坂佐賀は自分が鍵をかけ忘れていたことに気がつく。そして扉を開けると、そこで殺されていたのは中山里反玖。

すると新坂佐賀はこう考えるわけだ。《自分が鍵をかけ忘れたせいで生徒会の人殺されたとバレれば、生徒会に何かされる》と。

恐れられている生徒会。その一人が自分のミスで殺されてしまったのだ。

ならば、嘘をつくしかあるまい。

そういうことだ。

新坂佐賀は三番目の被害者として故頃に殺されている。つまり、故頃は新坂佐賀のことが好きだったということだ。

ならば、新坂佐賀と委員会が終わったあとも一緒にいて、そして新坂佐賀が鍵をかけ忘れたことに気付いても当然だ。

それだけの話。

「その髪型、僕が《故頃の髪型が好き》って言ったから、そうしたのか？」

「うん、そつだよ。可愛い、かな？」

「うん、可愛いよ」

えへへ、と嬉しそうに笑う巫羽。

巫羽は前、ショートカットだったらしい。姫宮楓のように。

そして映画館で会った時は、ツインテールだった。流々のように。

僕のシスコン疑惑は結構前から実は学校で出ていて（休日いつも近所に遊びに行っているのだから、当然だ）、だから巫羽は、髪を無理やりツインテールにしていたのだろう。

巫羽はかなり前、僕に一目ぼれをしたらしいから、当然、姫宮楓の髪型をまねるわけだし。

しかし僕は巫羽と南校舎西側階段の上で話をした時《故頃の髪が好き》と言ってしまった。

ならば当然、巫羽はすぐに髪型を故頃と同じにするだろう。

学校で、当日、すぐに。

「その髪型を見た故頃は、それをアリのトリックに使おうと考えたわけだね？」

肯定する巫羽。

片目を隠している髪型なんて、この学校には故頃しかない。だから、遠くからそんな髪型の女子生徒が見えたら、それを故頃だと勘違いするだろう。

故頃が新坂佐賀を殺害している時間帯、巫羽は違う場所をわざと歩きまわり、多くの生徒に目撃されていれば、それで故頃にはアリバイができうことになる。

僕は故頃が犯人だと知った時故頃に《バレないようにしろよ》と言ってしまった。それを故頃は、まにうけたわけである。

とまあ、こんなんがおおまかな真相なのだけど、実はもう一つ、ある。

生徒会についてだ。

結果的には巫羽に先を越される形となってしまったけれど、実は生徒会も故頃を殺そうと考えていた　という真相。

流々に依頼されたから、というわけでなく。

それよりもずっと前から、流々が故頃の殺害を依頼するように、仕向けていた。

生徒会は生徒の依頼でないと動かない。

形式上のそれを守るため、犯人が故頃だと最初から気付いていた

生徒会は、流々に目をつけたのである。

流々に、故頃を殺害するよう、依頼させた。巫羽のことは予想外だったろうけれど。

新坂佐賀が最後に窓閉めを行い、鍵をかける（実際はかけ忘れていたのだけど）時まで、故頃が一緒にいたという情報を掴んだ生徒会は、すぐに、犯人には辿りついていたのだ。

どうりで、生徒会が大したことないように思えたわけだ。

そう思うように、僕はコントロールされていたのだから。

生徒会としても、中山里くんを殺されて黙っていることはできなかったのだろう。

つまり、そういうことだ。

生徒会なんてものに関わったのが、そもその間違いだった。

すべて、僕と中山里くんの出会いから、始まった。

映画館で故頃に中山里くんの話を出していなければ、彼女は人殺しなんてしなかったのかもしれないのに。

恐れられている生徒会。その理由が、もう分かった。

関わってなお、正体不明。

関わって良いことなんて、一つもなかった。

僕なんて、お呼びじゃなかった。

気持ち悪い。

こんなこと、きっと生徒会にとっては、日常茶飯事でしかない。なんでもない。

こうして、いろいろな有象無象が大したことのない真相として、明瞭なそれになっていく。

ふと、巫羽に目を向ける。

にこにここと、僕を見つめる巫羽。

へえ、やっぱり姉妹だな……。

巫羽が僕を見るその目は、美味しそうな食べ物を見る目だった。



・「愛しい愛しいeat」

食べ終わる・

## デザート代わりのラストスパート（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございました。

この「いといいいい」とは、密室トリックと中山里くんと舞夢ちゃんを書きたくて書かれた小説です。

ミステリが好きでミステリ小説を書いている方はプロもアマチュアも皆そうだと思うのですが、ミステリを書くものとして、密室トリックを一つオリジナルで作ることは、義務のようなものだと思います。

ということ、今回それをやらせていただきました。といっても密室が物語の主軸となっていないのは、この物語は「くるくるまわる」同様、なんともいえない不安感や曖昧模煦な気持ち悪さを味わっていただくことを目的とした小説だからでしょう。なんて偉そうにここまで語ってきて、この小説を読んでくださった寛容な皆さまも「なんだこの若造は。イラつくことこの上ない」とお怒りだと思いますので、真面目な話はこれにて終了。

この小説は中山里くんオンステージです！

一話目で死んでるくせに、物語を最後まで支配してるのは生徒会とかじゃなくて、この中山里くん個人です。

そして舞夢ちゃん。ああいう知性的な女の子を書きたかったわけです。

と、自分のキャラクターをくん付けちゃん付けで呼んでいて「うわあ、痛い痛い」と皆さまお感じでしょうが、ぐだぐだなまま、ここらへんで無駄に長くなってしまったあとがきを締めたいと思います。ここまで読んでくださり、本当にありがとうございました。感謝の至りであります。

もしかしたらいつか続編を書くかもしれない、と思って完結にはしていないのですが、どうでしょう、主人公と流々の兄妹愛が書いてて本当に気持ち悪いので、続かないかもしれません……。

それでは。

## 第一の殺人と

パイ  
という記号がある。

円周率を現す記号だ。

円周率。円周の長さや円の面積などを求める際に使用する数字。

3 . 1 4 1 5 9 2 6 5 3 5    8 9 7 9 3 2 3 8 4 6 ……と、続き  
つづける。

小学校では3 . 1 4と習うことが多い。

中学校になつて として計算する。

まあこれは、僕の世代の話なので、今がどうなのか、これからどうなるのかっていうのは分からないけれど。

まあ、この物語を見てみるといい。

現実味なく、薄っぺらで、嘘みたいで、幼稚で、馬鹿らしく

謎解き<sup>パズル</sup>に満ちた、この本当に短い小さな物語を。

第三幕「ずるずるばずる」

0

間違いなく

1

僕は今、車に乗っていた。

我が冬月家の車だ。父の愛車。

隣の席に、流々。

僕の前 助手席に母。運転席でハンドルを握っているのは父。家を出てから、すでに三時間が経過。

流々は寝てしまっている。

向かう先は、父の父 僕の祖父の家。何故か山奥に一人でひっそり暮らしている冬月喜怒おじいちゃんの家だ。

喜怒おじいちゃんには哀楽という名の妻 つまり僕の祖母がいたが、三年前に他界。

夏休みということで、久しぶりに行くことにしたのだ。したのだって言っても、決めたのは両親で、僕と流々は強制連行のようなものだけど（そのせいで、巫羽とデートする計画が破綻した。ちょうど今日の予定だったのだ）。

それに、喜怒おじいちゃんが住んでいる山のふもとにある町では、今連続殺人事件が起きているとの話だった。

連続殺人事件で。

なんで今行くんだよ。

まあ、それを知ったのは昨日で、計画は一昨日から立て始めていたから、今更変えるのも面倒くさかったのだろう。

喜怒おじいちゃんの家は山の上の方だから、関係ないと言えば関係ないし。なんでも、被害者は全員体をばらばらにされているのだとか。学校の生徒が連続で殺されてるみたい。

ただ、その町には僕の親戚が住んでいて、それは少し危ないところがあった。

冬月彩夜ちゃんという女の子と、冬月夏陽ちゃんという女の子。

今日は二人も喜怒おじいちゃんの家遊びにくるみたいだ。

「それと坐濡ちゃんと駕仏くんの家族もくるみたいよ」と、母。

坐濡ちゃんと駕仏くんか。どんな子達だっけか。彩夜ちゃんとかはよく覚えてるんだけどなあ。

そんなことを考えているうちに、喜怒おじいちゃんの住む山はど

んどん近付いてくる。

もう夕方になっていた。家が出るのが遅すぎたことが原因にあげられる。

山も見えてきて、今走っているのは住宅街だった。裏道だ。大通りは混んでいた。

「……？」

ふとその時、通行人が目に入った。

二人組だ。

男子と女子。年齢は僕と同じくらいだと見られる。

女子の方が目を引いた。何だあいつ。強姦に襲われた後みたいな服装だ。穴だらけの制服。何なのあいつ。頭おかしいだろ。いや、隣にいる男がやったのだろうか。ちなみに女子、被っているニット帽だけは普通だった。ミスマッチだ。

男の方。なんか変な奴だ。関わりたくない。絶対友達とかいなさそうだった。僕とは似ても似つかない男だ。でもあの男、一人称は多分「僕」だ。おそらく。目がおかしい。イツちゃってる。なんか暗い。女子の方が楽しそうに何やら喋っているのに対し、男子は無表情だった。無反応でもある。あんな可愛らしいニット帽少女がお喋りしているのに、あんな面倒そうな反応。頭おかしいのは男のほうだった。

とにかく、気持ち悪い二人組がいて、僕の手は二人の横を通り過ぎ、姿は見れなくなる。

2

夜、到着した。

僕は車酔いした。道がぐねぐね曲がりすぎだ。なんだってあのクソジジイはこんな山の上に住んでいやがるんだ。僕だったら住んで嫌がるぞ。

自分の荷物を持って家に入る。

「直弥お兄ちゃんこんにちは！」

「……」

突然で面食らった。

「あつ、違った、やばい、どうしよう、間違えた。こんばんは！」

「こんばんは。えっと、彩夜ちゃんだよな」

「うん、そだよ！ あつ、違った、やばい、どうしよう、間違えた。うん、そうですよ！」

面倒くせえ……。

冬月彩夜。現在小学五年生。

「それでこちらが妹の夏陽だよ！ ……ですよ！」

さすがにしつこいと思ったのか、途中過程は省かれていた。

見ると、そこには車いすに乗る少女。

「久しぶりだな、直弥お兄ちゃん。まあ、積もる話もあるしさ。はやく上がって荷物おきなよ」

「……相変わらずだな、お前も」

冬月夏陽。現在小学三年生。ませたガキだ。

「おじゃましまーす。です」

僕に続いて流々も入ってくる。寝起きで頭がぼーっとしているのだろうか。冴えない表情である。

「あ、流々お姉ちゃんこんばんは！ やった、やったぞ、ちゃんと間違えなかったぞ」

「こちらも随分久しぶりだな。流々お姉ちゃん。見ないうちにまた髪が伸びたみたいだ。当然といえば、当然なのかねえ」

姉妹なのに、何なのだろう、その差は。

「上がって上がって！ 喜怒おじいちゃんねえ、向こうの部屋で待ってるよ……ますよ！」

難しいのなら無理して敬語を使う必要もないのだが……。それに、年下で敬語の女の子を見ると、どうも流々と重ねて見てしまう。それはいただけないな。

靴を脱いで廊下を彩夜達につられて歩く。

廊下はギシギシと音を立てていた。古い家なのだ。しかしこの家、昔まったく僕らに関係のない人達が住んでいて、その人達が引越した後に喜怒おじいちゃんが買った、ということらしい。

そしてお茶の間に案内される。

ふすまを開けて、直後、

卓袱台を挟んで真正面　卓袱台におかれた将棋盤に向かうかたちで胡坐を組んで座布団の上に座っている男が、将棋盤を見つめたまま、声を発した。

「どうだ直弥坊。一局まずはささないか」

「いいですね。僕は将棋が大好きなんですよ」

「ワシは嫌いだ」

「ならなぜやるのですか？」

僕は荷物を起き、その男　老人の前に卓袱台、つまりは将棋盤を挟んで座りながら、そう訊ねた。

「人生と同じだからだよ」

老人　冬月喜怒　喜怒おじいちゃんは、静かにそう答え、歩を一つ進ませて、そこで初めて僕と、目を合わせた。

「嫌だけど、やらねばならぬことはある」

「へえ、老いぼれた老人がよく言いそうな台詞ですね」

僕も歩をひとつ、進ませた。

### 3

母の言うとおり、喜怒おじいちゃんの家には坐濡ちゃんと駕仏くんも来ていた。それと坐濡くん駕仏くんの両親である、駕田おじさんと院<sup>いんすい</sup>醉おばさんも。

喜怒おじいちゃんの家にいるメンバーをまとめると、

喜怒おじいちゃん、

彩夜ちゃんと夏陽ちゃん、

坐濡くんと駕仏くん、



駕田おじさんと院酔おばさん、

僕の父、母、

流々、

それと僕の　計、十一人。

「彩夜ちゃんと夏陽ちゃんをよく来たねえ。下の町じゃ、連続殺人事件が起きているのだろう？」

夕食の時間。父がそう言った。

「だからこそ、というのもあるよ！　じゃなくて、あわわわ、ありますよ！　ほら、えーつとえーつと」

「お姉ちゃんが説明する必要は皆無だよ。簡単だ。下の町にいるよりも、この山の上にいた方がずっと安全だからだ。ここへは母に送ってもらったのだしね」

大人びた小学生女子　夏陽ちゃんがそう説明する。まあ、自分達でやってくることはできないだろう。夏陽ちゃんは車いすなのだし。なんでも、幼い時に交通事故を起こしてしまったことが原因らしい。

「連続殺人事件、ねえ　ハッ！」

そこで夏陽ちゃんの話さえぎった声の主は、こちらも遠くから家族で来ている冬月駕仏くんだった。

「荒唐無稽だよなあ。しかし面白い。ハッ！　どんな話なのか詳しく聞きてえもんだぜ」

「その通り」

駕仏くんの隣に座る坐濡くんもそれに乗っかる。

「全くもってその通り、だよ。この一言に尽きる。クッ！　こいつはどんな話なのか詳しく聞きてえもんだよ」

二人は双子の兄弟だった。二人とも、十一歳で小学五年生。

「悪いねえ。うちの子供　特に駕仏はそういう話が大好きなんですよ。もう、人が死ぬような小説ばかり読んでいるのですから」

「ミステリ小説だよ母さん。そういえば、直弥のお兄ちゃんも好きなんだっけか？」

「ん？ 別に」

昔の話だ。

「ハッ！ そうかいそうかい。ま、オレはそういう話、犯人の方に毎回毎回感情移入しちゃうんだよな。人を殺すとか面白そうだけど、普通やらねえもんな」

「同感。全くもって同感、だよ。この一言に尽きる。クッ！」

この二人も普通の小学五年生にはどうしても見えなかった。しかも、人を殺すとか面白そう、というその発言に注意をする大人もない。喜怒おじいちゃんなんかは笑っていた。

「将棋でも、楽しい瞬間は相手の駒を取るあの刹那だ。飛車や角行を暴れさせるあの感覚を味わいたくて、ワシは将棋をさし続けて七十余年だわい」

そんな喜怒おじいちゃんが飲んでいるのはオレンジジュースだった。

「殺されてるのは全員今のところある中学校の生徒だよ。私のクラスメイトに頭の良い子がいてね、えーと夜星真一とかいう名前だったかな、まあとにかくその子は《連続殺人事件の数日前、鷺さぎなんとかっていう女性が殺されていることが関係してるよ》とか言ってたが……。被害者は全員体をバラバラに切り刻まれていて、もちろん犯人は不明。それぞれの自宅で殺されることもあれば、下校中を襲われたらしいこともある。警察は通り魔の犯行だと言っていたがね」

夏陽ちゃんの説明を聞いて、喜怒おじいちゃんは笑った。

「そんなにぎやかなことが下では起きているのか。ほう、面白いわい。三十年あまり、ワシは下とは縁がないからなあ」

「全くだ。全くもって全くだ、だよ。この一言に尽きる。クッ！ いいねえいいねえ。犯人に会ってみたいものだよ」

「ハッ！ ま、連続殺人なんてやる輩はどーせ、頭おかしい奴だって相場が決まっているけどな」

「でも、分からないよね。もしかしたら深い理由があるのかも、っ

て私は推理するな」

「深い理由？　どうだろうねえ。殺人に理由なんていらねえと思うけどな　何をするにも理由なんていらねえように、さ」

「理由だなんてこじつけがましい後付け設定だよ。全くもって理由だなんてこじつけがましい後付け設定だよ、だよ。この一言に尽きる。クッ！」

そんな中、つんつんと、僕の脇腹を流々がつついた。

「流々、何かな」

小声で聞くと、流々は不機嫌そうな顔で、

「お兄ちゃん、やっぱり流々はいくら嫌いなんですよね。こういう幼稚な奴ら。まるで円周率ですよ。割りきれなくていらいらします」

お、うまいこというな、なんては言わずに僕はただ一言「そうだね」と返して、流々の髪を撫でた。

それを少し遠くから、彩夜が無表情に、見ていた。

#### 4

その死体　冬月夏陽　の近くにはダイイングメッセージが残されていた。

血で書かれた文字。　と書いてある。

円周率。

車いすは近くに倒れていて、冬月夏陽の死因は胸をナイフで刺されたことによる　大量出血。

その他に外傷はなくて、手掛かりになりそうなものも、　という血で書かれたダイイングメッセージ以外には見当たらない。

冬月夏陽が殺されていたのは、広い喜怒おじいちゃんの家の一西の畳敷きの和室。喜怒おじいちゃんは現場を見て一言、畳が汚れてしまったよ、と言った。

冬月夏陽には常に冬月彩夜がついているのだが（姉として、足の

不自由な妹の世話には責任を持ってあたっているらしい）、それでは冬月夏陽はいつ殺されたのか　いや、それは当たり前前に冬月彩夜がトイレに行つて、冬月夏陽から離れた時だった（彩夜談）。

よつて、第一発見者は冬月彩夜。悲鳴を聞きつけて、僕らが来た感じた。

ハッ、面白れえことになったなあオイ　と鷺仏くん。  
クッ、面白いの一言に本当尽きるねえ　と坐濡くん。

と、というのが設定だった。

「……………はあ。設定ですか」

「そう、設定だ」

無表情にそう言つたのは、車いすに座つて僕らの前にいる夏陽ちゃんだ。胸にナイフなんて刺さつていなくて、血なんて鼻血すら出ていない。畳は汚れていないので、喜怒おじいちゃんも一安心である。ただ、床に紙切れが落ちていて、そこには赤鉛筆で「　と書かれていた。

「というわけで、誰が私を殺したのか、推理してもらおうと思う」

そう、夏陽ちゃんは締める。

「ハッ！」

と笑つたのは鷺仏くんだ。

「本当に犯人がいるのだと仮定すると、だ。犯人はこの場合、彩夜になるんじゃないかねの？」

そう言われて、彩夜は「ふえっ!？」と声を上げた。

「違うよ!　う。違いますよ!　だって設定でも、彩夜が殺されたのは私がトイレに行つてゐる間だって言つてゐるし。だったらむしろ、えーつとえーつと……………」

「お姉ちゃん、説明は不要だ。つまりお姉ちゃんは、むしろ私は絶対に犯人じゃないじゃん、つて言いたいんだね？」

「そうだよ!」

「クッ!　それは違うよ。全くもつてそれは違うよ、だよ。この一

言に尽きる。だってそのトイレに言っただってという話はあくまで《彩夜談》だって設定だろ？ 彩夜が犯人で嘘をついているのかも、しれない」

まあ簡単に状況を説明する。夕食が終わり、各自自分の部屋に行き（僕と流々は二人きりで一部屋だ。いえい）、そしてしばらくしてから、夏陽ちゃんに皆呼ばれた というわけである。

で、夏陽ちゃんに「設定」を話された、と。

夕食の時のあの会話が伏線だったのかなんだったのかは知らないが、推理ゲームをしたいらしい。

どう考えても、犯人として一番怪しいのは彩夜ちゃんだけど。

「悪いけど、」

流々がそこで口を開いて、口をはさんだ。

「流々はそんなことしませんよ。あまり大人を幼稚な遊びに巻き込まないでほしいです。いや、あまりというより、絶対」

ちなみにここにいるのは子供連中だけだ。僕、流々、坐濡くん、駕仏くん、彩夜ちゃん、夏陽ちゃん。

僕の両親と駕田おじさんと院酔おばさん、それに喜怒おじいちゃんはいない。

「行きますですよ、お兄ちゃん」

「うん、そうだね」

僕は流々に連れられるかたちで、部屋をあとにした。

5

「はー、疲れましたよー。流々はああいいう子供本当嫌いですし、それに車で四時間っていうのも嫌でした。飛行機使えよ！ って感じですよ」

「この近くには空港ないけどね」

僕と流々は自分達の部屋に戻って来た。ふすまをしめる。鍵がかららないのが残念だ。流々もそう感じているようである。

「布団は一つ敷けばいいですよね！」

いきなり問題発言だ。

僕がさてさて何と答えたものかと考えていると、僕の携帯電話が着信音を立てた。プルルルル、と。

「間が悪いですねえ」

流々が肩を落とす。

「ちよつと出てくる」

僕は言つて、部屋から出て廊下をしばらく進み、携帯電話をポケットから取り出した。

えーつと、誰からだろう……。

表示は「糸井巫羽」となっていた。

……。

……。

……。

やべえ。

今日おじいちゃんの家行くからデートは中止、って言つて、忘れてた。

「もしもし。こちら冬月直……」

「ばかーっ！」

開口一番叫び声だった。

「直弥、今何時だと思ってるの？ 私ね、もう九時間くらいずっと待ってるんだよ？ どうして私を虐めるの？ 意地悪して楽しい？」

泣き声だった。

うわあ。駅前で九時間待ち続けたのかよ。一時間くらいしたら電話したらいいのに。

「ごめんね、巫羽。愛してるよん。いえーい」

「っ！ ……このタイミングで言わないでよ！ ずるいずるい！」

ひきょう者だあ！ で、今は家？」

「いや、おじいちゃんの家」

「重ねてばかーっ！」

そこからの説得が大変だった。

結局十五分かかった。

通話を終えて、直後

「直弥お兄ちゃん、」

背後から突然声をかけられて、僕はびっくりする。振り向くと、そこにいたのは彩夜ちゃんだった。一人である。

「どうしたの？ 推理ごっこは終わったのかい？」

「えっと、いや、そうじゃなくて……」

「ん？」

「ほら、夏陽のせいで、流々お姉ちゃんと直弥お兄ちゃん、怒っちゃったみたいだから、謝りたくて……」

「いや、気にしないでいいよ。流々は怒ってるけど、僕は怒ってない。大丈夫だよ」

「そう……ですか。なら、良かったです。それにしても、久しぶりですね、直弥お兄ちゃん」

なんだろう。意味ありげに真面目な雰囲気だ。こんな夏陽は初めて見た。妹の前では、盛り上げないという意識でも働いていたのだろうか。

「そうだね、確かに久しぶりだ。一年ぶりだよ」

「はい！」

何故か嬉しそうにする彩夜ちゃん。

「それで、他にも何か僕に用があるのかな？」

巫羽との電話に多くの時間を使ったので、なるべく早く部屋に戻らないと流々の機嫌が悪くなっていそうなのだけど……。

「あ、いえ、もう、ない……です。はい。は、話せてうれしかったです。ばいばい、直弥お兄ちゃん。またね」

「うん、またね」

変なの。

はて、と首をかしげて僕は、流々の待つ部屋へと戻った。

布団はちゃんと、二枚しかれていた。……隙間なく並べられてい

る。

6

その死体      冬月夏陽      の近くにはダイイングメッセージが残されていた。

血で書かれた文字。ただ、それが何と書いてあるのかは分かりづらかった。

頭を壺で何度か打たれて死んだらしい冬月夏陽。その血はあたりに飛び散っていて、その血しぶきの中に、それは書かれている。

入り口から見ると、縦向きに丸が二つ、並んでいる。

しかし丸と丸の間はほとんど離れていない。血しぶきが邪魔だ。それがなければ何と書いたのか明確なのだが……。

凶器となつたらしい壺は部屋の隅に転がっていて、近くに車いすが倒れていた。

それらを十分に観察することができないうちに、僕らは大人たち（喜怒おじいちゃん以外）に部屋の外に出されてしまった。部屋のふすまは閉められた。

今、僕の親が警察に連絡を入れているところだ。

そしてこれは設定なんかじゃなく、本当の話だった。

・つづく・



## 第一の殺人と（後書き）

先日活動報告にて、受験勉強のための活動休止を宣言しました僕ですが、こんな感じで今回、新たなお話を更新いたしました。（話が違っじゃねえか！）

合間に更新した、ということです。

あくまで合間なので、短いお話です。本当は第三幕としては夏休み明けのお話を予定していたのですが、このような短編的内容とさせていただきました。

次回で第三幕は完結いたします。（はえーよ！）

ふざけてばっかのように実は今回の前編にもいくつか伏線が張ってありますので、まあそこはアレです。（説明力ないじゃん！）

では、なるべく近いうちに後編の更新をしたいと思います。

楽しんでいただけますと、冥利に尽きるお話です。

## 再・第一の殺人と謎の記号

0

ナニコレ。

1

あの時。

僕と流々は自分達の部屋にいて、その最中、かすかに夏陽ちゃんの悲鳴が聞こえたのだった。

それから少しして、彩夜ちゃんの悲鳴が上がった。それで僕らも少し気になって、悲鳴が聞こえた方向　喜怒おじいちゃんの家で一番西側の部屋へと向かったのだ。

部屋の前の廊下には彩夜ちゃん、坐濡くん、駕仏くんが来ていて、部屋の中を平然とでなく呆然と啞然と、見つめていた。

そして僕と流々が部屋を覗いて、そこで夏陽ちゃんが死んでいたのだ。

すぐに駆け付けた大人たちによって、すぐに部屋から話されたが、どうやら本当に死んでいるらしい。

救急車とパトカーが今頃この山の上に向かっていているのだろう。

僕と流々は自分達の部屋に一旦戻ってきていた。

「この部屋に二人でいれば安全だ。まず間違いなく、犯人はこの家の中にいるわけだけれど」

「そうですね。お兄ちゃん是谁が犯人だか分かっているのですか？」

「いいや。情報が少ないからね」

まあ考えるべきことといえば、あのダイニングメッセージだ。

一体あれは何を現しているのだろう……。

やはり、名前か？

あれは何と書かれていたのか。

飛び散った血の上に丸が二つ、並んでいた。二つの丸の間は少し離れていたけれど……。

「○○<sup>オオ</sup>」か？ それとも……「8」？

○○だとして、それは何だ？ イニシャルか？ だけれどこの家にイニシャルが○○の人間なんていない。ならば何だ？

8の場合でも、意味が分からない。今が八月だってことか？

八歳の人間もいないし……。

それか、まだ、途中だったのかもしれない。書いてる途中に、息絶えてしまった。

冬月夏陽。

短い人生だったねえ。

可哀そうに。

そんなに思い入れのある子ではなかったけれど。

「夏陽ちゃんがやっていたあの推理ゲーム。あれと関係してるんでしょうか」

流々がそう呟いた。ああ、そんなこともあったな。

「流々に下らないって言われたから、実際に死んだ、とか？」

「違いますよ。お兄ちゃん、笑えない冗談はやめてください」

うん、その通りだ。我ながら緊張感に欠ける。

「確か、あの推理ゲームでは夏陽ちゃんのダイイングメッセージは<sup>バイ</sup>「<sup>バイ</sup>」という設定でしたよね」

「ああ、円周率だな」

「夏陽ちゃんの年齢で、なんて知ってるのでしょうか？」

「ん。言われてみれば確かにそうだな。でもそんなこと、どうにも言えるだろ。どこかで偶然知ったんだろうさ。それともあれは犯人役の誰かと一緒にやってたんだから、その人が知ってたのかもしれないし」

「おそらく彩夜ちゃんだろうと思いますけど」

「そうだね。彩夜ちゃん、小学五年生か……。そうだね、知ってて

もおかしくないし。そっぴや円周率習うのって五年生でだったよな」  
「一応、確認してみます？」

「ん。何で？ だいいちさっきの話になるけどさ、どうにでもなるんだよ。誰かに聞いて知ったのかもしれないし。ほら、どのクラスにも物知りさんっているじゃん」

「でも推理小説なんかですと、形式的にそっぴのは確かめないといけないですよ。数学の証明問題でいうところの、理由です。辺AB＝辺EF（平行四辺形の性質）みたいな」

「推理小説ね。なんか最近聞いたような言葉だな。で、裏付けを取るってのは、やっぱ本人に聞くもんなのか？ それこそ推理小説じゃ、犯人つーのは嘘つくよな」

「彩夜ちゃん、鞆持つてきてますでしょ？」

「そりゃ泊まるんだから」

「夕食の時見たんですけどね、その中に勉強道具もいくつか入ってたんです」

「そりゃ……まあ普通だな」

「算数の教科書、もしくはノートを見れば、を習ったかどうか、分かるんじゃないでしょうか？」

「成程」

というわけで僕と流々は部屋から出て、彩夜ちゃんのもとへと向かった 殺人犯のいる家の中を。

## 2

「えーっと、流々お姉ちゃんと直弥お兄ちゃん、何でしょうか？」

彩夜ちゃんが寝ることになっている部屋に行くと、やはり彩夜ちゃんだけがいた。どう見ても、泣いた後だ。頬に涙が伝ったあとがある。目も腫れているし。

まあ大事な妹が死んだんだから、それくらい当然なのかもしれないし、今泣いていないだけ、彩夜ちゃんはしっかりしているのかも

しれないけれど。

僕も妹が死んだら　　って、そんなこと考えるもんじゃないだろう。

「ん。なんでもないよ。いや、なんでもなくはないのか。ただ、様子を见に来ただけ。一人でいると危ないよ?」

「あつ、そうですよね……」

彩夜ちゃんの相手をしつつ、僕は彩夜ちゃんの鞆を探す。

あつた。部屋のすみ。

ピンクのリュックサックと、青いリュックサック。片方が彩夜ちゃんのもので、もう片方が夏陽ちゃんのものなのだろう。ピンクのリュックサックがぱんぱんに膨れているのに対し、青いリュックサックは中に最小限の荷物しか入っていないのだろう　　ぺちゃんこだ。

うん、彩夜ちゃんのリュックサックは十中八九　　/　　十中十、ピンクの方で間違いないだろう。

僕と流々は彩夜ちゃんとそれからしばらく対談し（流々はあからさまに嫌そうに話している。おいおい）、それから自然にピンクのリュックサックを手にとることに成功。

中に　　算数のノート。

開いてみる。

僕はこんなことに意味なんてないと思うけれど、一応の確認つてやつなんだろう。これでノートに　　と書いてあつたら、彩夜ちゃん　　を知つてることになる。　　円周率の々を。

彩夜ちゃんは僕が算数のノートを見ていることに気付いていない。僕も膝に隠してみているし、流々がカムフラージュをしてくれている。

そして。

「……………」

見つけた。

ノートの、最近の方のページ。女の子らしい丸っこい文字で『円

周率は（パイ）であらわす！』と書かれている。しかし を多用してはいないようだ。小学校ではあくまで3・14で計算する。

三点一四。

「ん？」

三点一四？

さんいちよん。

三一四。

さいよ。

彩夜。

「3・14」さいよ「彩夜？

ダイイングメッセージ』』というのは、彩夜ちゃんのこと？

ならば、最初のあの推理ゲームはやはり彩夜ちゃんと夏陽ちゃんが二人で計画したことっていうことだ。

では実際に夏陽ちゃんを殺したのも彩夜ちゃんか？

それは短絡すぎるというものだろうか。

夏陽ちゃんの悲鳴が聞こえ、僕と流々はすぐにあの部屋に駆け付けた。その時には夏陽ちゃんは死んでいて、あの時僕らよりも先に現場にいたのは彩夜ちゃん、坐濡くん、鷲仏くん 彩夜ちゃんがいる。

夏陽ちゃんを殺して、そのまま現場にいて、第一発見者を装ったそう考えれば……。

第一、推理ゲームを最初に夏陽ちゃんと計画したのが自分だと言いださないのは、おかしいじゃないか。

彩夜ちゃんが、犯人？

と。

それが、目に入った。

ノートの端に、落書き。

相合傘が書いてある。好きな子と自分の名前を書く、アレだ。

片方の名 冬月彩夜。

そしてもう片方。

「……………」

冬月直弥。

……はぁん。

成程ね。

警察が来る前に、分かった。

僕がそれを分かううが分かるまいが、警察がすぐに犯人は見つけたのだろうけれど。

でも、自分で曖昧なるこの状況を打破できたのは喜ばしいことだ。流々も喜ぶ。

実につまらない      パズル 謎解きだった。

3

僕は彼らの部屋に向かった。

部屋には彼らしいなくて、好都合だった。

冬月坐濡くんと冬月駕仏くん。

今から始まる推理はきつと正しいが、無理やり感是否めない。我田引水で、喜怒哀楽の滅茶苦茶な、追わぬが仏の推理。

ずるずるとだらしない、子供たちのパズルの物語。

子供をナメるな。

大人は子供をナメてるよね      はて、誰の言葉だったかな。

子供の遊びに、付き合う暇はない。

「ねえ君達、夏陽ちゃんを殺したよね？」

尋ねると、二人はそれを笑い飛ばした。

「ハッ！ そいつあとんだ見当違いだよ直弥お兄ちゃん。馬鹿馬鹿しい」

「クッ！ 馬鹿馬鹿しい      この一言にもつぱら尽きる。この言葉に、全て入ってる」

さて、証拠でもあるのかい                    と、二人は声をそろえる。

その台詞は、自白みたいなものだ                    推理小説の場合は。

この世は推理小説じゃない。

でもこの事件が推理小説っぽいのは、犯人である駕仏くんが推理小説好きであつたからだ。

夕食の時言っていた。

駕仏くんは、推理小説が好きなんだ。

「推理小説が好きな君は、あの推理ゲームで彩夜ちゃんが犯人である根拠を得るために、彩夜ちゃんが    を知っているのか確かめようとした」

流々のように。

推理小説マニアは、そういうことをせずにはいられない。

「そして算数のノートを見た君は、発見した。ノートの端に書かれた相合傘を。彩夜ちゃんが、僕が好きだと言うことを、君は知り、それを利用することにした」

駕仏くんは殺人を試みてみたかったのだろう。

夕食の時も面白そうと言っていたし。

推理小説をたくさん読んでいた駕仏くんは、自分もやってみたいと、常々考えていた。子供だから。子供はそう考えるものだから。

「君達は夏陽ちゃんのところに行き、殺した。その時彩夜ちゃんがそこにいたのかどうかは分からないけれど、目撃していた、もしくはすぐに駆け付けた彩夜ちゃんは、君達が犯人だと知った。そこで君達は言っただ。お前が直弥お兄ちゃんのことを好きだってことをバラしていいのかい    と」

幼稚だ。

本当に幼稚。

それであつさり黙り込んで悩んでしまう彩夜ちゃんも、ほんとう、子供だ。

子供。

これがこの物語の核心。



子供だからこそ、起きた事件。

「あとオマケ。夏陽ちゃんが死の間際に残した、もしくは君達が意図的に書いたダイニングメッセージ。あれは《g》と書かれていたんだ。僕はてつきり丸が二つ並んでいたのだと思っていたけれど、右上と真ん中の点は、血しぶきの中にあっただからダイニングメッセージの一部だと分からなかった。じっくり観察できなかったせいでもあるけどね。そしてgは名前の頭文字。この家にgという頭文字を持っているのは君達のお父さんである駕田おじさんと、君  
駕仏くんしかない」

しかし、この場合は駕仏くんなんだ。

「なぜなら、gは小文字で書かれていたからさ。小文字だから子供だ」

以上。

終了。

「あー、つまらなかったですねえー」

帰りの車の中で流々はそう言った。

「なんなんですか。警察のあの取り調べ。犯人は坐濡と駕仏だったんだろって何度も言いましたのに、しつこいしつこいしつこいしつこい。いらいらしますねー。あれ、お兄ちゃん、浮かない顔ですね」

「そう？」

実は浮かない。

巫羽、まだ怒ってるかなあ……。

「それにしても、下らない事件でしたねー。簡単すぎます」

「仕方ないよ。子供だもん」

かくして僕は自分の街に戻る。

夏休みはまだまだある。

また学校が始まるまではまだまだある。

生徒会にはしばらく会わないで済む。

生徒会……。

「ところでお兄ちゃん、彩夜からの告白、どうしたんですか？ 好きだっって言われたのでしょうか？」

「あ、バレてた？」

「はい」

「断ったよ」

「どう言って、断ったのですか？」

「子供にはまだ早いよ、ってね」

・<sup>めいめい</sup>ずるずる謎解き、終わり・

## 再・第一の殺人と謎の記号（後書き）

読んでくださり、ありがとうございました。

今回の第三幕「ずるずるばずる」は、短編ミステリを書くことと思って執筆された小説です。

僕はミステリ大好き人間なので、書くのも大体ミステリなのですが、やはりミステリというのは性格上、長くなってしまうことが多いです。

なので今回は出来る限り短くミステリを書くことと思って作りました。ですから真相も実にチープでシンプル、いたってイージー。

ということで、「ずるずるばずる」でした。

前編に登場する男女二人組なのですが、分かる方には分かっていただけだと思いますが、僕と他作に登場いたしました琴吹闇斗ちゃんと鷺風砂ちゃんです。なので連続殺人事件の犯人は風砂です。でもこれ、「琴吹闇斗のペルソナ崩し」とは時期が違うんですよね……。

鷺風砂ちゃんは夏休み前に悲惨なことになりますから……。それと、作中でのgなのですが、思った字体で表示できませんでした。丸が二つでそれを点がつないでいて右上に点のある、あのジーにしようと考えていたのですが……。

他のシリーズもいくつかプロットが完成しているのですが、このシリーズで次書くものは「どるどるおどる」というお話になりそうです。予定では生徒会の二年生、仲加奈小鳥ちゃんなかかなおどりがメインです。

さて、これにてしばらくの間更新はありません。受験戦争に行ってきます。無事生還できることを願いまして、皆さまへの感謝の心を忘れず、いざ

## 葡萄会の舞踏会

こんにちは。

僕は冬月直弥だ。この場を借りて、僕は次の物語の扉を開けようと思う。

それは僕の曖昧さが招いたあの連続殺人事件よりも、食欲が招いたあの連続殺人事件よりも、子供だからこそあの殺人事件よりもさらに荒唐無稽にして滑稽、あるいは狂喜乱舞にして舞踏。そう、踊りであった。

誰もが誰かに踊らされた、闇の事件。

僕とその仲間達。

生徒会。

そして 『葡萄会』。

三つの勢力が絡まり、踊り、踊り狂い、拳句の果てには踊り倒れた、そんな夏休み終了直後の舞踏会。

まあこの物語を見てみるといい。幼稚で稚拙で拙作にして作品な、踊り。それは皮肉にも、結構、面白かった。

「どるどるおどる」

1

午後四時三十分。

約束の時間だ。

「はろーです直弥先輩<sup>なちや</sup>」  
と。

背後から声をかけられ、僕は振り向いた。

「……君が仲加奈小鳥ちゃん？」

「そですよ」

えへっ、と小鳥ちゃんは可愛らしく笑う。

生徒会会計

なかかなおとり  
仲加奈小鳥。

中学二年生。

僕を今日、この場所　体育館裏に呼びだした張本人だ。

「えっとね、要件を述べますよ、いいですか？　先述の通りウチが生徒会の仲加奈です。今日直弥先輩にお忙しい中足をここまで運んで　まあ足だけやってくるだなんてホラー展開はあり得ないのでこれは比喻ですが　来てもらったのは、他でもなく、生徒会からお知らせすることがあるからです。と、それよりも先に始めましての挨拶しましょ。ウチと直弥先輩って会うこと初めてですよね？」

「うん」

きさくに話す子だな、と思った。

小鳥ちゃんは垂れ目で、何故か瞳が潤んでいる。ぼろぼろのうさぎの人形を抱いていた（何故だかは分からないけど……）。

「でもどつかで会った気がしますよね。運命ってヤツですかね。えへっ。それはどーでもいいんですが、じゃあ改めて、はじめましてこれからよろしくお願いします」

そう言って小鳥ちゃんは抱きついてきた。

抱きついてきた。

抱きついてきた。

って何でだあああああああッ！？

「いや待って待って待っておかしいおかしい！　なんで初対面でハグなんだよ！　アメリカか！」

「《アメリカか！》なんてツツコミ初めて聞きましたが、まあウチ帰国子女ですし」

「どうでもいいよ！」

「えーっと、ああ、直弥先輩照れてるんですね、子供みたいに、ウブなんです、舞夢先輩まいむからの情報だと女に目がないプレイボーイだってことでした」

「いやそれ誤解！」

舞夢ちゃん何言ってんだ！？

「では本題にうつります。誰が盗聴してるか分からないご時世なので、あまり声を大にしては言えないんですが、ウチは小声とかそういう器用なマネでできねーんで普通に言います」

小声できないとか。

「《葡萄会<sup>ぶどうかい</sup>》という組織の話、知ってますか？」

「葡萄会……いや、知らないな、寡聞にして」

「そうですか。ではそこから説明します」

小鳥ちゃんはつま先で地面に文字を書く。

ぶどー会。

「あれ、ひらがなのの？」

「いえ、ウチの趣味です」

「意味ねー！」

「直弥先輩声でかいですよ。とにかくですね《葡萄会》、端的に申しますと、生徒会の敵です」

「へえ」

生徒会に敵とかいるんだ。

「おかしい組織ですね。メンバー・人数・構成・主義・目的・活動、その実態のすべてが謎なんです」

「じゃあ実在してるかどうかも怪しいじゃん」

「それがですね、実在してるんですよ。生徒会に手紙が来たんです。ゲンブツは持ってこれなかったんですけど、内容としてはこんな感じです。《冬月直弥・流々<sup>るる</sup>兄妹に接触をはかります。邪魔してくださいさって結構です。葡萄会》」

「え、僕と流々？」

何故だ。

「おかしいでしょ？ この手紙を生徒会の目安箱に入れた生徒を下調査中なのですが、反玖<sup>はんく</sup>先輩もいない今、少ない手掛かりで犯人を見つけ出すのは難しい……というわけで、直弥先輩にご協力を仰

ぎたいんです」

小鳥ちゃんは抱いていたうさぎの人形の右手を持ってぶんぶん振りまわした。意味は分からないが、なんか可愛らしい。

「どうすればいいのさ」

「手紙にある通り、葡萄会のメンバーが必ず近いうちに、直弥先輩に接触してきます。それをウチでもいいのでとにかく生徒会のメンバーに逐一報告してください。あ、ウチのメルアド教えます」

小鳥ちゃんはスカート（めっちゃ短い）のポケットからメモ用紙を取りだして、渡してきた。

受け取る。

小鳥ちゃんの言う通り、メルアドが書かれている。

「たくさんメールしてくださいね」

えへっ、とまた笑う。

「流々には、教えていいのか？」

「いいですよ。流々ちゃんにも協力を要請します」

小鳥ちゃんは言いながら、うさぎの人形をダンシングさせている。「葡萄会という組織があることについては統二会長が何かを知っているそうなんです、格下のウチではそこまで教えてもらえないんです。多分舞夢先輩は教えてもらってるんでしょうけどねー。ただ、

」

小鳥ちゃんはずさぎの人形をまたぎゅっと抱きしめて、言った。

「以前生徒会が直接人殺しを行った事件というのが、その葡萄会に関わっていたそうですよ」

それでは仕事たまってるんで、と言って小鳥ちゃんはずさぎの人形を撫でながら、去って行った。

「葡萄会……か」

面倒なことになっちゃった。

流々が心配だ。早く帰ろう。

小鳥ちゃんと話していたことが関係して下校時間が短くなってしまったため、下校中まわりに生徒はいなかった。

ああ、小鳥ちゃんのアドレス登録しなきゃ。

そう思ってケータイを取りだす。

メール一件。  
糸井いといふう巫羽。

「巫羽からか」

見る。

[illegible]

「……。はあああああつ!？」

何このメール！？

巫羽頭おかしじゃん！

最近の巫羽はほんとに、熱狂的なんだよな……。

『どうして?』

と返信。

十秒後巫羽から返信

十秒後ツ！？ 早ッ！

『直弥に囲まれて生活したいってことだよ。ほら、直弥って文字の中に一個巫羽って文字があるでしょ？（照れ）』

絵文字は割愛させていただきました。

それと、小鳥ちゃんに空メールを送信。



「ふう」

一息つく。

整理すると、今は夏休みが終了して一週間ほどが経過している。僕も夏休みを経て、大きく成長した（いろいろあったのだ。ま、それはまた別のお話ということで）。みんな（流々、優奈、巫羽……）っていうか男子が一人もないぞ）からは「クールさがなくなってきた」と言われがちでちょっとシヨックなのだが……。でも自分から言わせてもらうと、前々からこんなだったような気もする。ちよつとキャラチェンジがあつたとすれば、長い間更新されなかった＋多作がはさまれたことが原因かもしれない（意味が分からない人が多いだろうな……。うーん、どうにも筆が滑ってる感じた）。

帰宅。

「お兄ちゃんお帰りなさいです！」

元気いっぱいな声がした。玄関に流々がいたのだ。どうやらずっと僕を待っていたらしい。

「ただいま流々。ちよつと話があるから、僕の部屋に来てくれ」

「言われなくても、お兄ちゃんの部屋にはいつも無断で入ってるです」

「それもそうだな」

僕は自室にて、流々に今日小鳥ちゃんから聞いた話をそのまま流々に伝えた。

「そうなんですか。というか、なんで流々たち？」

「それが分からないんだ。とにかく、登下校は僕と一緒にしよう。

登校は毎日一緒だけどさ……」

「そうですね。下校はばらばらですけど、分かりました、明日からは校門のところで待ってます」

「うん。接触つてのが何なのかは分からないけど、危険が及ぶ可能性は十分ある」

といっても、そもそも生徒会からもたらされた情報を鵜呑みにするものかどうかと思うんだけど……。

《葡萄会》なんて、聞いたことないし。そもそも《すべてが謎》  
っていうのがなあ……。

気は進まないが、明日、舞夢ちゃんに会って話をしてみよう。  
今回も、誰か死ぬだろうか。

それは分からない。

僕らの学校は生徒が多く死んでしまったことで、世間様からの評判が  
一気に地に落ちただけれど。

3

夜中、目が覚めた。自分の横顔に、違和感。なんか湿ってる。まるで誰かに舐められたような……。

見ると、知らない女が眠っていた。

「誰こいつ」

あまりの衝撃に、一周まわって冷静な僕。

っていうか本当誰だか分からない。何これ、現実か？ 現実味を帯びていないが、現実感はある。でもちよつとこれは急展開すぎやしないか？ 何で夜中目覚めたら隣で知らない女と一緒に布団かぶってるんだよ。

その時。

ぱちり、と。

女の目が開いた。

「こんにちは冬月直弥」

「……こんにちは」

「大声ひとつあげないとは凄い。私は感動した。私は今裸だというのに」

「裸！？」

「嘘に決まっていると言っのにこの反応。どうやらこいつはアホら

しい」

直後、僕の首に冷たい感覚がした。ひやり、と。

「ナイフだ。動くと洒落にならないので、そのまま聞くが吉。私は貴殿と同じ学校の二年生、座椅川火子だ。ざいすかわかこ《葡萄会》という組織に所属している」

「葡萄会……、というか待て。なんでここにいるんだ」

「それはまた、本質的な問いだな、と私は思った」

なんか、機械的な喋り方をする女子だ。暗闇でちよつと見づらいが、髪の色は赤色のようである。染めているんだろうが、校則違反だ。髪はおよそ女子らしくないほど短い。僕より短いかもしれない。スポーツ刈りをちよつと伸ばしたって感じた。目が大きい。目の色が……赤い？ ああ、カラーコンタクトってやつか。

「さて、私はその窓から入ってきた。隣の家との幅がずいぶん狭い。そこに目をつけた私は、両手両足を二つの家の壁の間に突っ張って、わっせわっせと上がってきたのだ」

「窓の鍵あいてた？」

「あいてたからここにいる」

「……………」

話しずれえ。

「さて、私がこの時間帯を狙った理由はざつと二つある。一つは、夜が寂しかったから」

「はあ？」

何だこいつ。

「もう一つは、この時間帯なら誰にも邪魔されない。生徒会にも」

火子ちゃんが喋るたびに息が僕の顔をくすぐってくる。いちこの匂いがするのだが……、さっきまで飴でも舐めてたのだろうか。両者間は三十センチもない。

「ここで要望がある。私とこうして会ったことを、誰にも報告しないほしい」

「それは要望っていうより、脅しだな」

首にナイフをあてられているのだから。変な汗をかいてしまう（ただでさえ暑いし）。

「頭の回転が速いな、冬月直弥。では本題を始める」

火子ちゃんは僕の首にナイフをあてたままで続ける。冷たい。

「私はリーダーの命令で来た。貴殿とその妹に我々が接触をした理由はざっくり一つだ」

そして火子ちゃんは、核心を述べた。

「生徒会を倒すのを手伝ってほしい」

「生徒会を、倒す？」

こくり、と頷く火子ちゃん。

「でもさ、あと半年で、生徒会の大部分は卒業するじゃないか。ほっとけばいい」

「それも一理あるだろう。しかしリーダーはそれでは満足しない。

貴殿は《論理的じゃない》など考えるかもしれないが、リーダーはこう考えている。生徒会との因縁に決着をつけたい」

「因縁……。その君達のリーダーというのは誰なんだ」

「残念ながら教えるわけにはいかない。そうは問屋がおりさない」

「……で、僕に何をしろと言うんだ」

「生徒会は、君に自分達に協力するように言っているはずだ。我々は彼らに手紙を出している。だから君は、生徒会に嘘の情報を流してほしいんだ」

「どういった嘘を？」

「それはこれから判断する。じきに来る。生徒会と我々が最終決戦をする時が。貴殿はその舞台を整えるための駒として、我々に選ばれた。生徒会に繋がりがあ、生徒会に協力しようと思っていな  
い人間」

なるほどね。

そういうこと、か。

「私もどきどきしています。やっと、やっと、生徒会を　殺せる」

「君は、なんで葡萄会に？」

尋ねると、火子ちゃんは少し眉を伏せた。

「生徒会を恨んでいるから。だって私のお兄ちゃんは、生徒会に、殺された」

「……………」

返す言葉が、ない。

「ま、そういうことだ。では私は寝る」

火子ちゃんは僕の首からナイフを話すと、目を閉じた。  
つておい。

帰れよ。

4

翌日。

朝起きると、火子ちゃんはいなかった。

顔を洗って朝ごはんはんだ。そう思って僕は部屋を出て、流々の部屋へ。

「流々起きろよ。朝だぜ」

流々のベッドに近づくが、流々の姿はなかった。

「もう起きたのか」

僕は下の階に下りた。

しかし、どこにも流々はいない。

結論から言う。

流々は行方不明になった。

・つづく・

## 葡萄会の舞踏会（後書き）

虹那駆並です。

久しぶりの更新です。「臆病者達の放課後」を間にはさんでいたことが理由としてあげられます（「臆病者達の放課後」はとある賞に応募するため、近日削除させていただきます）。

さて「どるどるおどる」です。予定では、今回でこの「くるくるまわる」シリーズは終わります。

この作品はスピード感売りしているので、展開が早いです。急展開の連続です。

このシリーズは好き勝手やってオツケーって個人的に決めてますので、楽しみながら執筆していきたいです。  
では。

## 火子の過去

1

火子ちゃんが昨晚あの後話してくれた内容を思い出す。

「生徒会は、殺さないといけない。絶対に。奴らは高校に行ってもこれから、ずっと同じことを繰り返す。もしくは、もっと酷いことを繰り返す。くるくるまわり続ける」

暗闇の中、火子ちゃんは真面目に語っていた。正直なことを言うとは距離があまりにも近いので結構ドキドキしていたので（これが流々だったら平気なんだけど）、あまり話を真剣に集中して聞くことは難しかったのだけれど。

「先述の通り、私のお兄ちゃんは生徒会に殺された。呆気なく、殺された。理由は、これ以上ないってくらいに、異常あるってくらいに、素朴なことだった。ある生徒が《殺してほしい》って頼んだらしい。それだけだ。その生徒だって、何も本気で殺してほしかったわけじゃないだろう。その生徒はお兄ちゃんと親友だったのだからそれがちよつとしたすれ違いで喧嘩して、それでたまたま偶然それを耳にした生徒会が、その生徒と接触し、半ば強引に依頼をさせたんだ。で、お兄ちゃんは殺された。全身をぐちゃぐちゃにされたんだ。原型をとどめないほどに切り刻まれた」

「……………」

本当の話、なんだろう。信じることはできる。だって僕は一度、生徒会を　彼らを、体験して、体感しているのだから。彼らの滅茶苦茶さを、知ってるのだから。事務的に人を殺す、命を単位と見る、彼らの恐ろしさをこの儚い身をもって、思い知らされているのだから。

「そしてその後、その親友も今はこの世にいない。だってその親友は、生徒会によって《半身》をぐちゃぐちゃにされたから。生徒会

は行為の半分を代償とする。そうやって、依頼側にもリスクを負わせることで、制度を確立した気になっているんだ。でも《全身》と《半身》なんて、どちらにしても《殺す》ってことだろ？ おかしい。おかしいよ。それをマトモだと信じられるあいつらが、本当に怖い。私は、本当に恐れてる、あいつらの思想を　行動を」

火子ちゃんの声は震えていた。悲しみか憤りか恐怖か、その全てか。

夏休み前のあの日も、そうだった。故頃と巫羽を殺す、その半分以上を足す　《半殺し》+《半殺し》　で、流々のことも殺すつもりだった、と。

確かに。

怖い。

あんなことを日常的に行っている彼らが　怖い。

「貴殿は知ってるか？　あいつらが人殺しを行うのは一度や二度じゃないということ。噂じゃ一回人殺しも過去に行った、なんて言っでふざけてるが　そんなものじゃない！　あいつらは事件を全て隠蔽してる！　あいつらは、生徒からの依頼だけを受けているんじゃない、んだ……」

火子ちゃんは声が大きくなってしまったことに気付き、なんとか自分を抑えこんだようだった。

ちよつとの間黙り込んで、また続ける。

「あいつらがお兄ちゃんの親友に半ば強引に依頼をさせたというのも、私はこう考えている　生徒会は実験的感覚、もしくはお遊びで、依頼をさせたんだ。人殺しをしたくて、形式を優先し、人殺しを行った」

……それは、この前の一件と、同じだ。彼らは中山里くんを殺した故頃への復讐がしたくて、流々に依頼をさせた。形式を優先すること、自分達の行動を正当化しているんだ。

そんなことを、普通だと信じているんだ。

とにかく、と火子ちゃんは言葉をきる。



「もうこんな悲劇の連鎖、断ち切らなければならない。葡萄会は、そのために組織された。私達は、生徒会のメンバーを全員、殺す。なかとそとこじ中途外統一。なかのみやまいむ仲野宮舞夢。なかなかなり中奈河可成。なかなあとり仲加奈小鳥。なかはちうちあいと中蜂内愛斗。……中山里反玖はすでに、糸井故頃に殺害されているが」  
ん。

葡萄会はそんなことまで、知っているのか。  
「そういうことだ。協力してくれ、冬月直弥。今回我々は、生徒会を潰す。全員殺す。それでは生徒会がやっтерることと同じじゃないのか　だなんてうざったいセリフは効かない。そんな次元じゃないんだ。私達の怒りは、理屈じゃないんだ」  
ではおやすみなさい。

そう言って、火子ちゃんは再び目を閉じた。  
数秒して、すーすーと寝息をたてる。  
ありやりや。

2

僕は午後から、学校に行くことにした。こんな状態でよく学校にいけるな、と思われそうだし、実際両親や警察はそう思っているみたいだが、そんなことはどうでもいい。

僕が学校に行くのは　流々を見つけるためだ。

流々の行方不明には確実に、葡萄会が関係している。  
だいたい、冷静になってみる。

火子ちゃんはどうやって《生徒会は強引に火子ちゃんのお兄さんの親友に依頼をさせた》という情報を、手にしたのだ。

火子ちゃんの話には、おかしな点がある。

ようは、嘘だったのだ。

僕は眠気のせいか変にドキドキしていたせいか、騙された。  
失態だ。

しかも結局あの後寝てしまった。

流々は、騙されたのか無理やりなのか知らないが 誘拐されたのだ。

火子ちゃんに。

葡萄会に。

「しくじった……」

火子ちゃんに直接会うしかない。

そう思っ僕は登校して、

下駄箱を開けて、

そこに手紙が入っていることに気がついた。

『冬月直弥へ。』

ありきたりな手段で申し訳ないのだが、  
しかし使い古された手というのはやはり効果的だと思う。  
妹を返してほしかったら、

夜、

日付が変わる時に、この学校に来なさい。

一人で。

一人で、だ。

仲間を集めるだなんて愚かな真似は、よせ。

その瞬間、妹は殺す。

容赦なく。

では、待っている。

葡萄会一同より。』

啞然とした。

呆気にとられているその時、

「はろー直弥先輩」  
と。

「小鳥ちゃん？」

生徒会会計 仲加奈小鳥の姿がそこにあった。

やはり、ぼろぼろのうさぎの人形を、抱いている。

「うん、そうですよ。さてその手紙、先程ウチ、読みました」

「……………」

ざいすかわ

「座椅川火子は、欠席していますよ」

「ッ！ な、なんで、それを？」

火子ちゃんのことを、知っているんだ。

「舞夢先輩が、昨日ずっと直弥先輩の家に張り込んでいたんです。

ウチは無意味なことやってんなー、って思っていました。が、なんと座椅川火子が直弥先輩の家に忍び込んだところを目撃したようです」

僕は、何も言えない。

圧倒的、すぎる。

「ただ、出てくるところは目撃していません。おそらく座椅川火子は流々ちゃんを連れて、裏口から出たようです。ちなみに侵入は、姫宮家と冬月家の近距離の壁を使ったようです。窓の鍵、開いてたんですね」

小鳥ちゃんはうさぎの人形を撫で撫でしながら、にこにこはきはきと話す。

「で、次はウチの手柄です。流々ちゃんを誘拐した葡萄会は必ず直弥先輩に接触するはず。しかし直接接触するのは危険です。何故なら、直弥先輩は流々ちゃんを葡萄会に誘拐されたと思っているはずなんです。ああ、座椅川火子が葡萄会であるのは、間違いないだろうというのが生徒会の考えですよ」

そして小鳥ちゃんはぴょんと一飛びで僕のところまで来て、僕の手をとった。

「行きましよ、生徒会室へ。授業なんて、受けるつもりないでしょ？」

3

「ようこそ直弥くん。生徒会室に来るのは二度目ですよ。一度目

は良い思い出ではなかったかもしれませんが、過去のことなんて気にいなくていいのです。今気にすべきは火子のことですよ。座椅川火子。葡萄会のメンバーで間違いないです」

まず目に付いたのは、正面に向き合うように置かれている机に肘をついて椅子に座っている、生徒会長中途外統二の姿だった。

「お久しぶりです、冬月直弥くん。仲野宮舞夢です。妹さんが不運でしたね。果たして生きてるんだか、死んでるんだか」

右手に仲野宮舞夢。ペロペロキャンディーをなめている。目の下にクマができていた。

「……………」

無言なのは左手の仲奈河可成。もはや僕のことすら見ていなかった。天井を見ている。

そして右手、舞夢ちゃんよりも手前には、初めて見る生徒。

「あつ、えーつと、僕？　僕がなんか言う番？　あーつとね、えー、えー。えつと冬月くん？　ああ、僕は中蜂内愛斗……………です。初めまして？　ん？　ああ、終わり。終わりですよ。誰か喋って。僕の番終わりましたからっ」

めっちゃ拳動不審だ。どうやら二年生らしい。こんなのも生徒会に入れるのか……。なんというか、滅茶苦茶ワキ役っぽい奴だった。人数合わせ、みたいな。

外見としては、これまた変だ。制服の上から、フード付きのコートををはおっていて、フードも被っている。

「さて、本題から行きましょう直弥くん。状況を整理する必要なんぞ、ありませんよね？　無駄は省きます。人間でも、それは重要。増えましたから、人類。　だなんて話するとかじゃ自殺するところから始めよっかって感じですが……。今晚、もちろん行くでしょう？　冬月直弥くん<sup>シスコン</sup>」

「当然だ」

即答した。

「ですよねえ。では僕らも行きますよ。おっと、分かってますよ。」

その手紙、我々も読みましたから。一人で来い、って書いてますよね。でないと妹を殺す、と。しかしですよ、相手の立場になって考えましょう。小学校で、習ったでしょう？ ま、人の気持ちになって考える、だなんて本質的には誰にもできない。そのためには、その人にならないといけない。屁理屈ですか？ しかし理屈です」

「お前の話は無駄が多いよ。いいから早く結論をよこせ」

「おやおや言われちゃいましたねえ。弟には《回りくどさが兄ちゃんの味だ。いいところだ》ってよく言われたもんですが」

その時、舞夢ちゃんの眉がぴくっ反応した。のを、偶然目の端にとらえた。気がする。

「詰まるところですね、葡萄会は冬月流々を殺せないのですよ。だって、葡萄会は冬月流々を人質としているのです。人質が死んでは意味がないでしょう？ それにこの場合、あなたと一緒に行くのは我ら生徒会です。彼らは冬月流々を殺した瞬間、僕らに対するアドバンテージを失う。こんなことをする連中が大人数であるとは僕は思いません。精々十人が限界。そして我ら生徒会は百人力です。勝敗は目に見えていて、火を見るより明らかなのですよ」

「……なるほどな」

確かに、その通りだ。

ただ、僕は今不思議に思っていることがある。

何故僕を呼んだのか、だ。

彼らの目的は生徒会を倒すことだったんじゃないや

いや。

それは、火子ちゃんが言っていたことが。

嘘か。

流々を誘拐するのに必要だった方便みたいなもの、か？

それとも僕をこうして混乱させ、なんとしてでも今晚学校に来させるようにするため、か？

「葡萄会の行動は謎が多いです。小鳥から聞いていると思いますが、彼らは生徒会に手紙を渡している。不可解な行動が実に多い。しかし、今晚全部、聞きだします」

どんな手を使ってもね、と。

中途外は笑った。

僕は内心、戸惑う。

生徒会なんかと協力しあって、いいのだろうか、と。

これは僕が何か依頼しているわけではない。従って、代償は発生しないかもしれない。

ただそういうことじゃなくて。

こんな気違い集団と行動を共にするなんて。

昨日の火子ちゃんの話は嘘である可能性が高いが、それでも、生徒会は異常だ。

流々も、殺されかけた。

今回だって、僕はこれからこいつらに、いいように利用されるだけなのじゃないだろうか。

拳句の果てには 死？

しかし。

今は。

一人では。

それに集団で行くとなると。

僕がすべきことは。

「分かった」

僕は中途外を、睨んだ。

「ついてきていいよ」

4

夜中。

僕は家を抜け出した。

僕の家の前には、生徒会メンバーが全員、集結していた。

全員制服だ（愛斗くんはやはり昼間と同じコートを着て、フードを深くかぶっている）。

「では行きましょう」

中途外は言って、歩き出した。

「武器は何か持ってきましたか？」

隣から舞夢ちゃんが尋ねてきた。彼女は口の中で飴玉を転がしているようだ。ころころ、と。ころころころろってという言葉が浮かんだ（いといいとじゃなくて、そうするべきだったかもしれない。殺殺故頃）。

「包丁一丁」

「そうですか。まあ、最低限できてる、って感じですかね。ああ、飴欲しいですか？」

「うん」

いつだかのように口移ししてくれることを期待したが、普通にポケットから飴玉の袋を取りだして渡してきただけだった。

舞夢ちゃんから貰ったサイダー味の飴（思ったより普通だ）を口の中で転がしながら、学校に向かう。

可成くんは露骨にバッドを持っていた。

「ああ、オレはさ、こいつじゃないと戦うって気がなくてさ。まったくお呼びじゃねえって訳じゃねーが、面倒だよなあ。まあ統一によるとさ、葡萄会ってのは前々からうざかったらしくて、今回は良い機会だから潰しておくみてーだな。ハッ」

「可成くんは、葡萄会についてどのくらい知ってるの？」

「あん？　ほとんど何も知らねーよ。俺が知ってんのなんて戦い方と統一のことだけだ」

「そう」

この子もこの子で、会話しにくい。

まあ、慣れ合うつもりは毛頭ない。

そうして、到着した。

夜の学校は、暗闇の中に、沈んでいた。

昼間よりも、巨大に見える。

正々堂々、校門から、侵入する。

門を乗り越えている辺り、正々堂々って訳でもないけど……。  
その時。

「葡萄会が一員、否、一因 黄泉<sup>よみ</sup>蛭谷<sup>むしや</sup>。名前は記憶しなくてよい。  
これは形式的なものだから」

脇の木の陰から、ゆらりと。

男子生徒が一人、現れた。

ニット帽をかぶった男の子。僕の知る顔ではなかった。

「やはり生徒会と共に来たか」

「どこに流々がいるんだ」

僕はすかさず訊いた。

蛭谷くんは頭をぱりぱりと搔くと、答えた。

「屋上だ。北校舎の屋上」

答えた直後

ドスッ。

蛭谷くんの胸にナイフが、押し込まれた。

舞夢ちゃんが、刺したのだ。

蛭谷くんは、倒れる。

「ナイフがこの場合栓になりますからね、返り血はあまり出ないんですよ。知ってました？ 冬月直弥くん」

「いや……」

「こんな、簡単に。」

殺すのか。

蛭谷くんの激しい息づかいが、聞こえる。

「もう死にますよ、あなたは」

舞夢ちゃんは冷静に蛭谷くんに告げると、またこちらに向く。

「行きましょう」

「うん」

他の生徒会メンバーは普通に、何もなかったかのように相づちを



打つと、歩き始めた。

僕は戸惑い、一瞬、動けなくなる。

蛭谷くんは、まさに命の灯が消えるというこの時、涙を流していた。

僕も、蛭谷くんから目を背けて、前を向く。

震わせたままの足で、生徒会のあとを、追った。

・  
つづく  
・

## 生徒会の性と解

1

昇降口の鍵は開いていた。葡萄会が開けたのだろう。

「普通に階段を上って行けばいいのでしょうね」

中途外はそう言いつつ、廊下を北校舎へ進む。僕らも後に続く。

「浮かない表情ですねっ」

そう言つて小鳥ちゃんは僕の腕に絡みついてくる。

「ん？ いや、そんなことないけど」

実は内心、戸惑っている。

先程、葡萄会からの刺客を、舞夢ちゃんは平気で、慣れた風に、殺した。

死体をあそこに、放置して。

やはりこいつらは、違う。

間違っている。

…… っていうか小鳥ちゃんが無駄に先程からまとわりついてきて、正直歩きづらいんだけど。

階段を上る。このまま登って行けば、屋上だ。

しかし、そう簡単にいくはずもなかった。

三階と四階の途中の踊り場にて。

「来たね生徒会。悪いが一人、ここで私と戦ってもらう 命がけでね」

今回は、知っている顔だった。

座椅川火子。

火子ちゃん。

「おやおや、座椅川火子ですね。どうします？」

中途外がこちらに振り返る。

「要求通りにしてもらえないならば、私は逃げる。さすがに二人以

上は相手にできない。逃げ足には、自信がある」

火子ちゃんはそう言う。

僕は火子ちゃんを睨んでいたが、火子ちゃんは僕のことは見なかった。

こいつが、流々を誘拐したはずなのだ。

しかしここは、冷静でいないといけない。

僕は流々を助けに来たのだから。

こいつと戦うためでは、ない。

それも、命がけの勝負なんて、するつもりじゃ、ない。

「先輩方を煩わせてられないよ。ウチがやるうか？」

ここで率先してそう言ったのは小鳥ちゃんだった。

しかし、その言葉を、意外な人物が遮る。

「僕がやるよ」

中蜂内愛斗くんだった。愛斗くんの手には、ブコツなナイフ。

「先輩方、小鳥ちゃん、冬月先輩、行ってて。こいつ殺してすぐ行く」

「うん、よろしく頼みますよ愛斗」

中途外はそれだけ言って、階段を上がって行ってしまふ。皆も、それに続く。

ああ、やっぱり愛斗くんも、生徒会なんだな、と思った。

「じゃあてめえ、座椅川火子だっけか？」

愛斗くんは別人かと思うくらいに格好良く言葉を発しながら、フードをとって、ナイフを真っ直ぐ、火子ちゃんに向けた。

「もうちよつとで残念ながら、badbye」

それを受けて火子ちゃんも、ナイフを愛斗くんに向ける。

「no,you,yes,life」

僕はその光景にすっかり見とれてしまっていたが、誰かに手をとられて、我にかえる。

「行こ、浪斗先輩」

「うん」

小鳥ちゃんに手をひかれ、僕の階段をのぼった。

「愛斗くんはあれでもね、可成先輩の次に強いんですよ」  
「へえ」

でも、ちょっと複雑だった。

だって、もう少しで彼らの内、片方は 死ぬのだから。

僕も今まで、罪深いことは、してきた。

姫宮楓と津辻優奈を操り、春風蒼波を殺した。

自分の都合で、朝片翔伍を殺した。

でも。

最近、思うんだ。

これでも結構、後悔してるんだ。

生徒会を体感して、

なんか、

考えさせられた。

こんな簡単に命が消えるのって、どうなんだろう、って。

流々が殺されそうになった時、思ったんだ。

誰だって、殺されていいはず、ないんじゃないかって。

僕も人の命を、軽んじていたことがある。

今も一部、軽んじているだろう。

だけど、なんかさあ。

こんなのって、違うんじゃないのかなあ 　　って。

思う。

気持ち悪い。

屋上の扉を、中途外は、開いた。

屋上に、出る。

果たして。

流々がいた。

流々が一番最初に、目には行った。

十三年前に出逢い、ずっと一緒に暮らしてきた、唯一無二にして  
かけがえのない、妹の 流々の姿が。

続いて、そのまわりに数名の生徒がいるのが目に入る。八人……か。

「お兄ちゃんっ！」

流々が僕を呼んだが、直後、生徒のうちの一人に口を塞がれて、黙らされた。

「流々っ！」

頭の中が真っ白になって、視界が真っ赤になって。

走りだそうとした僕を、しかし、小鳥ちゃんが止めた。

腕を掴んで。

「駄目ですよ直弥先輩」

「……………」

僕も少ししてから、冷静さを取り戻して、頷く。

「どうやら生徒会を連れてきたようだね」

一人の男が、口を開いた。

こいつは見たことある。

三年だ。

名前は何だったかな……………。

「葡萄会。井伊口綿留。いいくちわたる大丈夫、一人で来なかったからと言ってこの子を殺すことはしない。だってこれこそが我らの狙いだっただから」

「ああ、やっぱり、綿留くんですか……………リーダーは」

中途外が、不気味な笑みを浮かべる。

やはり、中途外は葡萄会について、知っていたのか。リーダーの見当がついていたのか。

しかし、井伊口は首を横に振った。

「いいや、違うよ。ただ、僕も君らを恨む一人だ」

「それはおかしいんじゃないですか？」

口をはさんだのは舞夢ちゃんだった。

「だってあれはあなたにとって決して有益でないものではなかった。何故あなたが私達へ恨みを抱くのか、理解に苦しみます。それは筋

違いはたまた思い上がりというものではありませんか？」

「うん、いわれもない復讐ほどうざったらしいものはないと僕も思いますよ、綿留くん」

中途外も続く。

まったくだ。こちらとらまじで感心しねえ　という、可成くんの

呟きも聞こえる。

「分からないだろうね、君らには。分かるうともしないのだから。

黄泉くんはどうした？」

「黄泉くん。ええっと、あの子ならもう死んだんじゃないでしょう  
か」

中途外は悪びれずに言う。

「心臓に外れたみたいですが、出血多量ですからね」

舞夢ちゃんもしれっとしている。

僕は居心地が悪くなった。

僕のすぐ左側では小鳥ちゃんが、うさぎのぬいぐるみをぶらぶら  
とぶら下げている。

「……………仲野宮、」

「おっと、この件で恨まれるのも困ります。その黄泉という男子が、  
あまりに間抜けだったのがいけないでしょう。生徒会に対しようと言  
うのなら、命の危機は常に存在することを覚悟していなければな  
らない。認識が甘かったんじゃないですか？」

「……………まあ、分かっていると思うが、我々の目的は君ら生  
徒会を倒すことだ。そのために、冬月直弥に接触することを手紙で  
知らせた」

井伊口は僕を指さす。

「しかし回りくどいことをしましたよねえ。何故冬月兄妹を巻き込  
んだのか不明ですし、直弥くんが今晚のことを我々に相談しなかつ  
たらどうするつもりだったのですか？　うちの小鳥が直弥くんの下  
駄箱を確認していなかったら、僕らはここにいなかったでしょう」  
「すぐに分かるさ。我々葡萄会は生徒会を殺す機会をずっと待って

いた　過去に一度失敗して大勢の犠牲を払ったから、今回は慎重にやっているつもりだ。ここでネタばらしをするよ」  
ぐっ、と。

小鳥ちゃんが僕を自分の方に腕を引いて引き寄せた。

「？」

小鳥ちゃんは僕を見ている。

井伊口は告げた。

「冬月流々は葡萄会メンバーだ」

「なッ　　！？」

声をあげたのは、僕だった。

僕だけだった。

「ッ？」

他の生徒会メンバーを見るも、誰一人として、驚いた様子がない。  
何故だ？

それに流々が、葡萄会？

流々はすでに口を塞がれてはならず、普通に葡萄会の連中と一緒に立っていた。

「お兄ちゃんっ、こっちに来て！」

流々が叫ぶ。しかし僕はすぐに反応することができなかった。

その隙に。

首に腕がまわっていた。

「……………」

ナイフの冷たい刃が頬にあてられる。

「動かないでください、直弥先輩」

背後から驚くくらい冷たい、小鳥ちゃんの声。

「お兄ちゃんっ！」

「直弥くんっ！」

井伊口も叫ぶ。

何だ？

どういうことだ？

混乱。

「残念でしたね井伊口くん。まあ所詮シロウトが考えることです。こちらを混乱させる、奇をてらった無駄なシナリオ。ですがね、ナセンスです。僕らに通じるはずがない」

くっくく、と笑う中途外。

井伊口は目を見開き、動けずにいる。その他の葡萄会のメンバーもそうだ。

「お兄ちゃんっ！」

流々の声が、ひどく遠くから聞こえる気がする。

「冬月流々が葡萄会もしくは葡萄会の協力者、というのは簡単に分かります。だって、冬月家から冬月流々を誘拐することはどう考えても難しい。眠っている隙に連れだしたのでしょうか？ いいえ、そんなことができますかねえ？ 座椅川火子一人で。つまり、冬月流々は座椅川火子と共に裏口からこっそり家を抜け出したのです。君達の計画としては、今この状況で、冬月兄妹も葡萄会側にまわり、僕らを一斉にたたくこと。しかしそんなところだろうというのは、十分予想できたのです。だから直弥くんを捉えられるよう、さきほどから小鳥に常に見張らせておきました。これで状況はこちらに優勢です。だって、こちらは冬月直弥という《人質》がいるのですからね。今更冬月流々を人質にしても無駄ですよ。彼女が葡萄会なのは分かりました。もうこちらの勝ちです」

中途外が話している間も、僕は必死に考えていた。

小鳥ちゃんから逃れる方法。しかし、思い浮かばない。少しでも妙な動きがあれば、すぐに殺される。

人質だと言っているが、僕が不在でも十分生徒会は葡萄会に勝てるのではないだろうか、と思う。

悪いが、葡萄会はまったく無駄なことをしてくれた。

訳が分からない。変に複雑にして、成功率も低く、大事なところ



が穴だらけの計画だ。

流々も、なんでそんな奴らに。

お前ならもつと頭の良い方法を考えられたはずだ。

だいたい、最終的には力づくの戦いをするつもりなんじゃないか。途中で火子ちゃんを配置したり、変に流々や僕を絡めたり、まった

く 阿呆だ。

本当、理解に苦しむ。

何がしたいんだ。

生徒会に何か因縁があるのは分かった。

そういう人たちはきつと、たくさんいる。

あの火子ちゃんの話だって、まるつきり嘘という訳ではなかったのだろう。

そのあたりは分かる。

でもこんな方法……。

と、その時。

ギイイイ……

屋上の扉が開いた。

「火子ッ！」

葡萄酒会のメンバーが口ぐちに叫ぶ。

初めに見えたのは、フードを被った愛斗くん。服は赤い血に染まっていた。

そして次に見えたのは、愛斗くん服の襟を掴まれ、引きずられる血まみれの赤い髪 火子ちゃん。

「火子ちゃん……」

どさつ、と。

火子ちゃんは捨てられた。

ゴミみたいに。

「んー、上出来ですよ愛斗。少しやられましたか？」

愛斗くんの持つナイフは、火子ちゃんの血で真っ赤に染まっていた。

「火子ちゃんっ、いやああああああッ  
流々の声も聞こえる。」

「……………」  
何なんだ。

何なんだ、これは。

もう、意味が、分からない。

何故か。

本当に何故か、分からないけれど。

涙が頬を伝うのが分かった。

僕は泣いていた。

なんでこんなことに、なっているんだ。

僕も、今までに、人を殺したことがある。

人が死んだのに、どうにも思わなかったことがある。

そんな自分が、ひどく、嫌いになった。

胸が痛い。

生徒会は、これを普通だと思っている。

滅茶苦茶だ。

脳みそに手を入れられ、ぐちゃぐちゃに混ぜられたかのような、  
感覚。

愛斗くんの動きはふらふらとしていて、おぼつかなかった。

「愛斗にしては手こずったようだな……………」  
ん？」

可成くんが、怪訝そうな顔をした。

直後 愛斗くんが動いた。

中途外に、倒れかかるようにして

「統一ッ！」

舞夢ちゃんの声がする。

ドスッ。

「……………」  
あ？」

。 静寂

世界が一瞬、停止したようだった。  
理解が、追いつく。

愛斗くんが中途外の脇腹をナイフで刺したのだ。

「お前……！」

可成くんがバッドを振り上げようとした  
その時に、可成くんの背中から、大量の血が噴き出した。  
僕の首には、もう腕はまわっていなかった。

「小鳥、あなたッ！」

舞夢ちゃんの声。

可成くんの背中を切りつけたのは小鳥ちゃんだった。  
しかし可成くんは倒れなかった。

振り返って、

小鳥ちゃんに殴りかかろうとする。

そこに今度は愛斗くんがタックルする。

「ん？」

違う。

愛斗くんじゃない。

フードのとれたその姿は 火子ちゃんだった。

扉の前で倒れている赤い髪は、かつらだと、気付いた。  
可成くんの屈強な体が吹っ飛ぶ。

見ると、葡萄会の全員がこちらに駆けてきていた。

意味が分からない。

僕は立っていることしかできなかった。

「統一ッ！」  
とっいち

舞夢ちゃんは、床に倒れている中途外を抱きかかえていた。

「統一ッ！」

中途外は、そんな舞夢ちゃんの髪を撫でる。

「その名前で呼ぶなよ……舞夢」

声が小さくて、よく聞き取れない。

舞夢ちゃんは泣いていた。

「駄目っ、統一！ 駄目っ！」

「ごめん……」

中途外は穏やかな表情だった。

「なあ舞夢、」

「統一？」

「オレは間違っで、なかったよな」

舞夢ちゃんも、泣きながら、笑った。

「うん。統一は、ずっと、正しかったよ」

ありがとう。

そう言っで、中途外の手が、床に、落ちた。

舞夢ちゃんは中途外の胸に顔をうずめる。

そこに、ナイフを持った井伊口が襲いかかるうとしていた。

僕は咄嗟に、動いた。

無意識で、本当に何故動けたのか分からなかったが、

井伊口を突き飛ばしていた。

「やめろッ！」

僕は叫ぶ。

「止まれお前ら！」

喉が破れるくらいの大声だった。

見ると、全員、その場で止まっていた。

「やめるんだ……」

また夜の静寂があたりを包みこんでから少しして、遠くから街の喧騒がかすかに聞こえるようになった。

・  
つづく  
・

## ラスト・トラスト

1

葡萄会のリーダーは仲加奈小鳥であった。

そう考えれば、いろいろな謎が解けた。

まず、何故葡萄会は回りくどく生徒会を巻き込むような方法（それも成功率が低い）をとったのか。それは、生徒会を内側から小鳥ちゃんが操作することができたから。現に、彼女は葡萄会が僕の下駄箱に入れた手紙を発見したり、屋上にて僕を捕獲する役割になることによって逆に僕を保護したり、火子ちゃんと対決するのをフードを常に被っている愛斗くんになるように誘導したりしている。

小鳥ちゃんは生徒会の中で最弱、だそうだ。

なのであそこで小鳥ちゃんが火子ちゃんと戦うことを言い出せば、二年生である愛斗くんが最終的に戦うことになるに分かっていた。

さらに火子ちゃんが言っていた、あの根拠のない話。あれも、生徒会メンバーである小鳥ちゃんに直接聞いていたのだから、知っていて当然だ。

火子ちゃんは葡萄会きつての武道派であるそうだ。葡萄会の計画で一番の難点だったのは、火子ちゃんと愛斗くんの戦いだったのだろうということとは想像に難くない。

今回、僕や流々が中心的に使われた理由は、生徒会をそちらに注目させること。そのおかげあって、生徒会長中途外を、愛斗くんになりすました火子ちゃんが殺すことが容易になる。それをきっかけに全員で生徒会を襲えば、葡萄会の勝ち、と。

それと、手紙に屋上と書かないで、黄泉くんが校門にすることが必要になった理由。それは保険的な内容であったのだろう。屋上だと事前に分かれると、先回りされるなど、対策を練られる可能性があるから。

ちなみに流々を葡萄会に引き入れたのは小鳥ちゃんだった。葡萄会のメンバーを集めたのはすべて小鳥ちゃんによつたらしい。だって、小鳥ちゃんは生徒会メンバーなのだから、生徒会の被害にあった人々をすべて知っているのだから。

「ウチは生徒会に一番最初に《依頼》をしたんです」

小鳥ちゃんはそう言っていた。

「ウチはその時まで小学校六年生で、親友と喧嘩しちゃったんです、恋愛絡みの喧嘩だったんですけど。そんなウチにあの、舞夢先輩が話しかけてきて。彼女はその時中学一年で、正式に生徒会ではなかったんですけど、中途外統一、仲野宮舞夢、中山里反玖、中奈河可成。この四人はその頃からつるんでいて、生徒会を名乗っていたんです。私は喧嘩してなんとかしたいって《相談》したんですけど……、次の日、親友は死にました。車に轢かれて事故だったんですけど。もちろん、生徒会がやったんです」

そして小鳥ちゃんは生徒会に相談をしてしまったことを悔やみながら中学校に上がり、声をかけられたという。

生徒会に入るように。

話では、中山里くんのお気に入り小鳥ちゃんだったようだ。それに小鳥ちゃんの家はお金持ちだったのも理由だろう。

小鳥ちゃんは生徒会の活動に、協力を余儀なくされた。

小鳥ちゃんはすぐに確信したという。

生徒会は破滅させなければならぬ、と。

小鳥ちゃんは葡萄会を組織した。自分が裏切ったことを気付かれないように注意しつつも最初に実行した計画は、失敗した。葡萄会はそのほとんどのメンバーを失ったという。そのメンバーは他地域の人々だったらしい。初期葡萄会は、他地域での被害者に限定したということだった。理由としては、その方が感づかれにくいからなのだろう。

しかし、失敗。小鳥ちゃんは自分の保身を気にしたせいで犠牲者を増やしてしまったと考え、自己嫌悪に陥る。それと同時に、打倒

生徒会への執念を燃やす。

その果てに実行されたのが今回の計画だった。

結果としては、成功というべきか、失敗というべきか、怪しいけれど。

黄泉蛭谷くんは舞夢ちゃんに刺されたし。余談だが、黄泉くんは僕の学校の生徒ではなかった。

僕は小鳥ちゃんの計らいで、罪を逃れた。三日前の晩に起きたあの事件は、すべて小鳥ちゃんが罪を一手に引き受けたのだった。

2

僕は駅前のファーストフード店だか喫茶店だか判然としない店にいた。優奈や巫羽ともここで、それぞれが関わった殺人事件の幕引きとして、ここで会話したのを覚えている。

今回僕の正面に居るのは、すっかり憔悴した姿の仲野宮舞夢だ。

「統一には、統一という弟がいました。私達がやっていた生徒会活動とは、その統一がやっていたことの繰り返しみたいなものです」

舞夢ちゃんの話では、生徒会長中途外統一の本名は、統一というらしかった。しかし、生徒名簿でも彼は統一という名前で明記されていた。それは、彼の両親の権力的なものが利用されているらしい。「統一は統一の活動に否定的でした。しかし、統一が小学校六年生の時、統一が暴力団の連中に集団暴行を受け、結果、死んだんです。暴力団の連中は殺すつもりはなかったと弁解していましたが……」

逆上した統一は可成と共に、暴力団を壊滅させました」

舞夢ちゃんは口の中に何かいれていることはなさそうだった。声からも張りが失われている。

「私と統一と反玖は幼馴染です。可成は小学校五年生で仲間に加わりました。可成は当時、孤立した不良だったんです。ある日、可成を気に入っていない中学生の不良集団が、可成に暴行を振るうとしました。そこに通りかかった統一が、可成に協力したんです。まあ、



二人ともぼこぼこにされたそうですが……。その時からですね、可成が統一を慕い、私達と行動を共にするようになったのは。可成はずっと孤立しているような子でしたから、理解者である統一の存在が嬉しかったんでしょう。可成は生徒会の中で唯一家庭に不和を抱えていましたから。父がおらず、母が一人で育ててるんですよ」

「で、中途外は何故生徒会を？」

「死んだ弟の影響です。弟の気持ちを理解するため、統一は活動を始めました。冷静になって考えてみれば、統一は変わりましたね、弟の死をきっかけに。私達も、統一が好きでしたから……。協力しました」

「へえ」

で、歯止めがきかなくなった、と。

それを、小鳥ちゃんが葡萄会を組織して、止めたわけか。

「とんだ愚か者でしたよ、私達は。遅すぎましたけど」

「うーん、償いつつても、手遅れだね、確かに」

生徒会については、もう、救いようがないかもしれない。

あんな恐るべき活動を日常にしていた彼らは。

「これからどうするの？」

「……普通に、生きていきますよ。まだ人生は、まわりつつけるのでしょうし」

「うん、それがいいよ」

とにかく、生きてればこそ、だ。すべて。

「本当、どうしたものでしょうね……」

舞夢ちゃんは溜息をつく。

「これ、いる？」

僕は舞夢ちゃんに、チュッパチャップスをひとつ見せる。

舞夢ちゃんにはにこりとした。

「ありがとうございます。それ、大好物なんです」

舞夢ちゃんは受け取る。慣れた風に包みをはがして、すぐに口にいった。

「ただ、まあ、良かったんじゃ、ないかな」  
僕は曖昧な意見を述べた。

「今回の事件は誰も死ななかったんだし」  
なんとか全員一命を、とりとめたのだから。

3

流々も気分が優れていないようだった。

「ごめんなさい、お兄ちゃん。勝手なマネして……」

流々は僕の部屋に来ていた。椅子に座る僕の前で、唇をかみしめている。髪ツインテールでなく、何も縛っていなかった。

僕はそんな流々を、責めることはしなかった。

「心配したよ、本当……良かった」

「お兄ちゃん……」

流々の目ははれていた。ずっと泣き腫らしていたのだろう。流々には殺人なんか協力しないよう、楓の件以来ずっと言っていたし、あの晩僕は殺人をやめさせた訳だから、自分の行動のせいで僕に嫌われることを恐れていたのかもしれない。

「ありがとうございます」

流々も久々に、笑った。

まあ、生徒会も葡萄酒会も、これでやっと、止まることができたのだろう。

そしてこれからまた、違う回り方を、していくのだろう。  
その人生を精一杯、目一杯に、生き抜いていくのだろう。

僕らは、まわりつづける。

《\$\$\$おどる 終わり》  
《物語はおわる。人生はつづく》

## ラスト・トラスト（後書き）

最後まで『くるくるまわる』を読んでくださり、ありがとうございました。

これにて、完結であります。

どこかでずれてしまい、止まらなくなってしまった《彼ら》が、やっと止まり、また正しくまわるできるようになった。そんな物語でした。

ちなみに\$\$\$おどるですが、どういう意味かと言いますと、生徒会の頭文字のSが串刺しになっています。「だから何？」って感じですよ。それでは。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8744m/>

---

くるくるまわる

2011年3月30日10時25分発行